天理市埋蔵文化財調査報告　第3集

前栽遺跡（第2次）

——弥生時代から鎌倉時代遺跡の調査——

1987

天理市教育委員会

序　　文

この発掘調査は，天理市田井庄町295の１番地において，アパートメント建設にともなう事前調査で，この地域一帯には約200,000㎡におよぶ，周知の前栽遺跡があって，天理市前栽町，杉本町，富堂町等包含し，須恵器片，瓦器片，土釜片などの遺物が散布している。

この場所より西北約300ｍには第１次調査を実施した天理市立前栽小学校，西約600ｍには平等坊・岩室遺跡があり，北東約650ｍには九ノ坪・シマダ遺跡があって，縄文時代晩期から室町時代に至る遺物が出土している。今回の場所も遺構の存在することが十分考えられ，開発に先立ち，開発行為者側と協議を重ねた結果，施主のご協力によって，建設予定地内1,200㎡の内の南側に東西13ｍ，南北25ｍ（325㎡）の調査区を設定し，調査を実施した。

限られた調査区域であったが，この調査によって他に類例のない木製匙，さらに黒色土器の解明にかかすことのできない資料の出土などがあって，誠に意義深い調査であった。

最後にあたり，発掘調査開始からここにまとめられるまで，多くの方方のご指導とご協力をいただいたことに対し，深く感謝申し上げ，この書が多くの研究者へ貢献しながら，次の展開を祈念してやみません。

昭和62年３月

天理市教育委員会
教育長　苣　原　　薫

例　　言

1．本書は天理市田井庄町295の１番地における前栽遺跡第２次調査の報告である。弥生時代前期より鎌倉時代にかけての遺構，遺物を検出した。出土遺物，図面，写真等は，教育委員会で保管しているので，これも併せて活用していただければ幸いである。

2．現地調査は，社会教育課　泉　武が担当し，山田圭子が補助した。

3．遺物整理，実測図作成等は，埋蔵文化財整理棟の滝本富美子，巽　信子，梶山由美子，吉村とも子と高田博司，松浦康子，橋本和子，松原理恵の学生の協力を受けた。本文のうち井戸跡２出土の黒色土器は山田圭子が記述した。他と編集は泉　武があたった。

4．井戸跡の花粉分析は，天理大学附属天理参考館　金原正明，泥炭層放射性炭素年代の測定は，学習院大学　木越邦彦の各氏に依頼し，黒色土器については，奈良国立文化財研究所　巽　淳一郎氏に御教示いただいた。また，各調査機関の方方より有益な御教示を得た。記して感謝を致します。

5．本文中の遺構名称略記号は，溝跡をＳＤ，井戸跡をＳＥ，土坑をＳＫとして使用した。

前栽遺跡（第２次）調査報告

目　　次

序　　文　　天理市教育委員会　教育長　萱　原　　薫

例　　言

第１章　調査の契機と経過……1

第１節　調査の契機……1

第２節　調査要項……2

第３節　調査の経過 －調査日誌－……2

第２章　遺跡の環境……5

第１節　遺跡の環境……5

第２節　前栽遺跡周辺の古環境と栽培植物……（金原正明）……5

第３節　歴史的環境……11

第３章　調査の記録……14

第１節　調査の概要……14

第２節　上層遺構……16

１．井戸跡１……16

２．井戸跡２，３……19

３．井戸跡４……25

第３節　下層遺構……33

１．弥生時代溝跡……33

２．土　　坑……36

３．溝状遺構２，３……36

４．包含層出土遺物……41

第４節　前栽遺跡（第２次）泥炭層放射性炭素年代測定結果報告……（木越邦彦）……45

第４章　ま　と　め……46

第１節　奈良県内出土の黒色土器……（山田圭子）……46

第２節　木製匙について……（泉　　武）……52

図 版 目 次

（本文対照頁）

図版1　前栽遺跡（第2次）　花粉・種子……5～11
図版2　前栽遺跡（第2次）　上層遺構，井戸跡1……14～19
図版3　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2……19～25
図版4　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2，曲物……19～25
図版5　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4……25～33
図版6　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4……25～33
図版7　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4，隅柱，側板……25～33
図版8　前栽遺跡（第2次）　下層遺構……33～44
図版9　前栽遺跡（第2次）　溝跡出土土器……33～44
図版10　前栽遺跡（第2次）　井戸跡1出土土器……17
図版11　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2，3出土土器……22
図版12　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4出土土器……30
図版13　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2，4出土遺物……32
図版14　前栽遺跡（第2次）　弥生時代溝跡出土土器……35
図版15　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土器（1）……38
図版16　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土器（2）……38
図版17　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土器（3）……39
図版18　前栽遺跡（第2次）　包含層出土土器（1）……42
図版19　前栽遺跡（第2次）　包含層出土土器（2）……43

挿 図 目 次

図1　天理市位置図……1
図2　前栽遺跡（第2次）　花粉ダイヤグラム（1）……折図
図3　前栽遺跡（第2次）　花粉ダイヤグラム（2）……10
図4　平等坊・岩室遺跡出土弥生時代前期土器……11
図5　前栽遺跡（第2次）　調査地点……12
図6　前栽遺跡（第2次）　土層断面図……14
図7　前栽遺跡（第2次）　上層遺構（古墳時代以降）平面図……15
図8　前栽遺跡（第2次）　井戸跡1実測図……16
図9　井戸跡1出土土器実測図……17
図10　井戸跡1出土平瓦実測図……18
図11　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2実測図……19
図12　井戸跡2　曲物井戸枠（上段）実測図……20
図13　井戸跡2　曲物井戸枠（下段）実測図……21
図14　井戸跡2，3出土土器実測図（井戸跡3は4のみ）……22
図15　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4　平面と各側壁実測図……25
図16　井戸跡4　隅柱材実測図（5はささえ材）……26
図17　井戸跡4　東壁井戸枠板材実測図……27
図18　井戸跡4　西，南壁井戸枠板材実測図……28
図19　井戸跡4　北壁井戸枠板材実測図……29
図20　井戸跡4出土土器実測図……30
図21　井戸跡2（5），井戸跡4（1～4，6～9）出土遺物実測図……32
図22　前栽遺跡（第2次）　溝跡4出土黒色土器実測図……33
図23　前栽遺跡（第2次）　下層遺構（弥生，古墳時代遺構）平面図……34
図24　前栽遺跡（第2次）
弥生時代土器実測図（4，6は溝跡1，9は井戸跡2，他は包含層）……35
図25　前栽遺跡（第2次）　土坑1実測図……36
図26　土坑2実測図……36
図27　土坑3実測図……37
図28　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土師器実測図……38
図29　溝跡3出土須恵器実測図……39

図30　溝跡３出土土器，瓦実測図……40
図31　前栽遺跡（第２次）　包含層出土土師器実測図……42
図32　包含層出土須恵器実測図（14は⅛）……43
図33　前栽遺跡（第２次）　井戸跡２，３黒色土器出土位置図……47
図34　奈良県内出土黒色土器の編年……48・49
図35　韓国統一新羅時代の甕……52

写　真　目　次

写真１　井戸跡１　西壁に転用された須恵器系甕……17
写真２　井戸跡２　曲物上段細部……21
写真３　井戸跡２，３出土製塩土器片……24
写真４　井戸跡４　縦板側板小口……27
写真５　井戸跡４　縦板側板小口面小孔……28
写真６　土師器皿（１）墨書……30
写真７　井戸跡４出土製塩土器片……31
写真８　須恵器墨書……33
写真９　溝３出土壺器表調整……40
写真10　溝３出土製塩土器片……41

調　査　報　告

第１章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機（図１）

天理市田井庄町に所在する前栽遺跡の第２次発掘調査は，同町295の１番地における住宅開発に伴う事前調査として実施した。

調査当該地は前栽遺跡の東側にあたり，田井庄町の西寄りで，富堂町の北側である。地籍名は，字藤ノ木である。また，前回第１次調査として実施した前栽小学校からは，約300ｍ東南の地点にあり，遺構の存在することが十分予測された。以上のような経緯により開発行為側と協議を重ね，昭和59年10月５日より約20日間にわたって発掘調査を実施することが確認された。現地調査は，天理市教育委員会社会教育課　泉　武が担当して，同年11月２日まで実施した。

図１　天理市位置図

第2節　調査要項

遺跡名	前栽遺跡（奈良県遺跡地図8D－320）
所在地	天理市田井庄町295の1番地
面積	約1,200㎡
時代	弥生時代～鎌倉時代
遺構の種類	溝，土坑，井戸跡
調査理由	民間住宅開発工事に伴う調査
調査面積	約325㎡
調査期間	昭和59年10月5日～11月2日
調査主体	天理市教育委員会
調査担当者	天理市教育委員会　社会教育課　泉　武

第3節　調査の経過 －調査日誌－

昭和59年

10月5日（金）

建設予定地の南に東西13m，南北25mの調査区を設定した。南側から調査を開始したところ，床土を除去するとすぐ遺構面が現れ始めた。

10月6日（土）

東側は遺構面まで検出した。包含層には，弥生前期土器，須恵器，土師器片を多く含んでいる。調査区の北側で地質調査のボーリング工事が開始された。約3mで泥炭が出てきた。

10月8日（月）

3層遺構面の精査を開始した。ＳＥ１は３区にあり，方形井戸枠が検出され，その下部には石積井戸が現れた。埋土中より瓦器が出土した。ＳＥ２は６区にあり，板材の曲物を使った井戸枠を検出し，表土下約1mで完形の黒色土器が出土した。土坑は１～５まで検出した。

10月9日（火）

ＳＥ１とＳＥ２の調査を続行した。ＳＥ１では石積の中に須恵器をはさみ込んでいた。ＳＥ２は二重の井戸枠を組み合わせていた。上段は楕円形の曲物である。中央で黒色土器椀が５～６個体，皿１，高杯などが出土した。

10月11日（木）

ＳＥ２の調査を続行した。下部より横櫛が出土した。楕円形曲物の下に，さらに円形曲物井戸枠

が検出された。検出面から1.3mで底に達した。また，素掘溝も精査を行った。

10月12日（金）

ＳＥ２に切られたＳＥ３の調査を行った。素掘で，深さは約１mである。下部から黒色土器片が出土した。

南側に調査区を拡張した。

10月13日（土）

ＳＫ３の調査を行った。約１mの深さがあり，U字型をしている。また，東側にも敷地いっぱいの拡張をした。

10月15日（月）

東拡張区の精査を行った。上層遺構面の精査は，ほぼ終了した。

10月16日（火）

上層遺構面の写真撮影を行った。

10月17日（水）

雨のため現場作業は中止した。

10月18日（木）

下層遺構面の検出のために掘り下げを始めた。北側では遺構がありそうであるが，遺構としてのまとまりはなかった。

10月19日（金）

南壁際で把手付甕が，ほぼ１個体分出土した。また，北のボーリング調査では，表土下約4.2mの泥炭層下部より火山灰を採取した。厚さは約10cmである。

10月20日（土）

昨日のボーリング調査により，表土下約18mより樹木資料が出た。この上層は１mの厚さの砂層堆積である。

10月22日（月）

下層の遺構検出を行った。１・２区では炭の混じる土坑状のものがある。また，茶褐色土を切る掘方も現われ始めた。これらは，上層では確認されなかった遺構である。

10月23日（火）

下層遺構面全体の検出を行った。この結果，楕円形状の落ち込みとその北側では，東西溝を検出した。溝は浅い。

10月24日（水）

ＳＤ１では弥生土器が出土した。上層でもこの付近で集中したため，弥生時代の溝と考えられる。焼土面では製塩土器片が少量出土した。

10月25日（木）

落ち込みは，今日の精査により溝であることが判明し，焼土面もその上に広がることが確認できた。また，溝の北側では新たに方形井戸（ＳＥ４）を検出した。

10月26日（金）

溝の調査では須恵器，土師器片が多量に出土した。ＳＥ４は底部より土師器皿，杯，須恵器，木製匙が出土した。匙は類品のないものである。ＳＥ２より古く，奈良時代末期の井戸である。井戸底から竹製斎串が出土した。尖頭部を底にして立っていた。

10月27日（土）

ＳＥ２の井戸枠を取り上げた。ＳＥ４は全体写真をとった。ＳＤ３は全体の精査を終えた。下層から瓦質で格子目タタキのある土器が出土した。土に混じって円玉が入っていた。

10月29日（月）

ＳＥ４の平面実測とＳＥ１の土層実測を行った。

10月30日（火）

全体の遺構面写真を撮った。その後，ＳＥ１とＳＥ４の井戸枠，転用土器の取り上げを行った。

10月31日（水）

ＳＥ４の井戸枠の取り上げを行った。その後遺構面の実測を開始した。

11月１日（木）

断面は東南壁面を実測した。

11月２日（金）

器材の搬出を行い，すべての作業は終了した。

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の環境

前栽遺跡第2次調査地点は，『天理市埋蔵文化財調査報告　第1集』1984で報告した第1次調査地より東南約300mに位置する。標高約57mあり，北は水田地帯が広がるが，他は宅地開発が徐徐に進行している。当地の地形は第1集で記したように，富堂から岩室，稲葉にかけて東西の方向に扇状地形特有の膨らみがみられる。しかし，河川の流れはなく，また，過去の流路痕跡も確認できない。

本調査地内の北側において地質調査用のボーリングに立ち会ったところ，地表下約3mにおいて厚さ10～20cmに堆積した有機質土層（泥炭）を検出した（金原分析　資料10）。

この結果，18,000年前の自然環境はゴヨウマツを中心とした針葉樹で覆われていたようである。また，同調査区の南端でのボーリング調査では，砂層の堆積が連続し，泥炭層は見出されなかった。扇状地でも微地形的には数10m離れると，土壌の堆積が保存される部分と，扇状地堆積によって侵食される場所が激しく入れ替わるようである。なお，この泥炭層に挟まって厚さ2～3cmの火山灰の堆積も確認できた。

第2節　前栽遺跡周辺の古環境と栽培植物　（図2・3，図版1）

金　原　正　明

本遺跡の堆積層及び遺構より採取された試料6点について花粉分析と大形植物遺体の同定を行ない，本遺跡の立地する環境の復元と栽培植物の検討を行なった。

なお，本遺跡周辺の植生変遷をより連続的に明らかにするために，既報告の花粉分析資料の再検討も行なった。

本報告を進めるうえで，奈良教育大学・西田史朗教授より適切な御指導を頂いた。また，大形植物遺体の同定については，天理大学附属天理参考館・太田三喜学芸員より御教示を頂いた。さらに，天理市教育委員会泉　武技術吏員からは本報告の機会を頂いた。これらの方方に感謝致します。

1．試　料

試　料　1　　ＳＫ３：古墳時代，６世紀

試　料　2　　ＳＥ２下部井戸枠内：平安時代，10世紀末～11世紀初頭

試　料　3　　ＳＫ20：古墳時代，６世紀

試　料　4　　ＳＤ２：古墳時代，６世紀前半

試　料　5　　ＳＤ２下層：古墳時代，６世紀前半

試　料　6　　前栽遺跡（1984）河川跡西壁３（１）：縄文時代晩期

試　料　7　　前栽遺跡（1984）河川跡西壁５（３）：縄文時代晩期

試　料　8　　前栽遺跡（1984）河川跡西壁７（４）：縄文時代晩期

試　料　9　　前栽遺跡（1984）河川跡西壁８（５）：縄文時代晩期

試　料　10　　泥炭，表土下３ｍ（18,530±590Ｙ．Ｂ．Ｐ．）

2．方　法

大形植物遺体は，試料を0.5㎜の篩で水洗し選別した。

花粉遺体の分離，濃縮は以下の順に行なった。試料約20ｇ→５％KOH処理（一昼夜）→篩で0.5㎜以上の大形植物遺体・礫等の除去→水洗→傾斜法による砂粒・鉱物粒の除去→30％HF処理（12時間）→水洗→アセトリシス処理（80℃，１分間）→水洗→石炭酸フクシン染色→グリセリンゼリーで封入。検鏡は，樹木花粉300個以上になるまで花粉・シダ植物胞子を計数した。識別が困難な分類群はハイフンで結び，分類群の特定できない場合は代表的な属に type を付し示した。花粉分析結果は花粉総数を基数として頻度を求め，図２の花粉ダイアグラムに示した。また，花粉が数個体以上固まって塊状に産するものは○印を付した。

3．大形植物遺体

試料４よりイヌザンショウ属と，ノブドウ属の種子が検出された。この２種は，近隣の布留遺跡でも多く出土している。古墳時代において，これらの植類は，周囲に生育していたか，食用に用いられていたかであろう。試料２からは，ウリ類とクリの種子が検出され，これらは食用であり，栽培されていた可能性も強い。

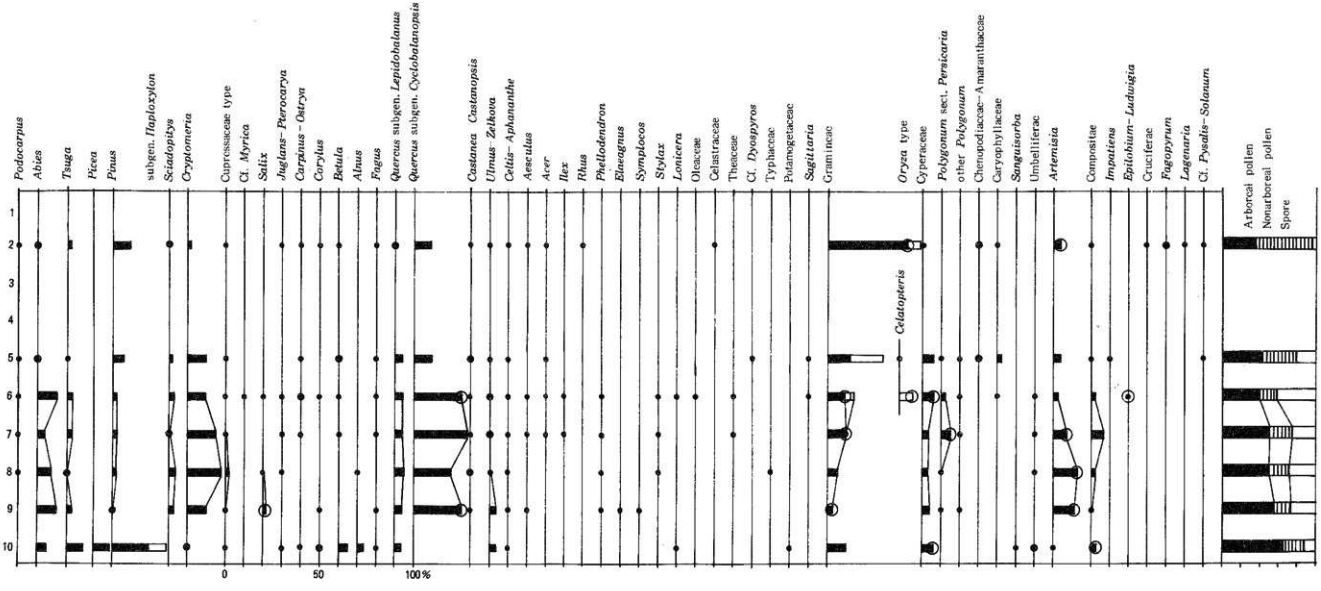


図2　前栽遺跡（第2次）　花粉ダイヤグラム（1）

4．各試料の花粉群集と奈良盆地の花粉群集帯

試料10　^{14}C年代が18,530±590Y．B．P．である。その花粉群集は，針葉樹の Haploxylon 型を主とする Pinus が優占し，他に Picea, Tsuga, Abies が伴われる。落葉広葉樹は少ないが，Betula, Alnus, Quercus subgen. Lepidobalanus, Ulmus-Zelkova が産する。草本類では，Gramineae, Cyperaceae, Compositae が多い。

この花粉群集は，針葉樹の Haploxylon 型 Pinus の優占，Picea, Tsuga の豊産より，Pinus（Haploxylon）-Tsuga-Quercus 帯 Pinus（Haploxylon）亜帯（約23,000～20,000Y．B．P．ただし上限は不明）（松岡，1984）に比定される。Pinus（Haploxylon）亜帯の上限は，少なくとも約18,500Y．B．P．まで下ることになる。

試料9～6　試料9～7は縄文時代晩期後葉であり，試料6はそれ以降である。花粉群集は広葉樹の Quercus subgen. Cyclobalanopsis が優占するが，針葉樹の Cryptomeria, Abies も多産する。他に針葉樹の Tsuga, Pinus, Sciadopitys, 広葉樹の Quercus subgen. Lepidobalanus が伴われる。草本類では，Artemisia が多産するものの減少傾向を示し，Gramineae は増加傾向を示す。他に Cyperaceae, Polygonum sect. Persicaria, Compositae が産する。試料6では Gramineae Oryza type を産し，Celatopteris を多く産する。

以上の試料の花粉群集は，Cyclobalanopsis 帯 Cyclobalanopsis-Cryptomeria 亜帯（約2,500～1,700Y．B．P．）に比定される。

試料5　6世紀前半である。花粉群集は，広葉樹の Quercus subgen. Cyclobalanopsis, 針葉樹の Cryptomeria, Pinus subgen. Diploxylon が多産する。草本類では Oriza type を主とする Gramineae が多産するほかに Cyperaceae, Artemisia, Caryophyllaceae, Chenopodiaceae-Ameranthaceae を多産する。これは，Cyclobalanopsis 帯 Cyclobalanopsis-Cryptomeria-Pinus（Diploxylon）亜帯（約1,500～1,300Y．B．P．）に比定される。

試料2　10世紀末～11世紀初頭である。花粉群集は針葉樹の Pinus subgen. Diploxylon, 広葉樹の Quercus subgen. Cyclobalanopsis が多産する。草本類では，Gramineae が優占し，Artemisia も産する。他に Fagopyrum, Lagenaria の産出が注目される。Pinus（Diploxylon）-Cyclobalanopsis 帯 Pinus（Diploxylon）-Cyclobalanopsis 亜帯（約1,300～500Y．B．P．）に比定される。

5．推定される古環境と栽培植物

約18,000年前頃　花粉群集より一層寒冷な気候と，その下で成立した亜高山（亜寒）帯針葉樹林が奈良盆地とその周辺の山地を覆い，低地には落葉広葉樹も生育していたと推定される。土器縄期（約20,000～10,000）の奈良盆地は，著しい侵食の場となり，山の辺期の堆積物が削り取られ，そ

れとともに小規模な谷地形が形成されていた可能性が大きい（松岡・西田・金原，1984）が，湿原も部分的に分布していたようである。本遺跡周辺は，このような環境に立地したイネ科やカヤツリグサ科の植物が生育する湿原であった。

縄文時代晩期後葉　本遺跡の周辺は，カシ林を主とする照葉樹林で覆われていた。花粉遺体の産出状況が塊状を示すことを考慮すると，周囲にはイネ科，カヤツリグサ科，ヨモギ属，サナエタデ節の草本類が生育していたと推定される。試料6は時代が不明であるが，イネ属型花粉の出現に伴って，オモダカ属の花粉とミズワラビ属の胞子が産し，イネの栽培を示唆している。

古墳時代後半　花粉遺体では，イネ属型を主とするイネ科が多産するため，周囲にはかなり水田が広がっていたと考えられる。前時代と比較すると，アカガシ亜属の花粉の減少は著しく，周辺地域の照葉樹林の減少を反映したものと思われる。

平安時代後半　樹木花粉におけるマツ属の割合が高く，近隣の山地や丘陵にマツの二次林が成立していたと推定される。栽培植物では，イネ以外にソバ類とヒョウタン類が認められる。また，イネ科の花粉が多産するため，周囲でイネ以外のイネ科の植物が集約的に栽培されていた可能性もある。

6．前栽遺跡の周辺地域の景観の移り変わり

図3では，古墳時代までとそれより新しい時代の花粉組成のばらつきかたの傾向に差がみられる。

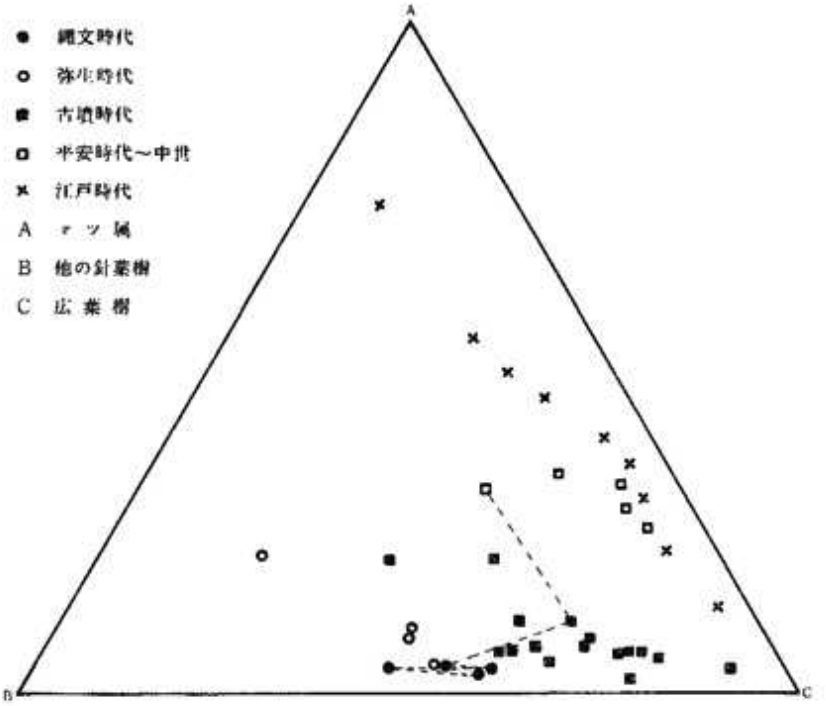


図3　前栽遺跡　周辺の樹木　花粉ダイヤグラム（2）

広葉樹花粉の比率が小さい場合，古墳時代まではマツ属以外の針葉樹花粉の比率が大きくなり，マツ属の比率は著しく大きくならない。それに対して，平安時代以降ではマツ属の比率が大きくなり，マツ属以外の針葉樹の比率はあまり大きくならない。また，資料数が少ない時代もあるが，花粉組成のばらつきは時代が新しくなるにつれ大きくなる。

以上のことも考慮にいれ，前栽遺跡の周辺地域の景観の移り変わりを概観すると，縄文時代には照葉樹林に覆われ，弥生時代から古墳時代にかけては森林の減少が人為的に行なわれる。それは地点や時期により進行状況が異なり，花粉組成にばらつきが生じる原因の一つと考えられる。これらの時代の森林破壊がマツの二次林の成立につながらなかったのは，森林破壊が主に低地で行なわれ，継続的な土地利用が行なわれたからであろう。平安時代以降はカシ林とマツ林が山地と丘陵部を中心に分布し，より時代が下るにつれ人為的局部的な森林が現れる。マツ林の成立は，断続的土地利用の焼畑農耕が大きな要因であったと考えられる。

（参考文献）

松岡数充・西田史朗・金原正明（1984）　奈良盆地の上部第四系と古環境　埋蔵文化財天理教調査団編「奈良盆地の古環境」考古学研究調査中間報告10　p.5－24.

松岡数充（1984）　花粉分析よりみた奈良盆地及びその周辺における35,000Y.B.P.以降の森林植生の変遷　埋蔵文化財天理教調査団編「奈良盆地の古環境」考古学調査研究中間報告10　p.25－48.

金原正明（1984）　前栽遺跡河川跡堆積土の花粉分析　天理市教育委員会編「前栽遺跡」天理市埋蔵文化財報告第1集，p.32－35.

金原正明（1984）　後期完新世の植生変遷，埋蔵文化財天理教調査団編「奈良盆地の古環境」考古学調査研究報告書10　p.57－76.

金原正明（1985）　花粉分析よりみた奈良盆地の各遺跡における古環境の復元と栽殖について　天理大学学報第145輯　p.157－165.

第3節　歴史的環境

（図4，5）

今回の調査において弥生時代前期の遺構，遺物が検出できたが，西側に広がる平等坊・岩室遺跡においても同時期の遺構や遺物が確認されている。（文献1）ここでは広範囲に出土しているが，岩室池古墳下層，岩室町水路改修の際に出土した資料などは実体の判明している一部に過ぎない。また，平等坊・岩室遺跡の第3次調査（1978年）では弥生時代前期土器とともに縄文時代晩期土

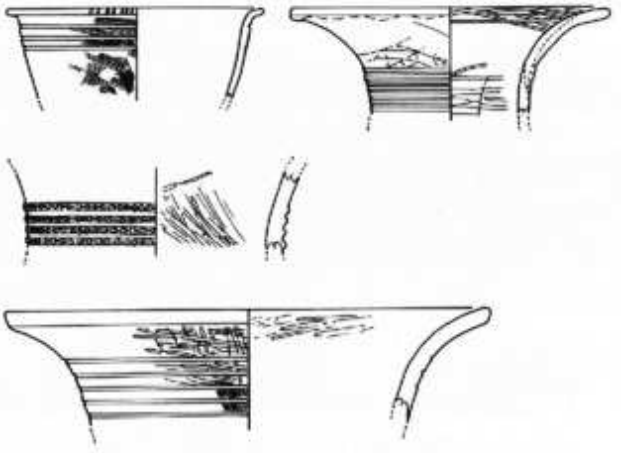


図4　平等坊・岩室遺跡出土弥生時代前期土器

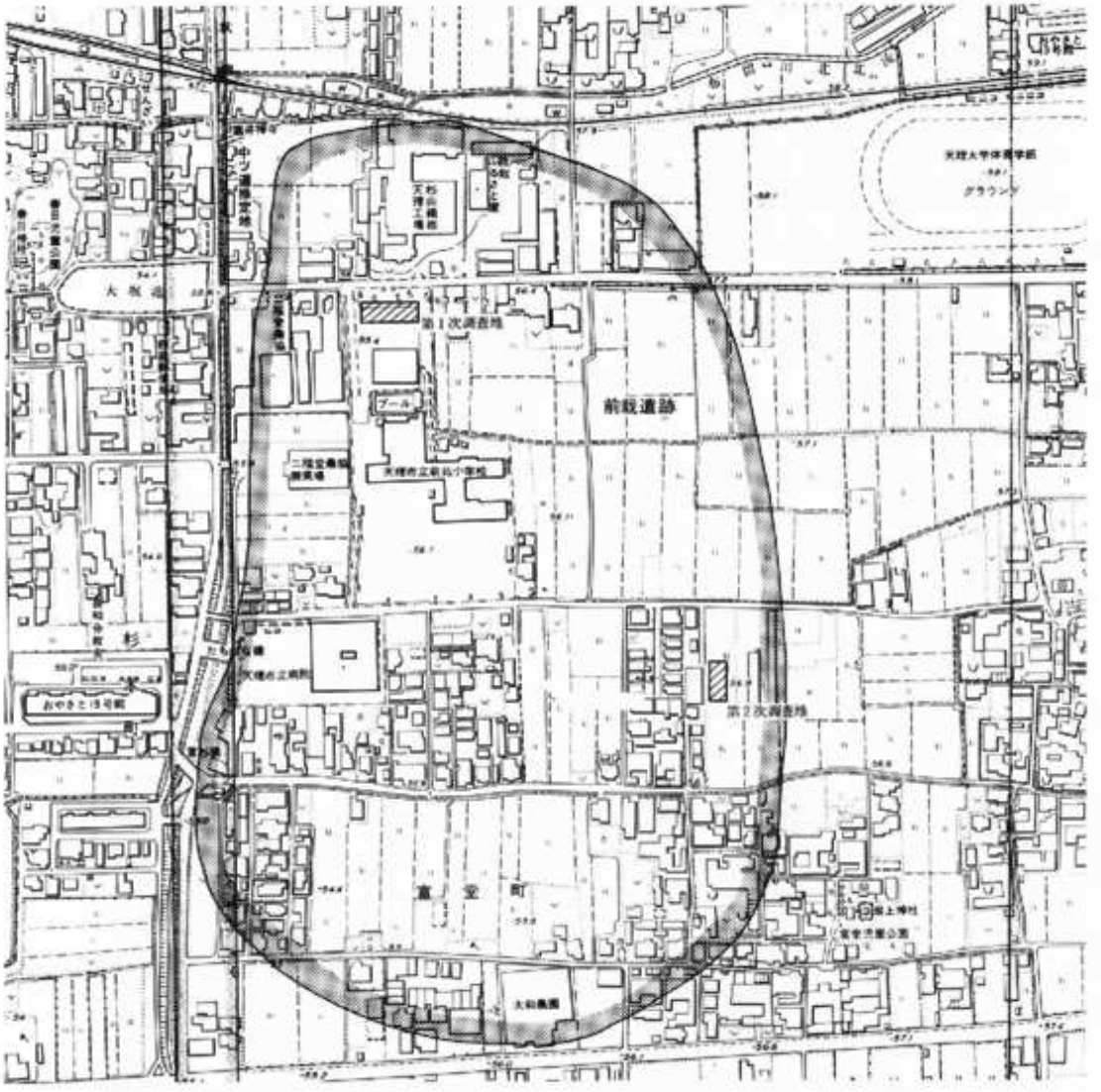


図5　前栽遺跡（第2次）　調査地点

器が伴出したようであり，これらのあり方は，前栽遺跡との間に有機的な関連性のあることを強く示唆するものである。このほか，市内における弥生時代前期の遺跡は規模が小さくなり，平等坊・岩室遺跡の卓越性が浮かびあがる。

奈良時代以降は，『前栽遺跡』に重複するため詳しくは記さないが，当遺跡の200ｍ西が中ツ道遺構である。奈良時代から平安時代にかけての中ツ道は頻繁に使われていたようで，平城京ＳＤ650出土木簡は，

（被盗）（文献２）　　（爪）　　（往還）
□□斑牡牛一頭　誌左右本□在歳六許□□□□□告知

應告賜山邊郡長屋井門村　右牛以十一月卅□ □聞給人盗坐必々可告給

盗牛に関する告知札のようであるが，ここに記された山辺郡長屋井門村は，現在の西井戸堂町に

比定されている。この地点は中ツ道に沿う集落で，寛弘4年（1007年）に吉野金峯山寺詣でに行く途中の藤原道長も宿泊したことが日記に記されている。井戸堂の集落は調査地点より南へ1.3kmの距離である。

また，『古今集』恋歌四・六七九，紀貫之の歌には，

石上布留の中道なかなかに見ずは恋しと思はましやは

などとも歌われ，中ツ道は平安時代に至っても主要な街道として機能していたようである。当遺跡の奈良時代，平安時代の遺構・遺物のあり方から中ツ道に沿う重要な施設のあったことも推定される。

（参考文献）

1　『岩室池古墳　平等坊・岩室遺跡』　（『天理市埋蔵文化財調査報告　第2集』）　天理市教育委員会　奈良県立橿原考古学研究所編　1985

2　『平城宮発掘調査報告VI』　（『奈良国立文化財研究所学報　第23冊』）　奈良国立文化財研究所　1975

第3章　調査の記録

第1節　調査の概要（図6，図版2）

遺跡地内における開発対象地は，東西長約20ｍ，南北長約60ｍの細長い区域である。このため調査前に実施した遺構の確認調査では，南側に集中することが明らかになった。また，排土地の関係もあり，南側で東西長約13ｍ，南北長約25ｍ，面積にして約325㎡を調査地区に設定した。

遺構は，水田表土下約60cmの第3層を遺構面とするもの（上層遺構面）と，地表下約1ｍの第4層を遺構面とするもの（下層遺構面）とがあり，重複していた。

上層遺構では素掘溝が多数検出された。素掘溝は，調査期間の都合もあり，詳細な検討はできなかったが，東西，南北の両方向に走る溝が検出され，瓦器の小破片や土師器などを含んでいた。しかし，溝の方向性や規模の大小といった規則性を検出するまでには至っていない。井戸跡は，石積，

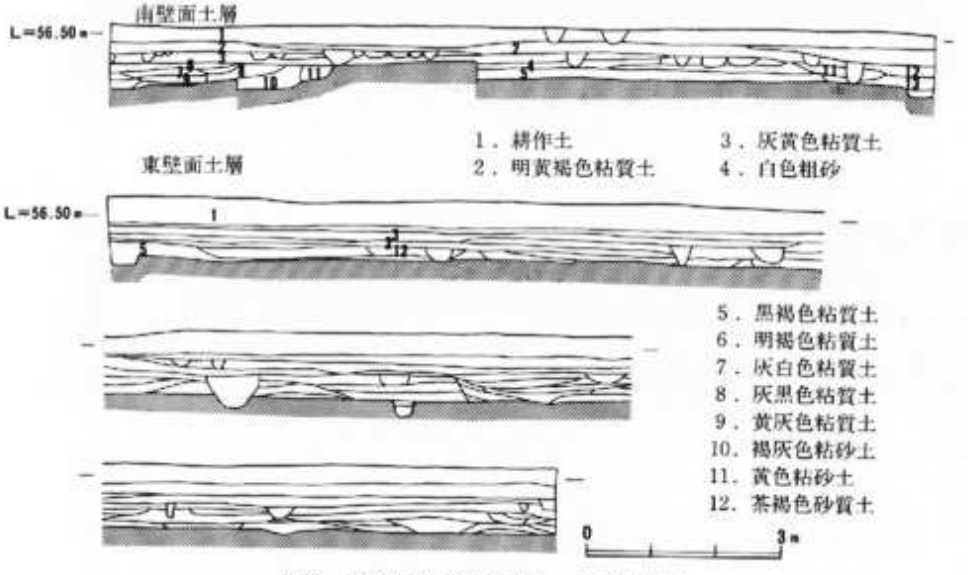


図6　前栽遺跡（第2次）　土層断面図

素掘，板枠を持つものなど各各種類があり，形態的には方形と円形のものがみられた。

下層遺構は，溝２か所，土坑４か所などを検出した。また，上層，下層遺構面は単一の時期に限定された遺構面ではなく，上層では奈良時代から中世にかけての各時期，下層では弥生時代から古墳時代の遺構を含んだ遺構面を形成していた。これは，一時期の廃絶と次世代への継受があっても，前代の遺構面が土砂などによって完全に被覆されることなく，むしろ開発が同一地点に対して幾度となく繰り返された結果であろう。このため各層内には，弥生時代から中世にいたる土器類が混在して包含層を形成していた。ただ，４層土器包含層においては，奈良時代や中世の土器は含まれていなかった。４層を取り除いた時点で，古墳時代の溝と弥生時代の溝が検出できた。弥生時代の溝は，削平が進み，ほとんど痕跡を留めるだけであった。また，この時代の土器が，遺構を伴うことなく検出したものもあり，これらは遺構が完全に消失してしまったものと思われる。

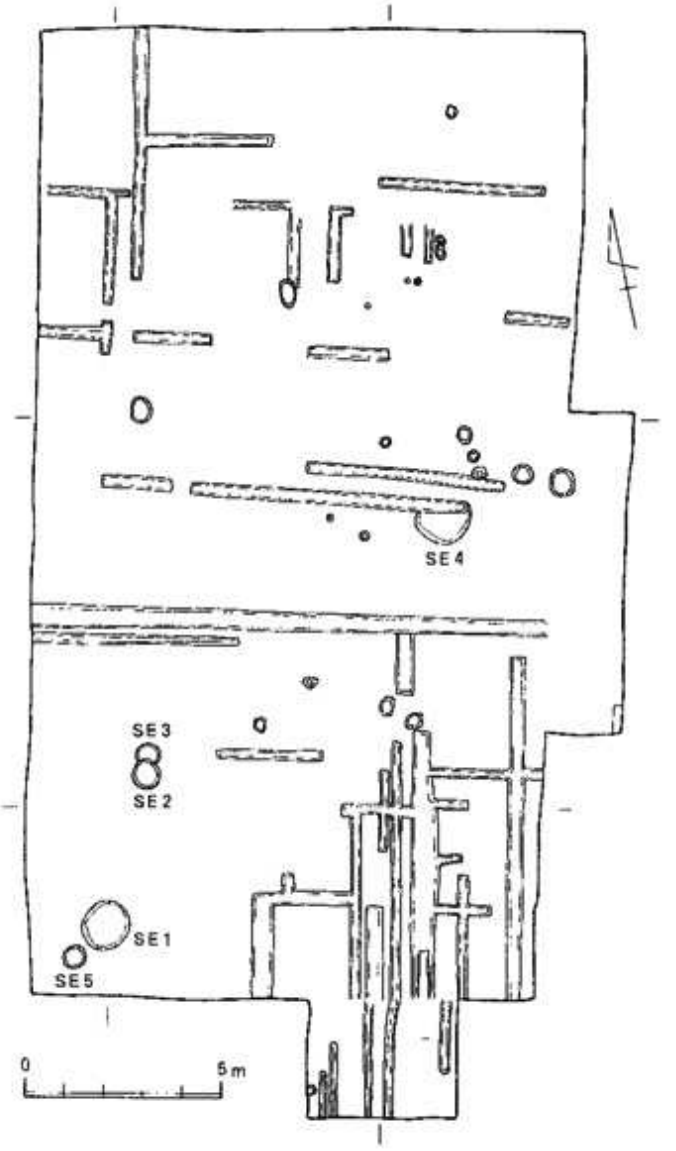


図７　前栽遺跡（第２次）　上層遺構（古墳時代以降）平面図

次節より上層遺構面では，井戸跡，下層遺構面では，溝，土坑と出土遺物について詳述する。ただ，土坑は全般に出土遺物に乏しく，また，遺物の出土しなかった土坑も半数以上にのぼり，時期を推定できたものは少ない。

第２節　上層遺構　（図７）

１．井戸跡１（図９・10，図版２・10，写真１）

調査区の西南隅において検出した井戸跡で，掘方は楕円形を呈し，内部は自然石を用いた石積井戸である。掘方の規模は，東西長1.1ｍ，南北長1.28ｍあり，深さは検出面より約90cmである。石材は，人頭大の河原石を４段に乱積みし，部分的に須恵器系甕の破片を間隙に充塡している。石積の高さは，約70cmである。径は上部で約55cm，下部で約35cmである。井戸底には曲物はなく，砂層が露出していた。石積の上面には井戸枠の下部にあたる井桁材と，井戸囲いの縦板材が部分的に遺存していた。井戸枠材は，長さ66～70cm，幅３cmの方形角材を使用し，両端は各各枘加工を施して組まれていた。井桁の四隅部には水平を保つため，上面が平坦な自然石を配置していた。また，東

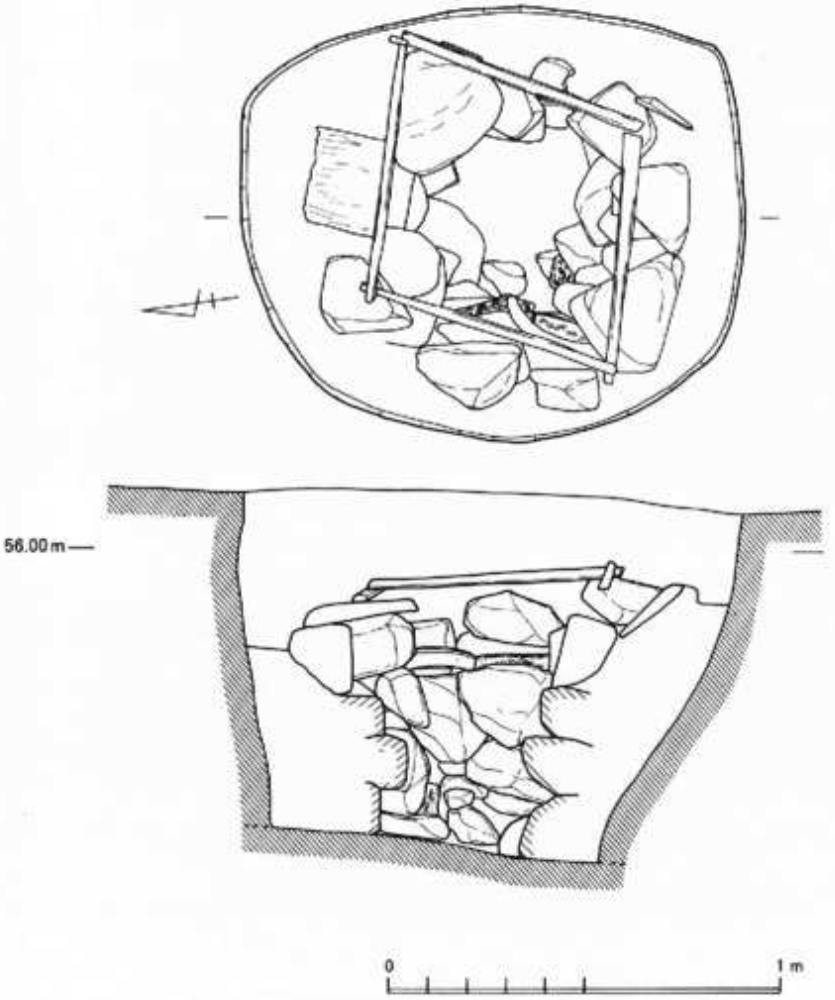


図８　前栽遺跡（第２次）　井戸跡１実測図

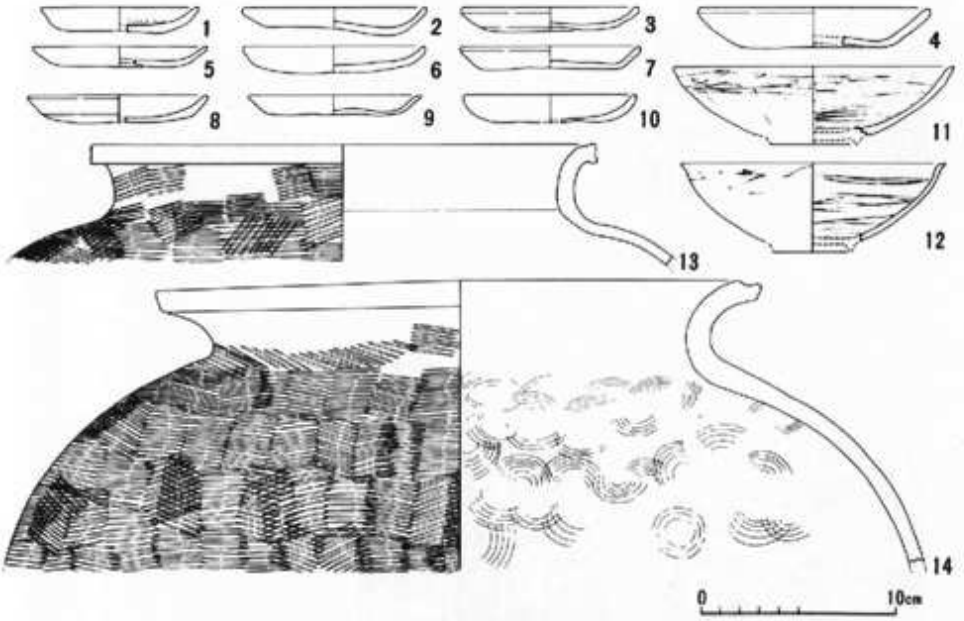


図9　井戸跡1出土土器実測図

北隅と東南隅には角杭が打たれていた。囲い用の縦板を補強するための角杭と考えられる。縦板は遺存状況が悪く，実測できなかった。

遺物は，石積みの間隙部と掘方裏込土の中から須恵器系土器，土師器，瓦器，瓦などが出土した。

写真1　井戸跡1　西壁に転用された須恵器系甕

須恵器系甕（13，14）

13は，口縁部径約25.8cmあり，口縁端部は角頭形を呈している。体部外表面は平行のタタキ痕跡がある。14は，口縁部径約31cmあり，体部最大径は約47cmである。口縁端部上端は凹面に成形されている。体部外面は横方向の平行タタキを行い，その上に斜め方向のタタキを重ねている。内面は青海波タタキを消している。色調は，13，14とも黒味がかった灰青色を呈し，焼成も堅緻である。

土師器（2～10）

皿形土器で2，3，5～10は，口縁部径8.8～9.5cm，器高1～1.4cmの範囲にあり，小形のものである。4は，口縁部径11.8cm，器高2cmとやや大形品である。

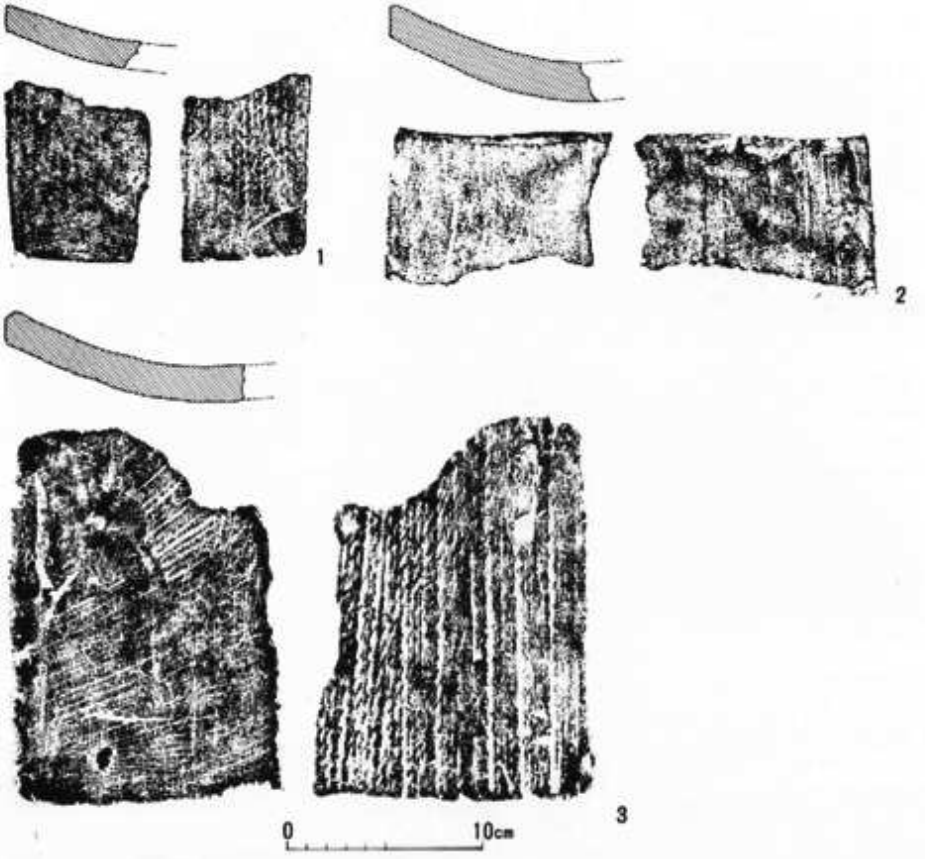


図10　井戸跡1出土平瓦実測図

瓦器（1，11，12）

1は皿形，11，12は椀形土器である。1は口縁部径8.1cm，器高1.3cmあり，内面見込みの部分には平行暗文がみられ，外面にも粗い暗文状のヘラミガキを施している。11は，口縁部径約13.5cm，器高約4.5cmである。内面は粗いヘラミガキを施している。外面は上端部のみヘラミガキが施され，下部は指頭圧の調整がみられる。瓦器椀の底部の破片では，内面見込み部分には簡略化した連結輪状文を施している。高台部分は断面三角形を呈し，低い貼り付け高台となっている。

瓦

裏込め土中より平瓦の破片が10点出土した。凹面は粗い布目痕，凸面は縄目痕を残している。

小　結

井戸跡1の出土遺物は以上のような種類である。瓦器については，白石太一郎編年の第Ⅱ段階第6型式に比定されるだろう。（文献1）また，須恵器系甕については，荻野繁春編年があり，これによるとⅣ～Ⅴ期に比定できよう。（文献2）これら土器の年代観は，瓦器が12世紀後半，須恵器系甕は12世紀後半から13世紀中葉と考えられている。また，須恵器系甕については，最近の研究によると，兵庫県明石市に所在する魚住古窯跡群での焼成甕のものと特徴が一致する。中世の商品流通を考える上でも，消

費地側として重要な資料であろう。

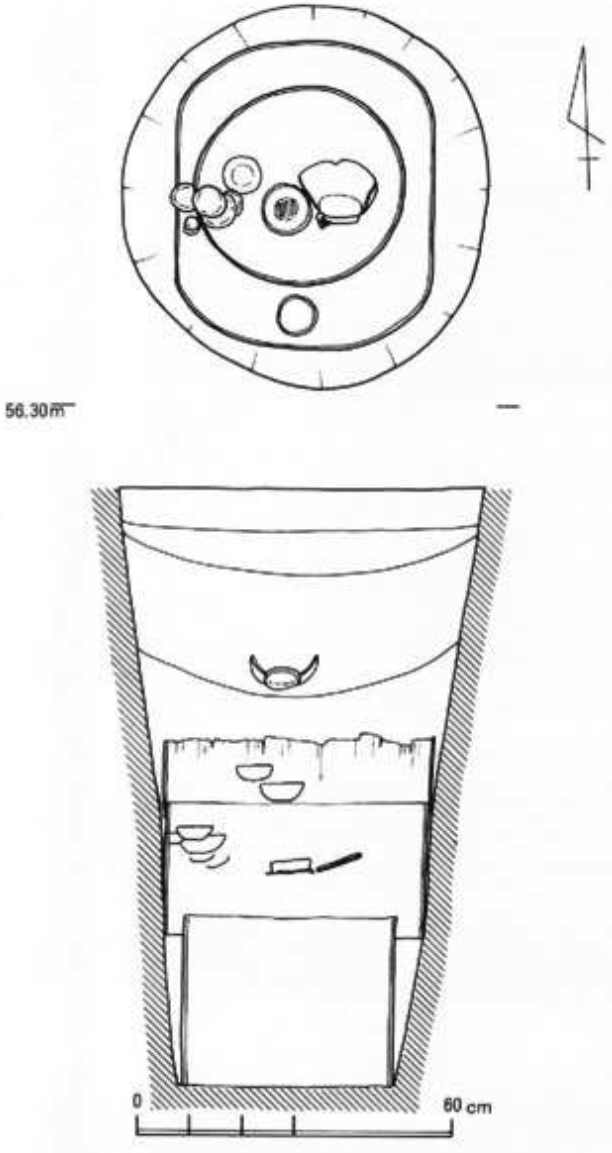


図11　前栽遺跡（第２次）　井戸跡２実測図

２．井戸跡２，３（図11～14，図版３・４・11，写真２・３）

井戸跡１の北側にあり，井戸跡２が３を南側半分で切っている。井戸の構造は各各掘方が円形を呈しているが，３は素掘であるのに対し，２は二重の井戸枠を設置していた。

井戸跡２の規模は，東西長70cm，南北長73cmとほぼ円形に近い形態をし，深さは検出面より約1.14ｍであった。ここに使われた井戸枠は下部が二重の曲物による枠であり，上部は外側の曲物を取り囲んだ縦板組である。二重の曲物のうち，上段については長辺65.5cm～短辺50cmで四隅を丸く折り曲げた形態を呈している。高さは19.5cmである。板材の厚さは４mmあり，内面は木理に直交する刻み目を幅６mm～１cm間隔で入れている。まわしの側板は幅3.7cm，4.3cmの薄板を下端と中間部に各各タガ状にまわして固定している。さらに，側板を補強するために，縦方向にあて板として幅７～9.5cmのヘギ板をはめ込んでいる。各各の部材は釘によって固定され，曲物は両端に綴穴をあけて樹皮でとじあわせている。下段のまわしの側板の釘穴は14か所で，長辺５～７mmの楕円形を呈し，上段のものは直径４mmの穴が13か所穿たれている。

下段の曲物は，直径41×39cmの円形を呈し，高さは24.5cmが残っている。外面には，横のタガ痕跡が２段と，縦方向のまわしの側板痕跡が４か所見られる。タガ痕跡の幅は約９mmである。まわしの側板は，幅3.5～５cmである。まわしの側板痕跡の上には，下端より７cmの位置に２穴１対の釘穴が４か所ある。内面は木理に直交する刻み目を施し，両端には綴穴をあけて樹皮でとじ，円筒形に作っている。

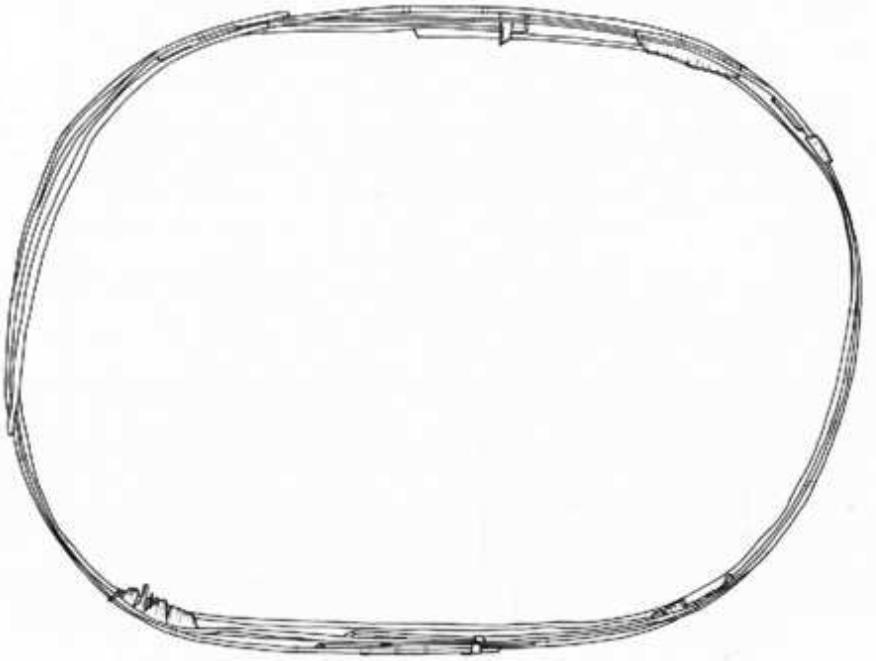
この井戸枠は曲物容器の底板をはずして使用したものと思われるが，下端側縁には底板を固定した釘穴がなく，容器を上下逆にして井戸底に置いたものであろう。

また，楕円形曲物は，平城京左京五条二坊十四坪の井戸跡２に出土例があるものの類例に乏しい。（文献３）

上段を取り囲むように組まれた縦板の井戸枠は，薄づくりの板材を使用していたが，腐食が進んでいたため部分的にしか検出できなかった。

井戸跡３は，直径70cmの円形を呈し，深さは検出面より約80cmであった。曲物等による井戸枠はみられなかった。出土した遺物は内面黒色土器椀（４）が１点である。

井戸跡２の遺物は，黒色土器10点と破片Ａ類６片，Ｂ類６片，土師器３点，木製櫛１点，製塩土



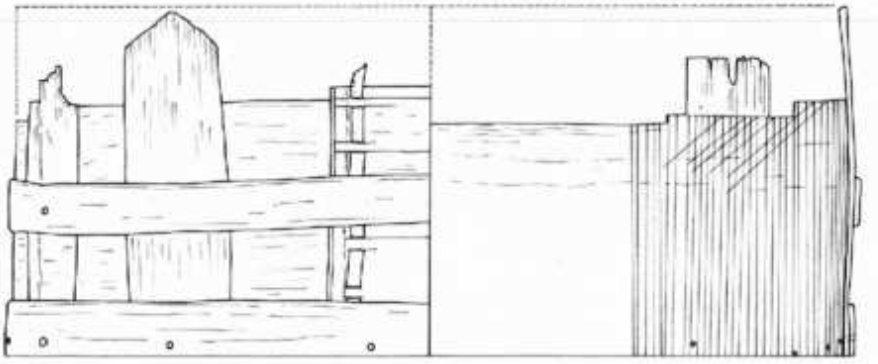


図12　井戸跡２　曲物井戸枠（上段）実測図

器片３点などである。遺物出土状態をみると，下段の曲物内からは皿（１）と黒色土器Ｂ類の椀（14）が出土した。そして上段の曲物では，櫛と土師器，高台付皿（16），皿（２），黒色土器Ａ類の椀（３，５，６，９）の４点である。薄板枠内からは，黒色土器Ａ類椀（10）と，黒色土器Ｂ類小椀（11）が出土した。これに対して上段曲物から上部の埋土内には，黒色土器Ａ類椀（７，８）のほかは黒色土器Ｂ類椀（12，13），土師器（15，17）であった。

土師器皿

１は口縁部径10.6cm，器高2.15cmである。口縁端部は外方へつまみ出している。内外面ともナデ調整を施している。２は口縁部径10.4cm，器高1.8cmあり，口縁端部近くで屈曲している。内外面ともナデ調整を施しているが，体部外面は指頭圧痕が残っている。15は口縁部径14cm，器高4.7cmあり，内面見込みと端部は丁寧なナデ調整を施し，側面はナデの上に細かいヘラミガキを施している。外面は全体にわたって軽いナデ調整を施しているため，粘土紐の痕跡が残っている。焼成は暗赤褐色を呈し堅緻である。16は高台付皿である。口縁部径16.5cm，器高5.2cmあり，皿部の深さは２cmあり，高台底径は8.4cmである。高台部が大きく安定した形態を呈している。口縁部

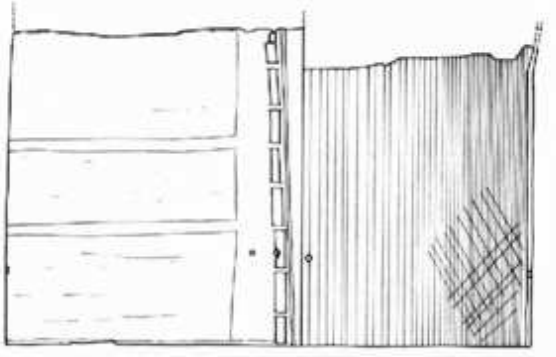


図13　井戸跡２　曲物井戸枠（下段）実測図

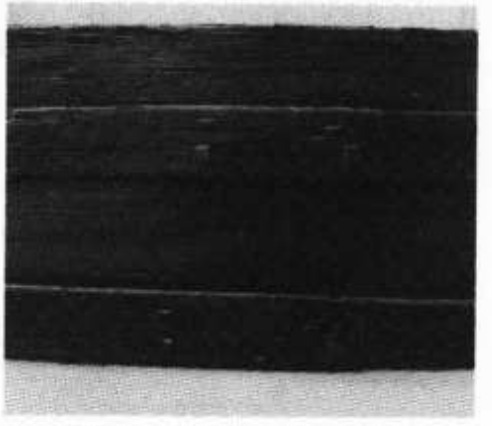


写真２　井戸跡２　曲物上段細部

は外上方にのび，端部内面は浅い段をつくっている。内面はややふくらみ気味である。高台は高さ2.6cmあり，端部は袋状に広がる。調整は体部外面に２段にわたって指頭圧痕を残し，内面は丁寧なナデ調整を施している。17は口縁部径17.9cm，器高4.8cmである。形態的には口縁部近くで内側に少し屈曲し，端部内面はゆるい沈線をめぐらせている。高台は短かい外開きの形態で高台の端部は平坦である。器壁内面は摩滅しているが，上端には，わずかに斜放射状の暗文を施している。体部外面は粗いミガキ調整を施している。

内面黒色土器椀（４～10）－Ａ類

４は，井戸３出土の椀である。体部は外上方に広がり端部は尖り気味である。端部内面には沈線がめぐる。調整は，見込みに不規則ではあるが，連続するミガキを施し，体部にも連続するミガキを施している。体部外面は，二段にわたって指頭圧を施し，光沢がみられる。高台は逆台形状で外開きである。内面は横ナデを施している。５の体部は外上方へ延び，端部内面は浅い沈線をめぐらしている。見込みには，緩やかな隆起がある。内面の調整は，見込みに連続するミガキを施し，体部には密なミガキを施す。口縁端部外面は，ふくらみ気味に成形し，口唇部は丁寧なミガキを施している。体部は，三段にわたって指頭圧で成形した後，幅のあるミガキを施し光沢がある。高台は，細い長方形状で外開きに踏ん張る形態である。焼成は良好で堅緻な仕上がりである。

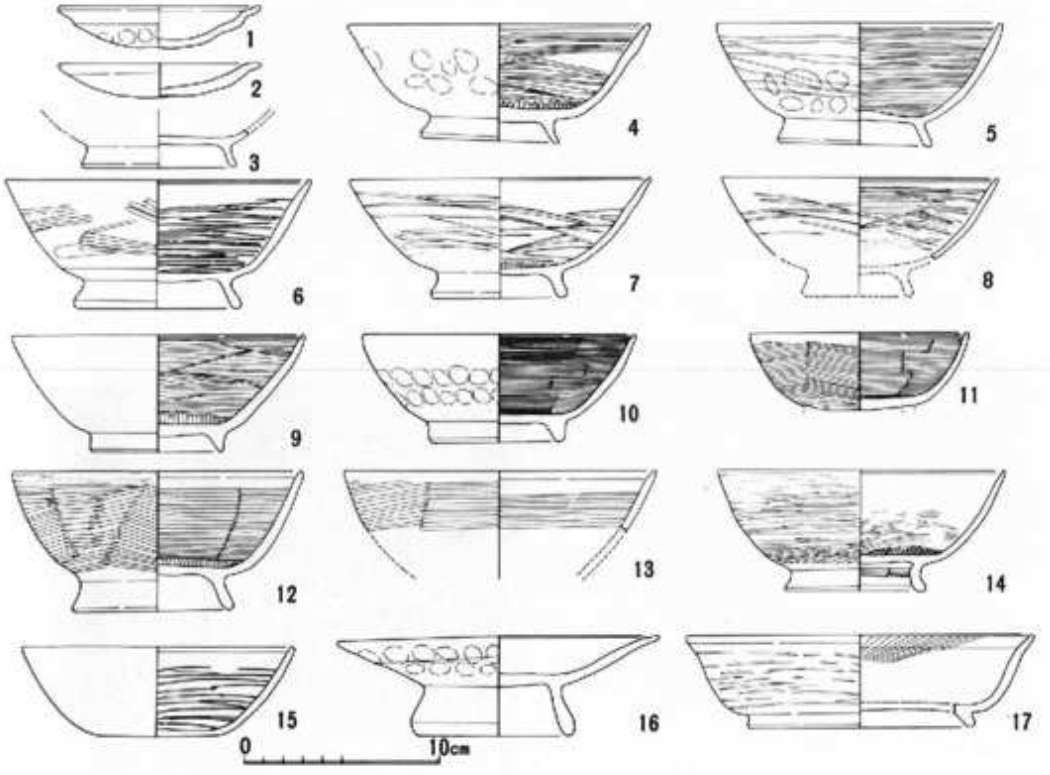


図14　井戸跡２・３出土土器実測図（井戸跡３は４のみ）

6は，体部が外上方に延び，口縁端部は角頭形に成形している。内面の調整は，見込み部が連続するミガキを，体部はやや粗いミガキを施す。口縁端部は明瞭な沈線をめぐらしている。見込み部は径約9cmを測り，比較的大きい。体部外面は，口縁部に丁寧なミガキを施し，体部も幅広いミガキを施す。高台は端部が丸く脹らみ，外方にひらく。内外面は横ナデ調整を，見込み部はナデ調整を施している。

7は，体部が外上方に延び，端部は外方につまみあげている。調整は見込みに一度密にミガキを施した後に，角度を変えて粗く連続するミガキを施している。体部はやや粗いミガキを施し，口縁部は浅い沈線をめぐらしている。体部外面は粗いミガキを施し，光沢がある。高台は端部が少し脹らむ長方形を呈し，外開きである。焼成は良好で硬く薄い仕上がりである。

8は，体部の破片である。7と同様の外上方に開き，端部は尖り気味である。内面には浅い沈線がめぐる。体部内面は密なミガキを，外面は粗いミガキを施している。焼成は良好で薄いつくりである。

9は，体部が外上方に延び，端部はやや内湾し，口唇部に浅い沈線をめぐらす。内面の調整は，見込みに密なミガキを施し，体部にも密な連続のミガキを施す。体部外面は，上部にミガキを施し，口縁端部にかけては光沢がみられる。高台はしっかりした逆三角形を呈している。高台見込み部は未調整である。

10は器高，口径，高台ともに小振りで，体部はやや内湾して上方に延びる。口縁端部には細く浅い沈線がめぐる。見込み部分に，軽いハケ状の調整を施し，体部内面は，連続したハケ状の調整を

遺構	法量（単位cm） 口径	器高	高台径	高台高	内面調整	外面調整	高台調整	色調
1 井	10.6	2.15			ナデ	ナデ	――	内 暗黄褐色 外 暗赤褐色
2 〃	10.4	1.8			ナデ	ナデ	――	内外 灰黄灰色に暗褐色の斑点
3 〃	―	―	8.0	1.1	見込み ジグザグ暗文 体部 ――	ナデ		内 黒色 外 明黄褐色
4 〃	15.6	6.9	7.1	1.1	見込み ←方向のヘラミガキ 体部 円周にそったヘラミガキ	ナデ	ナデ	内 黒色 外 茶色
5 〃	14.8	6.25	7.9	1.2	見込み ←方向のヘラミガキ 体部 円周にそったヘラミガキ	間隔のあるヘラミガキ ナデ	ナデ	内 黒色 外 明褐色
6 〃	15.7	6.65	8.0	1.05	見込み ←方向のヘラミガキ 体部 円周にそったヘラミガキ	部分的にヘラミガキ ナデ	ナデ	内 黒色 外 暗黄褐色
7 〃	15.4	6.15	7.0	1.35	見込み ←方向のヘラミガキ 体部 不定方向の粗いヘラミガキ	粗いヘラミガキ ナデ	ナデ，軽いヘラミガキ	内 黒色 外 茶褐色・黄褐色
8 〃	14.4㎝				見込み ―― 体部 細かいヘラミガキ	粗いヘラミガキ ナデ	――	内 黒色 外 暗茶褐色
9 〃	15.1	6.2	6.9	1.0	見込み ←方向のヘラミガキ 体部 密なヘラミガキ	軽いヘラミガキ ナデ	ナデ	内 黒色 外 暗褐色・黄灰色
10 〃	14.0	5.55	7.05	1.05	見込み 粗いミガキの後ナデ 体部 ハケ目状調整	ナデ	ナデ	内 黒色 外 暗褐色・黄灰色
11 小鍋	11.2	―			見込み ←方向の細かいミガキ 体部 円周にそったナデなミガキ	3分割のヘラミガキ	―	内外 黒色
12 〃	15.0	7.2	8.3	1.5	見込み 細かいヘラミガキ 体部 平行ミガキ放射状ミガキ 底部強 放射状ミガキ	丁寧なヘラミガキ	内 ←方向の細かいヘラミガキ 外 ナデ	内外 黒色
13 〃	16.2	―		―	見込み 体部 平行ヘラミガキ	密なヘラミガキ	――	内外 黒色
14 〃	14.8	6.2	6.8	1.1	見込み ←方向の細かいヘラミガキ 体部 ヘラミガキの後ナデ	円周にそったヘラミガキ 底部強に斜放射状ミガキ	内 ←方向のヘラミガキ 底 円周にそったヘラミガキ 外 ナデ	内外 黒色
15 鍋	14.0	4.7	―	―	内面 丁寧なナデ 体部 粗いヘラミガキ	粗いナデ	――	内 黒灰色・暗黄灰色 外 暗赤褐色
16 皿	16.5	5.2	8.4	2.6	内面 ナデ	ナデ	ナデ	内外 暗黄灰色
17 〃	17.9㎝	4.8	11.8㎝	0.7	見込み ナデ 口縁部 斜放射状暗文	粗いヘラミガキ	ナデ	内 暗褐灰色 外 暗茶灰色

（伊藤原図）

表1　井戸跡2・3出土黒色土器観察表

施している。ミガキ調整は施されておらず，光沢がなく，ざらつく器表である。体部外面には，二段にわたり指頭圧で成形し，口縁部は横ナデ調整を施している。高台はしっかりした逆三角形を呈し，横ナデ調整を施している。

両面黒色土器椀（11～14）－B類

11は，口径11.3cmの小椀である。体部はゆるやかに内湾しながら上方に延びる。口縁には太く浅い沈線をもち，端部は角頭形に成形している。調整は，見込み部に丁寧なミガキを施し，体部内面は連続した密なミガキを施している。高台は剥離しているため，形態は不明である。高台見込み部にも丁寧なミガキを施している。全面にわたって炭素の吸着が良好で，光沢をもつ。

12は器高，口径，見込み部，高台ともに大振りである。体部の下辺は丸味をもって張り出し，外上方へと延びる。口縁端部は外側で角頭形に成形し，内側に沈線は見られない。調整は，見込み部に細かく密なミガキを施し，体部内面に平行ミガキを間隙なく施している。体部外面は，丁寧なミガキを５分割に施している。高台高は1.5cmを測り，外開きに踏ん張る形を呈する。端部は外側で角頭形を成形する。高台見込み部には，間隙のない密なミガキを施している。高台内側・外側ともにナデ調整を施している。全面にわたって炭素の吸着が良好で光沢をもつ。

13は，口縁部をわずかに残す破片であるが，調整は12と酷似する。

14は口径，見込み径が大振りで，体部は下辺が丸味をもって張り出し，外上方へと延びる。口縁端部の沈線は形をととめていない。調整は，見込みに密なミガキを施し，体部内面にも密なミガキを施す。体部外面は，横方向のミガキを施し，下部は高台の貼り付部に斜放射状にミガキをめぐらしている。高台高は1.1cmを測り，くの字状に踏ん張る形を呈している。高台見込み部は平行のミガキを施し，外面はナデ調整を，内面は円周に沿ったミガキを施している。

製塩土器

井戸跡２では，埋土中から３片出土した。いずれも体部の破片と思われ，厚さは，18mm，11mm，10mmである。内面は細かい布目痕跡がみられ，赤褐色に焼成されている。胎土中には２mm～６mmの砂粒が多く混入している。ただ，２次焼成を受けた様子は見られない。井戸跡３からは９片出土した。体部の破片と底部と思われるものが１点ある。また，各各の厚さは９mm，７mm～５mm，３mmの３種である。厚みのある器種は，内面に布目痕跡がある。３mmのものは外面にタタキを残している。底部のものは丸底様で脚台はつかない様である。

写真３　井戸跡２・３出土製塩土器片

櫛（図21）

横幅8.7cm，高さ3.7cmの横櫛である。歯の部分は2.8cmあり，歯数は85本である。平面形は長方形を呈

するが肩部は丸味をもち歯部は外開きを呈する。厚みは基部（頭部）で約１㎝である。両面とも平滑に仕上げ，細かい歯を挽き出している。

小　結

以上のように井戸跡２は，曲物による２段の井戸枠が設置されていた。上段に使用された楕円形の曲物の使用例は，類例に乏しい。

また遺物では，黒色土器椀がＡ類，Ｂ類の２種が一括して出土した。これらは井戸底部ではなく，かなり埋まった段階から出土しているため，井戸の廃棄に伴って投棄されたものと考えられる。黒色土器椀は，薬師寺金堂跡の井戸跡48に類似しており，10世紀末から11世紀初頭に比定できよう。（文献４）

３．井戸跡４（図15～22，図版５～７・12・13，写真４～７）

井戸跡４は，古墳時代溝跡２の上に築かれていた。湧水点の浅い地点をうまく選定したものである。井戸掘方は，東西約１ｍ，南北約1.3ｍの方形で，深さは検出面より約70㎝である。井戸は宇

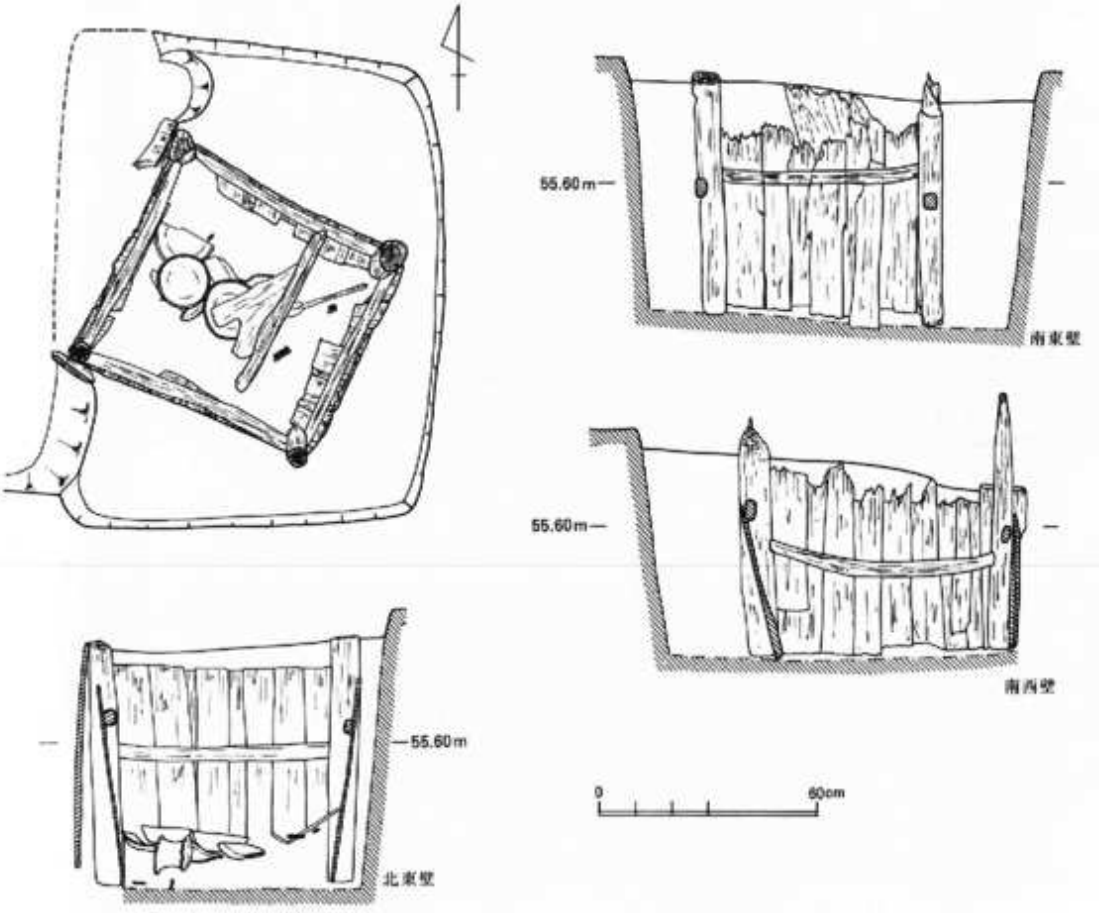


図15　前栽遺跡（第２次）　井戸跡４　平面と各側壁実測図

野隆夫氏分類のBⅣ類にあたる縦板組隅柱横桟どめで，板材を縦方向に組み，四隅に立てた柱に取付けた横桟で保持している。井戸内法は東西約70cm，南北約60cmである。井戸側に使用された縦板は幅が狭いために，継ぎ目をつくらないよう二重に使用していた。横桟は隅柱の枘穴加工より二段組であったと思われるが，発掘時には下段の横桟は失われていた。井戸側全体が内側へせり出していたため，はずれてしまったものであろう。井戸底には水溜の施設はなく，平坦であった。また，上部の井桁組についても推測できる資料はなかった。井戸内堆積は上面から木片，木葉など有機質分に富む粘土であった。このため，廃絶後に人為的に埋めもどされた形跡は認められず，放置されていたものと思われる。ただ，埋土中からは，瓦器は出土していない。（文献5）

隅　柱

1は，長さ約70cm，基部の直径約8cmである。末部は風化と腐食のため先細り状態である。基部

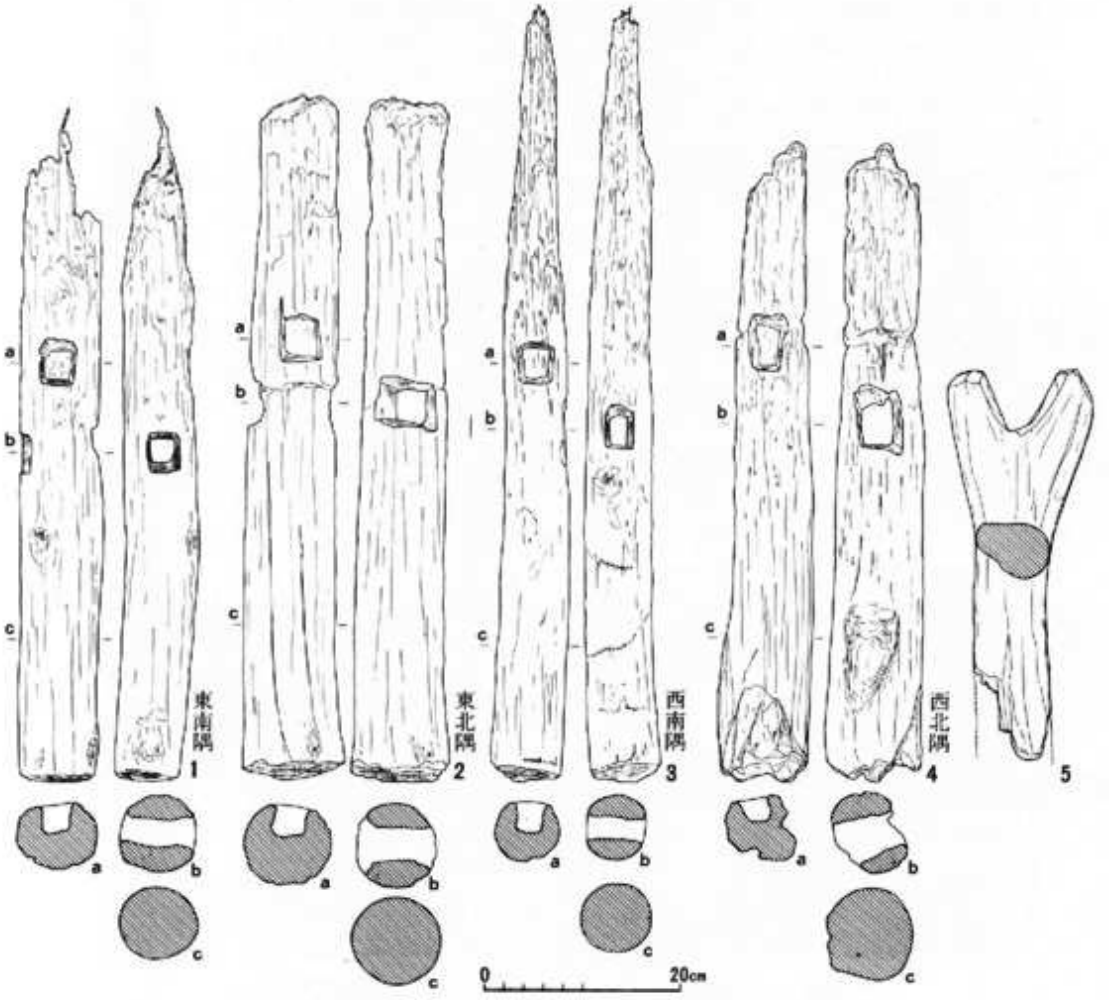


図16　井戸跡4　隅柱材実測図（5はささえ材）

小口がナタ状の刃物で粗く削られているが枘穴を除いては加工はない。枘穴は，基部から34cmと43cmに穿たれている。3×4cmの方形孔であるが，下部は貫通し，上部は半ばまでで，貫通していない。

2は，長さ約70cm，基部直径は約10cmあり，小口部は粗く切り取られている。枘穴は基部より39cmと45cmの部分に穿たれている。上部は貫通していない。

3は，長さ約80cmで末部は腐食が甚だしい。基部直径は約7.6cmあり，小口部は粗く切られている。枘穴は基部より36cmと43cmに穿たれている。上の枘穴は貫通していない。

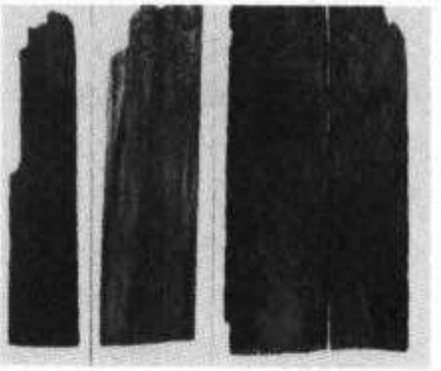


写真4　井戸跡4　縦板側板小口

4は，長さ約66cm，基部の直径は約9cmである。小口部は加工がなく折れた材を使用している。

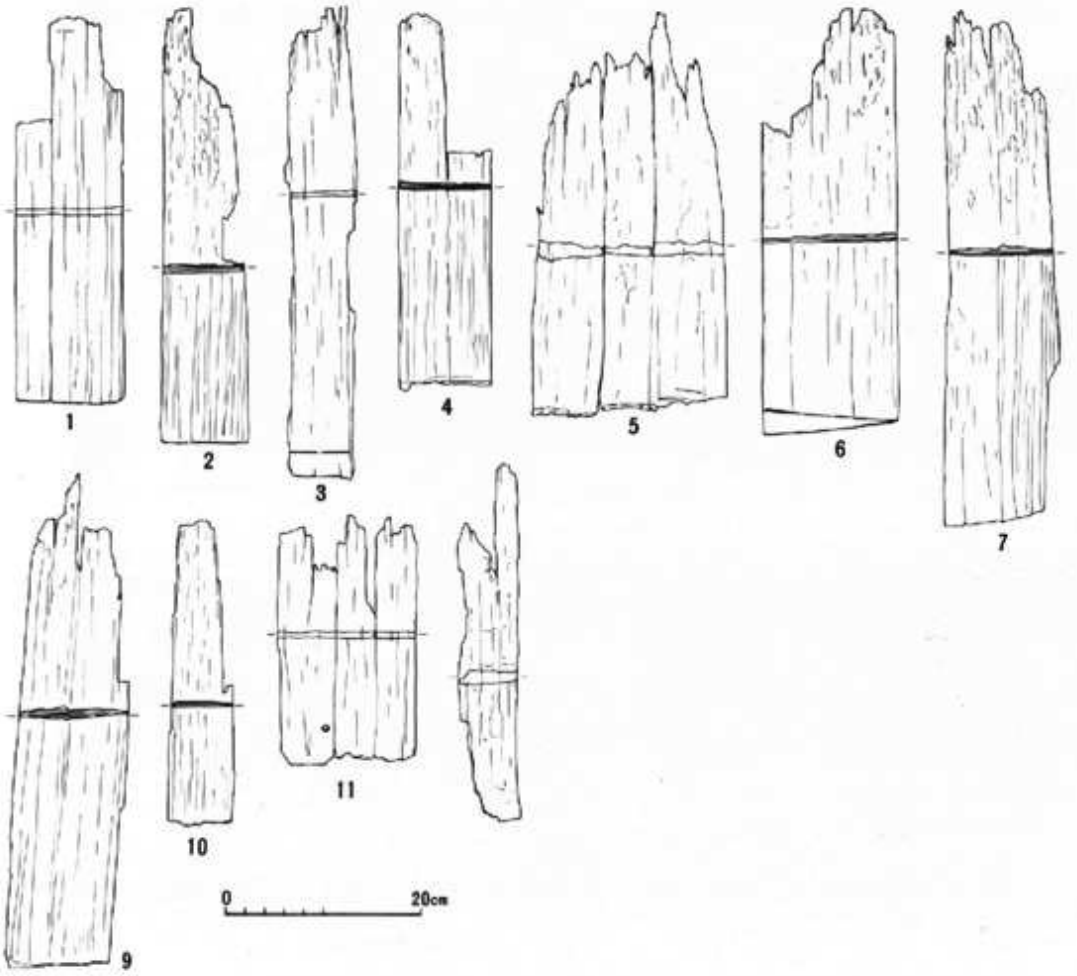


図17　井戸跡4　東壁井戸枠板材実測図

枘穴は基部より37cmと45cmに穿たれ，上部は貫通していない。

5は，上段の横桟を支持していたY字形の自然木である。叉の内側に加工痕がみられる。基部は直径約8cmである。横桟木は発掘時に，すでに各所で折れており，取り上げられなかった。すべて自然木で，枘部分のみ加工していた。

東壁井戸側縦板

11枚実測を行ったが，規格された大きさはないようで1枚ずつ異なっている。基部は腐食していないが末部の残っているものはない。板材の幅は，3・10のように7cm程度のものから，5・11のように15～20cmのものまで使用されている。面取り加工も両側に施されているものはなく，片面のものが多い。5のように両面とも未調整の板もある。

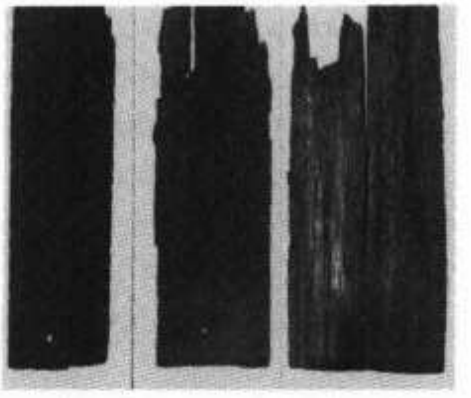


写真5　井戸跡4　縦板側板小口面小孔

基部の小口は加工されているが，3・4・6・10

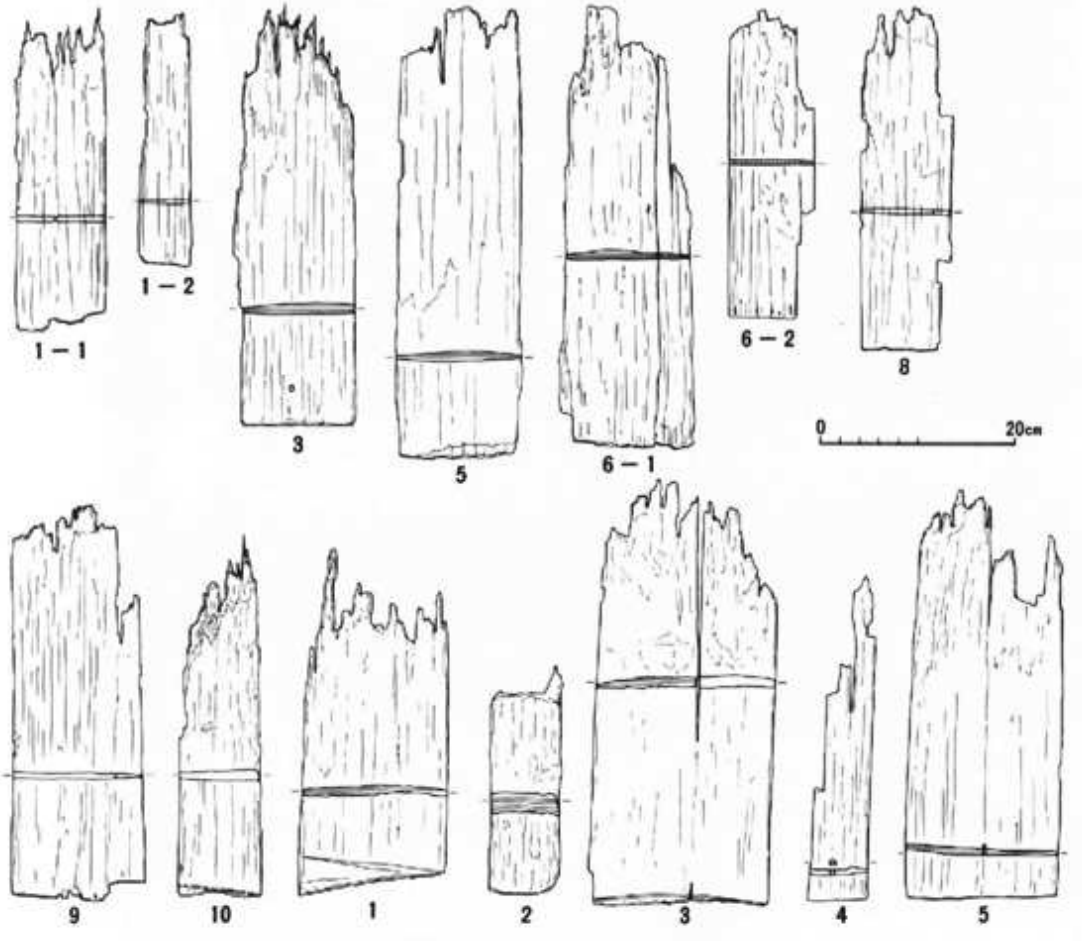


図18　井戸跡4　西，南壁井戸枠板材実測図

のようにナイフ状の切れ目を入れて，あたかもへし折ったような小口を作っている。3・6は，小口部より2.4cmと2cmの部分にも切り込み痕がみられる。10の板材は，基部より約4cm上に直径6mmの円形孔が穿たれている。井戸側の縦板を二重に使用したことから，前後の板を止めるための紐通しかとも考えられる。

西・南壁井戸側縦板

西面は9枚を実測した。1－2・6－2は幅5～6cm，厚さ5mm程度の小さい板材から，9のように幅14cm近いものまであり規格はみられない。5の板面は加工が少なく粗いつくりである。小口面の切り込みは，6－1・10などにみられる。10は，縦方向に直角に切られ，また折れの状況も良く残している。9の小口面も左右からの切れ込みによって切断されているが直角に切られていない。3には基部より4cm上に，直径6mmの円形孔が穿たれている。

南壁井戸側縦板は5枚実測した。1・3は，幅15～18cm，厚さ1cm程度ある。小口にも切断痕跡

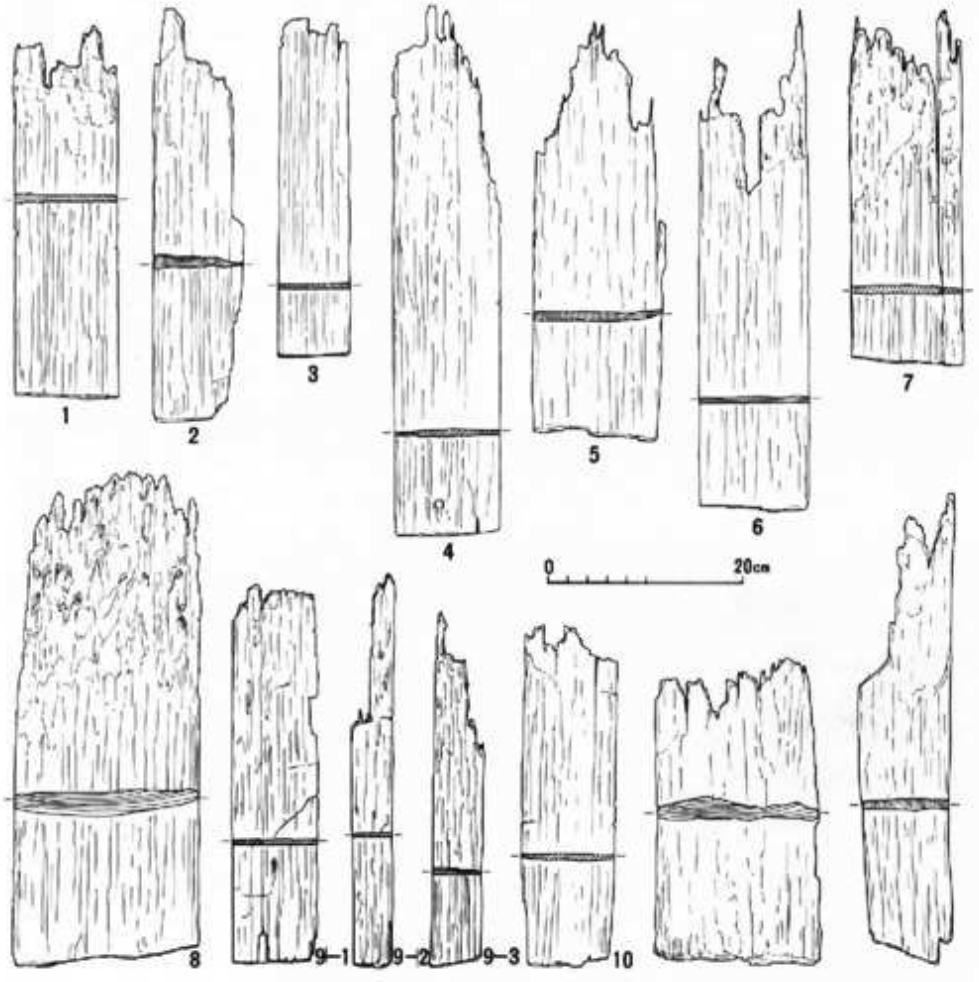


図19　井戸跡4　北壁井戸枠板材実測図

が明瞭にみられる。4・5には基部より4cmと5cmの部分に6mm程度の円形孔を穿っている。

北壁井戸側縦板

板材は14枚実測した。この面は平均して幅10cm，厚さ6mm前後のものが多く使用されている。しかし，8と11は板材として加工されていない。転用材を井戸側に使用したものと思われる。11・12は，北東隅柱の裏側に使われていたものである。4は，基部より3cm上に直径8mmの円形孔を穿っている。

井戸内埋土は，有機質分に富んだ黒灰色粘質土で，木葉，樹木などもみられた。井戸底部は平坦面になり，白砂が露出して湧水が続いた。出土遺物は，土器類と木製品類などであるが，井戸底から約10cmの埋土内で集中して出土し，竹製の斎串は北西隅付近の井戸底に立った状態で検出した。木製斎串も井戸底のレベルで検出した。しかし，奈良時代以降の遺物は，埋土中からは出土しなかった。

出土遺物は，土師器3点，黒色土器1点，須恵器1点，木製品3点，竹製品1点，桃核1点である。

土師器皿（1）

口縁部径15cm，器高3.7cmあり茶褐色を呈している。内外面ともナデ調整の後に外面はケズリを口縁端部付近まで加えている。内面はハケ調整である。底部外面には「亡」の墨書がある。内面見

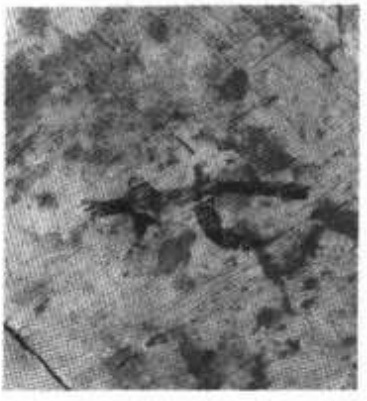


写真6　土師器皿（1）墨書

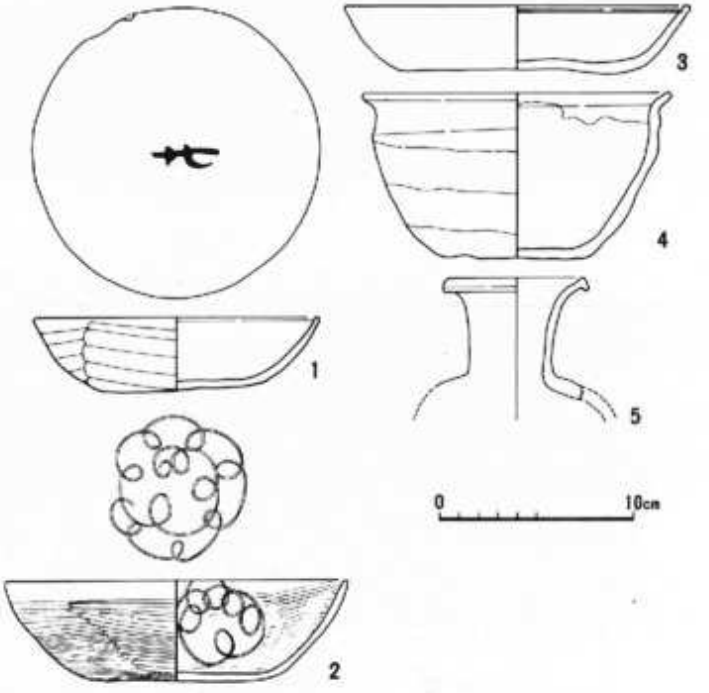


図20　井戸跡4出土土器実測図

込み部にも墨痕が認められる。

黒色土器杯A類（2）

杯Aタイプで口縁部径17.5cm，器高5.2cmである。体部外面は茶灰色を呈するが，口縁端部から内面にかけては燻銀状に黒灰色を呈している。調整は，内外面とも丁寧なヘラミガキを施しており，内面の見込みに二重の連結輪状文を，体部には3か所に一重の連結輪状文を施している。

壺（4）

口縁部径14cm，器高8.5cmあり，色調は内外面とも灰白色を呈している。体部は粘土紐の巻き上げ痕跡を残し，底部は型づくりの痕跡をとどめている（I類）。いわゆる「人面用土器」に分類される特徴をみることができる。内面は，全面にわたって漆が付着し，ハケ痕跡がみられ，ハケで内面を塗布したものと考えられる。平城京東堀川（SD1300）（文献6）では，この種の壺に人面が墨書きされているものが多数出土し，また，人面がないものの漆が塗られた壺もあり，これらは人面を描いたものと同様に，祭祀に使用されたものと考えられている。

須恵器

壺（5）

口頸部の破片である。口縁径は7cmあり，細頸で短かい。外面は薄く自然釉が付着している。

木・竹製品

斎串（1～3）

1・2は木製である。1は，残存長約13.5cm，厚さ2.5～3mmである。2は，残存長約8cm，厚さ2mmである。両者とも両面加工を施し，尖端を鋭利にとがらせている。3は，竹製である。残存長約6.5cm，厚さ2.5～3mmで，外側は節を残しているが，内側は平らに削り，下端は尖らせている。節より上部は縦方向に細かい切れ目を入れている。

竹製の斎串は未だ報告例はないが，形態的な特徴と，井戸底に先端を地面に立てていたことから，斎串と推定できる。

櫛（6～8）

いずれも横櫛の破片である。比較的良好な6は，縦幅約3.5cm，厚さは9mmあり，7・8は小型品で，縦幅は約2.2cmである。

匙（4）

匙先端部を少し欠いているが，匙部分は，木理文様を生かして自然な装飾文様になるよう加工されている。全長30.5cmで，匙面は長さ8.5cm，中央部幅3.8cmあり，中央部は縦方向にV字状に彫り込

写真7　井戸跡4出土製塩土器片

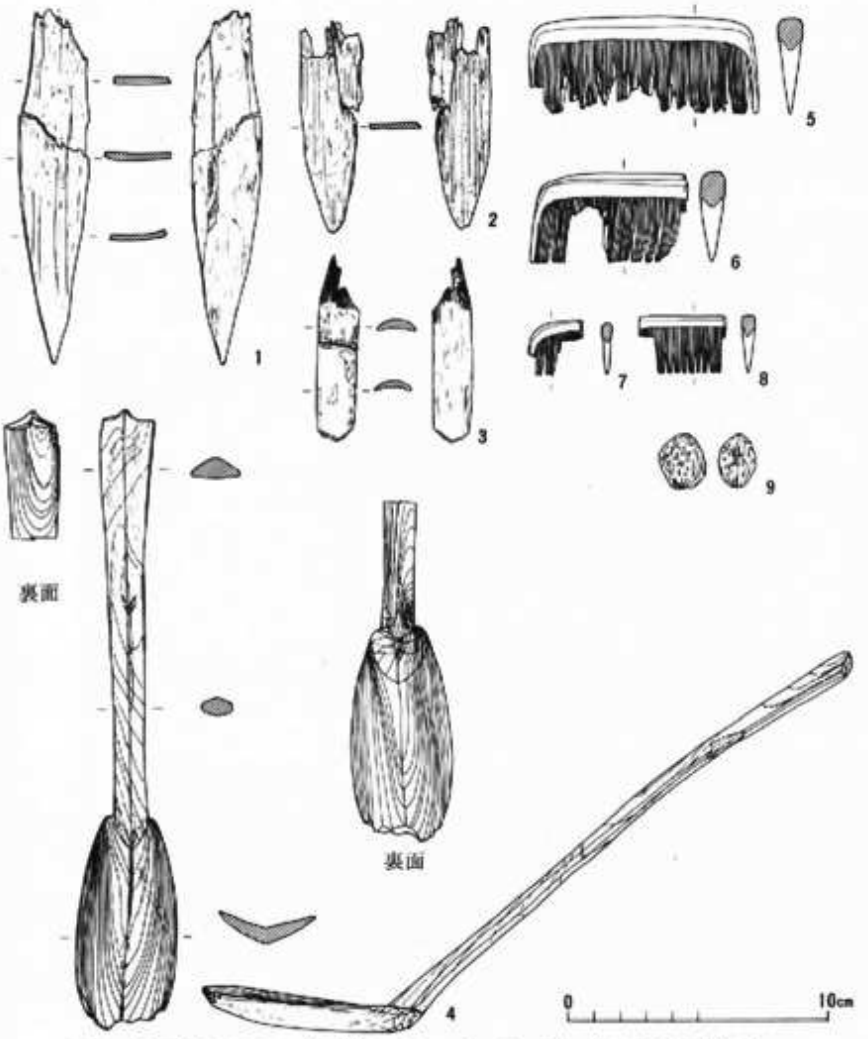


図21　井戸跡2（5），井戸跡4（1～4，6～9）出土遺物実測図

まれている。厚さは6㎜である。全体的には尖端へ少しずつふくらみ気味である。裏面も少し厚味をもたせて平滑に仕上げ，木理文様を浮き立たせている。また，柄部との境は巧妙な細工が施されている。

匙面の深さは約5㎜である。柄部は横からみると一直線ではなく，やや外ひろがりにつくり，幅も尖端にしたがい広くなっている。長さは22㎝で，中央部幅約1.2㎝，厚さ7㎜，断面は横楕円形を呈している。表面は中央部に稜線をつくり裏面は丸味をもったつくりである。端部は，八字状の巧妙な加工を施し，裏面の木理文様を美しく浮き出している。匙と柄部は約135度の角度をもち，尖端では幅2㎝で断面は三角形を呈し厚さは約8㎜である。（樹種　ツバキ属）

木製匙では，このような類例は見られず，正倉院南倉に残る佐波理製の木葉形の匙であるとか，（文献7）

韓国新羅雁鴨池出土の青（文献８）銅製匙などが形態的に類似している。いずれにしても，木理を巧妙に生かした優品である。

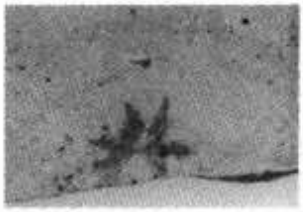


写真８　須恵器墨書

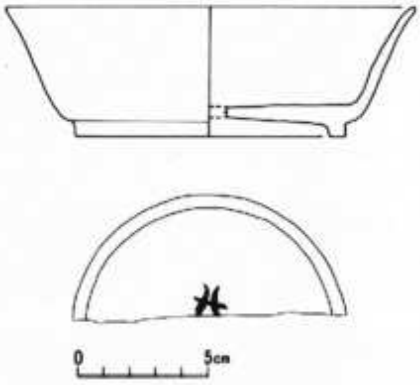


図22　前栽遺跡（第２次）
溝跡４出土墨書土器実測図

小　結

井戸跡４は，構造上，縦板組隅柱横桟どめの型式に属し，井戸底には集水施設をもっていなかった。ここから出土した遺物は，あまり多くなかったが，竹製斎串が尖頭部を井戸底の砂層に立てていたことは注目される。また，木製匙も類例を見ないものであり，工芸品としても洗練されたつくりをみせている。井戸４の時期は，黒色土器Ａ類や土師器により，８世紀末から９世紀初頭に比定できよう。

溝跡４出土　杯（写真８，図22）

溝跡４は，上層で検出した素掘溝である。混入品と考えられる。杯は高台付の須恵器で，口縁部径15.8cm，器高５cmである。体部は長さ５cmで外上方に開き気味の形態を呈する。高台裏見込み中央部に「卍」の墨書がある。これは，井戸跡４出土の土師器皿見込み墨書銘の筆法とよく似ている。

第３節　下層遺構　（図23，図版８）

下層遺構は，弥生時代溝跡，古墳時代土坑，古墳時代溝跡などである。

１．弥生時代溝跡（図24，図版９・14）

溝跡１は，調査区の北端付近にあり，規模は幅約1.5ｍ，深さ約10cmである。東西方向に流れており，弥生土器が集中して出土した。この埋土中からは，他の時期のものは含まなかったことから，弥生時代の唯一の遺構と考えられる。このほかにも，井戸跡２の埋土中や遺物包含層中より弥生時代の土器が出土した。

壺底部（４・６）

４は，体部がやや立ち上がるタイプである。胎土は石英，長石の砂粒混入が多い。６は，外面タテハケを施している。

このほか，１～３・５・７・８・10は包含層から，９は井戸跡２の埋土内から出土した。

１は，甕の口縁部破片である。端部は外方に逆Ｌ字状に屈曲し，断面Ｖ字状の浅い刻み目を入れ

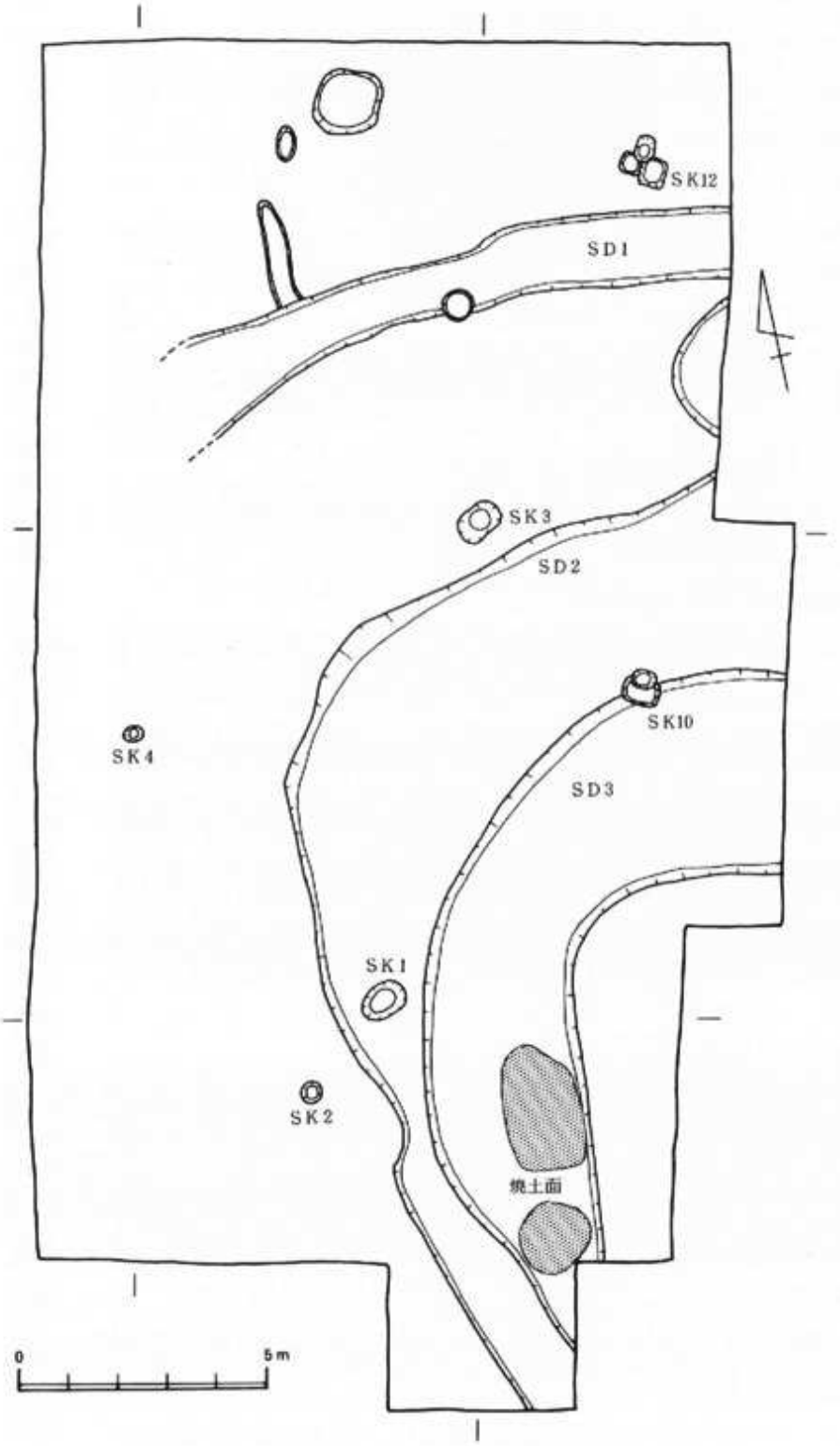


図23　前栽遺跡（第２次）　下層遺構（弥生，古墳時代遺構）平面図

ている。体部は５条のヘラ描凹線文を施している。胎土は白色を呈し，角張った長石，石英粒が多く混入している。弥生時代Ⅰ様式（新）である。２は，甕で口縁部径13.5cm，体部残高7.5cmである。短い口縁端部が外上方に屈曲し，体部は長細い。端部には刻み目を施す。体部内外面とも細かいハケ調整を施している。胎土は茶灰色を呈し，角張った長石，石英粒が多く混入している（Ⅲ様式）。10は，壺である。口縁部から体部半ばにかけて残存している。口縁部径14cm，残高16.5cm，体部最大径25.5cmである。口縁端部は外方へ大きく開き，体部は最大径で鋭く張る。装飾は口縁部に櫛描波状文を施している。調整は頸部にみられるが，細かい横位のナデ，内面は体部が左下方へのハケ，その下は横位のハケ調整がみられる。体部最大径になる部分には，ヘラ状工具の小口で刺突した様な痕跡がみられる。これは，接合部における加工痕と思われる。表面は灰白色で細粒の石英，長石，雲母などを混入している（Ⅲ様式）。３～９は，底部の破片である。このうち５は，体部の表面に粗いハケ調整が顕著に施されている。９は，壺の下半部と思われるが，表面はタテ方向のヘラミガキが施されている。

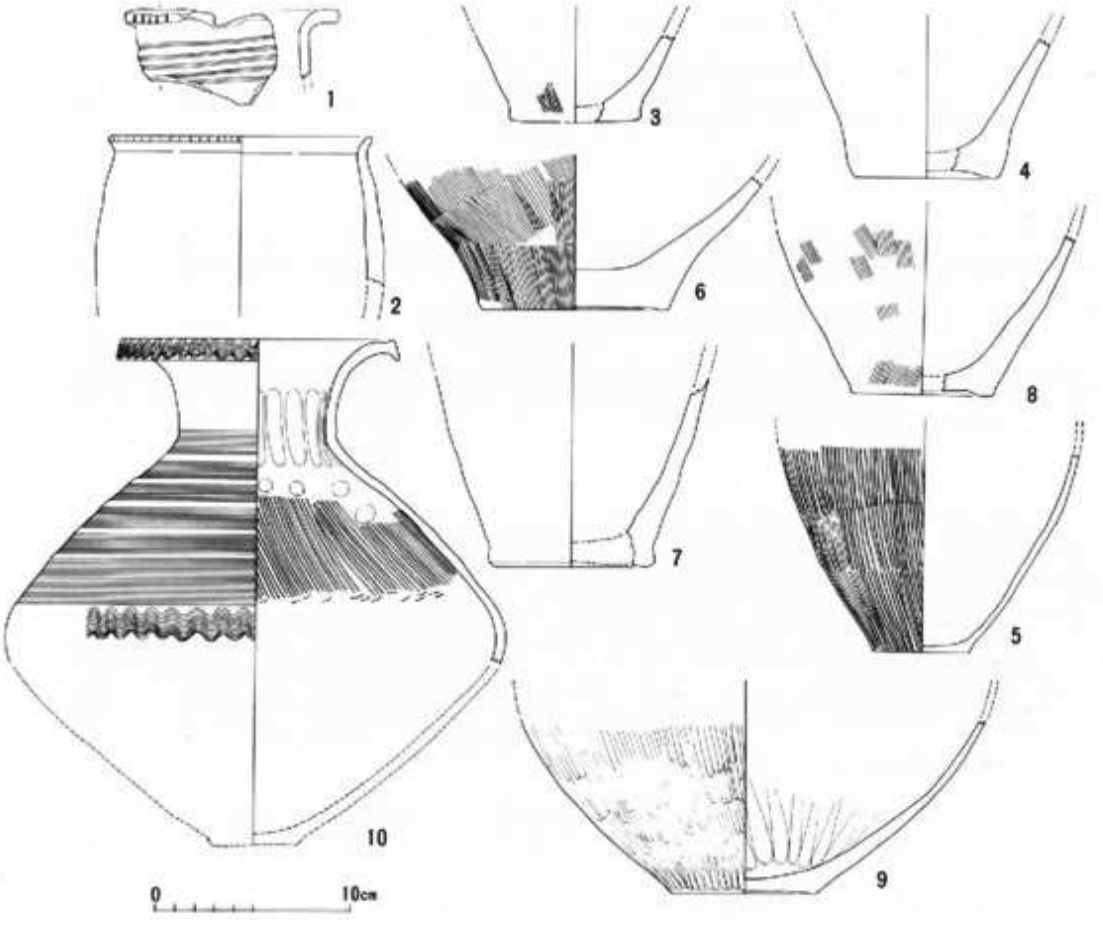


図24　前栽遺跡（第２次）　弥生時代土器実測図（４・６はＳＤ１，９はＳＥ２，他は包含層）

他に破片であるが，溝跡１より甕が出土している。これは，口縁部が短く「く」の字状に屈曲する。刻み目はない。口縁部外面は横位の粗いハケ，体部は右下がりの細かいハケ調整を施している。胎土は角張った長石粒が多く混入している（前期）。

溝跡１は，弥生時代前期～中期を中心として，ごく限られた時期の流路であったと考えられる。

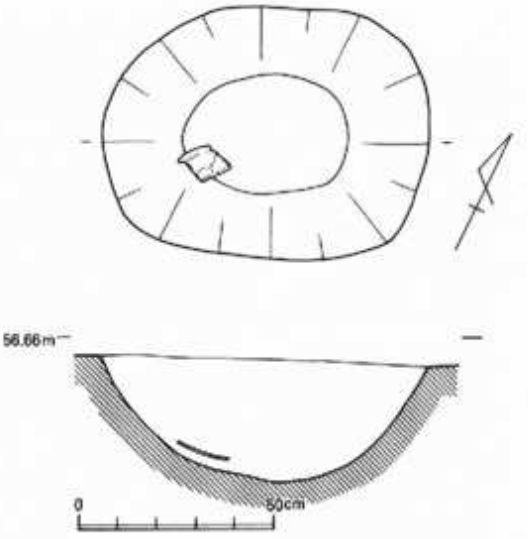


図25　前栽遺跡（第２次）　土坑１実測図

２．土　　坑（図25～27）

土坑は，上・下の遺構面にわたって検出され，19か所を数えた。しかし，遺物は少なく見るべきものもなかった。古墳時代に比定できる土坑は，１～４・10～13などである。これらは，古墳時代以降の遺物を含んでいない。ただ，遺物を図面で示せる良好なものはない。

土坑１

東西87cm，南北63cm，深さ32cmの楕円形を呈している。下より暗灰黒色粘質土，暗褐色粘質土，暗茶褐色粘質土の堆積があり，下層から土師器甕の口縁部破片が出土した。

土坑２

直径44cm，深さ34cmの円形を呈している。下より暗灰色砂質土，暗茶灰色砂質土，暗黄褐色土である。遺物は出土しなかったものの下層遺構面で検出した。

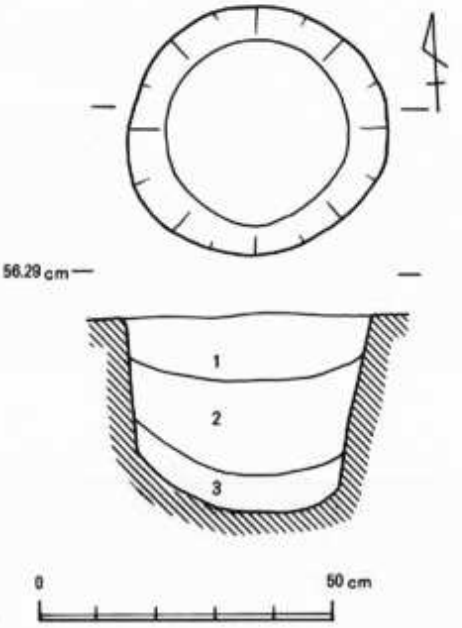


図26　土坑２実測図
１．暗黄褐色土　２．暗茶灰色砂質土　３．暗灰色砂質土

土坑３

短辺75cm，長辺87cm，深さ58cmの楕円形を呈している。下より黒灰色粘質土，暗黒灰褐色粘質土で，土師器破片が少量出土した。

３．溝状遺構２，３　（図28～30，図版15～17，写真９・10）

調査地内の南東部において流路を検出した。溝２，３は，同一流路内の堆積の差を示しているが，

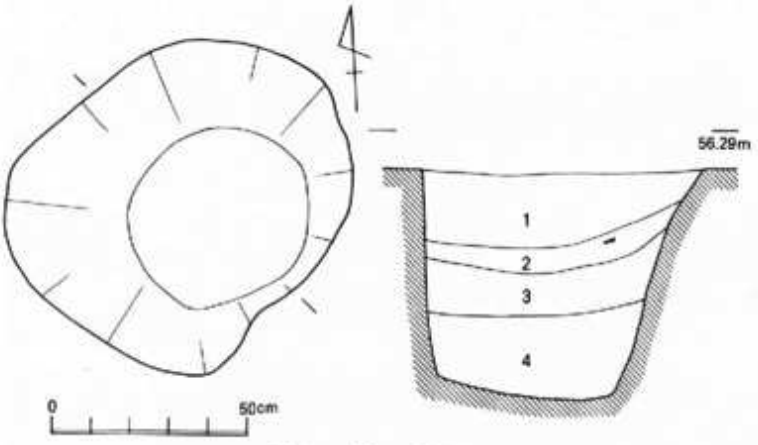


図27　土坑３実測図
1.茶褐色砂質土　2.暗灰褐色粘砂土　3.暗黒灰褐色粘質土　4.黒灰色粘質土

遺物は溝２では出土せず，すべて溝３からの出土である。溝２の規模は，東壁で幅8.3ｍ，南壁側で幅3.2ｍである。深さは約50～80cmである。溝３は，東壁側で幅４ｍ，南壁側で約1.8ｍ，深さ約60cmである。また，溝３の上面には焼土面の広がりがみられ，製塩土器片が炭灰層中より少量ではあるが集中して出土した。

出土遺物は，土師器・須恵器などのほかに，瓦質で表面に格子目タタキを施した壺形土器が，溝３の西側肩部の平坦面から出土した。そしてこの中の埋土より臼玉が２個出土した。

土師器（１～19）

杯（１～５）　２段に屈曲する口縁部をもち，端部は外上方にひらく。底部は平底である。１～３は口縁部径12cm，器高3.5～４cmである。４は口縁部径13cm，器高4.8cm，５は口縁部径15.5cm，器高5.5cmあり，４・５は深みがあり大形品である。

鉢（６・７）　６は口縁部径13.3cm，器高５cm，７は口縁部径12.5cm，器高5.5cmである。形態的には球形で丸底である。胎土は精製されている。７には，６段の輪積み痕跡を残している。

壺（８・11・14）　８は口縁部径9.4cm，器高11cm，体部最大径12.2cmである。口頸部は短く，やや外上方に向いている。底部は平底である。表面全体に粗いハケ調整を施している。11は把手付壺である。口縁部径11.2cmで底部を欠いているが，器高約10cmである。把手は長さ6.5cmあり，先端は上方を向く。断面は２×1.2cmの方形である。器壁表面は細かいハケ調整を施している。14は口縁部径9.5cm，残高14cmあり，長頸壺である。胎土は精製され，灰白色を呈している。調整は口縁部がヨコナデ，体部は細かいナデ調整を施している。

高杯（10）は脚部の破片である。脚高7.5cm，脚底径11cmあり，外面はタテ方向のヘラミガキ調整を施している。脚部は外方に屈曲し，脚端部は踏ん張る形態を呈する。

甕（９・12・13・15～19）　９・12・13のように小形で口縁部が直立気味のものと，大形で口縁部が屈曲するものがあり，９は口縁部径15.5cm，残高７cmあり，調整は口頸部がヨコナデ，体部は

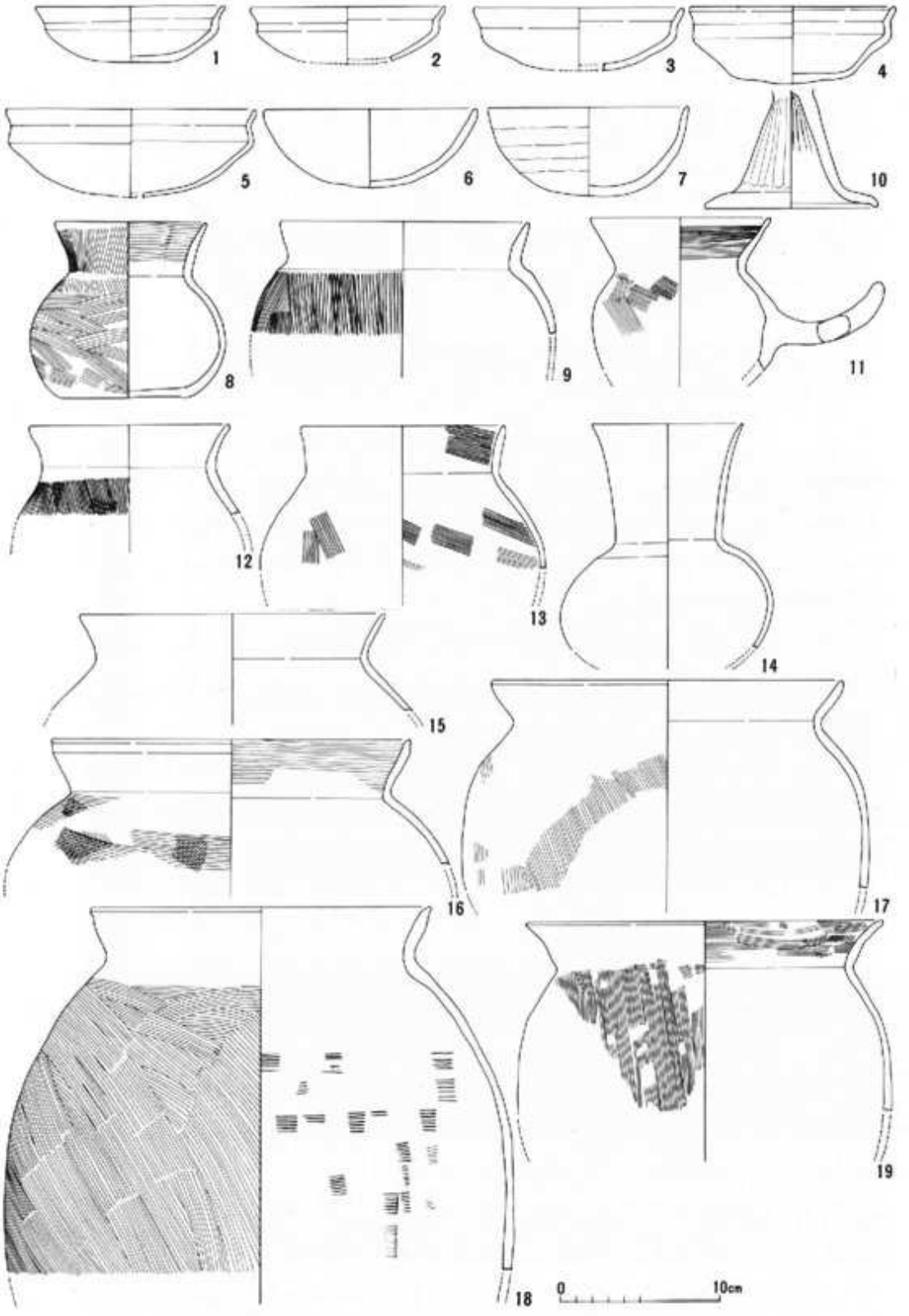


図28　前栽遺跡（第２次）　溝跡３出土土師器実測図

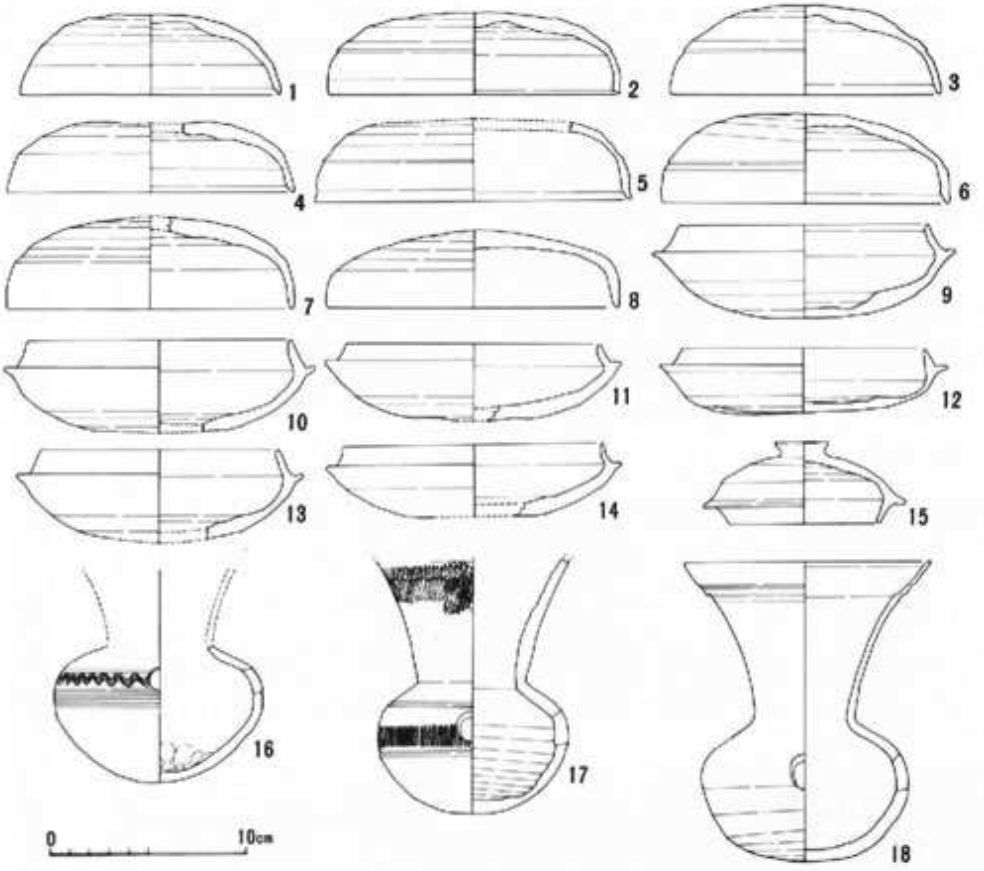


図29　溝跡３出土須恵器実測図

粗いタテ方向のハケ調整，口縁部径19cm，残高６cmあり内外面とも赤褐色を呈しているが摩滅が著しい。16は口縁部径22.5cm，残高８cmである。口縁部外面は外側に張り気味で端部は擬凹線がみられる。体部外面と口縁部内面は粗いハケ調整を施している。17は口縁部径22cm，残高13cm，体部最大径25.5cmである。口縁部は外側に張り外反する。体部は長胴型で肩部は上方に張りがある。18は口縁部径22.3cm，残高12cmあり，体部最大径は23.5cmである。口縁部は外上方に外反する。体部外面はタテ方向のハケ調整を施している。ススの付着が著しい。19は体部に把手が２か所つく。口縁部径21cm，残高23cmあり，体部最大径は32cmである。口縁部は外に張り気味で，端部はつまみ上げている。体部は外面右下がりの粗いハケ調整を施し，内面はハケ調整を施している。

須恵器　須恵器は実測個体が18個体あり，破片は相当数出土した。

杯蓋（１～８）　１～６は，体部肩に明瞭な稜をつくり，端部内面は段をつける。端部は外広がりで，体部外面のヘラケズリ調整も丁寧である。７・８は，体部肩の稜が省略され，端部内面の段もみられない。体部外面のヘラケズリは中位より行っている。

杯身（９～14）　９～11は，口縁端部に段をつけ，立ち上がりも長くしっかりしている。内法は

深さがある。12〜14は，立ち上がりは短く，内法も浅い。扁平なつくりである。このように，蓋，身とも異なる型式がみられる。15は，壺の蓋である。口縁部径7.6cm，高さ4.2cmあり，受け部径は10.5cmである。立ち上がりは内傾し，端部は丸味をもつ。

壺（16〜18）　16は，壺の体部である。体部最大径10.5cm，残高7cmで底部はやや尖り気味である。体部に二条の凹線文によって装飾帯をつくりその間を波状文が施されている。17は残高13cm，体部最大径9.7cmである。頸部接合部はく字形に屈曲し，体部は球形である。文様は頸部上半に一段の波状文を施し，体部には二段の凹線文を装飾帯として，刺突文を施している。また，頸部から肩部にかけて濃緑色の自然釉が付着している。18は，口縁部を少し欠く程度で全体がわかる。器高15.4cm，口縁部径12.5cm，体部最大径10.5cmあり，口縁部はラッパ状に開口している。口縁下端は屈曲段をつくる。体部は扁平気味で球形を呈している。体部下半は回転ヘラケズリの調整を施す。

瓦質壺形土器

器種は壺で胎土は土師器の赤焼のものではなく，精製された胎土で瓦質を呈している。体部と口縁部ははずれて少しずれていた。土坑等の埋納遺構は検出されなかった。

壺内の土中より滑石製臼玉が2個体出土した。玉製品が壺に固有のものであったかは確認できないが，このような出土例もあり，壺を逆さにして溝跡3の岸辺に置いたことも考えられる。器高17.6cm，口縁部径12.3cm，体部最大径16.5cmである。内外面の色調は黒ずんで，断面は白色を呈し

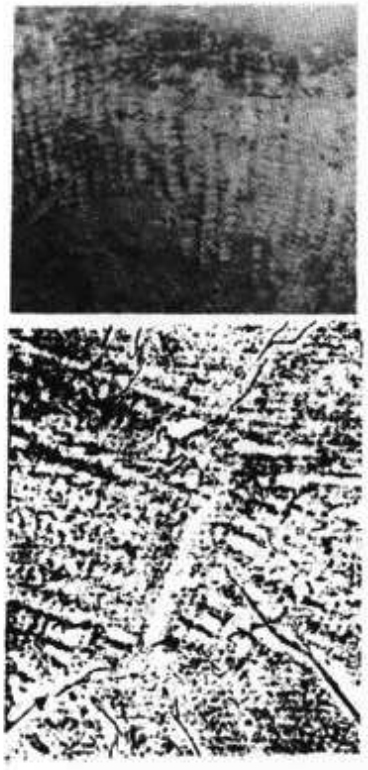


写真9　溝3出土壺器表調整

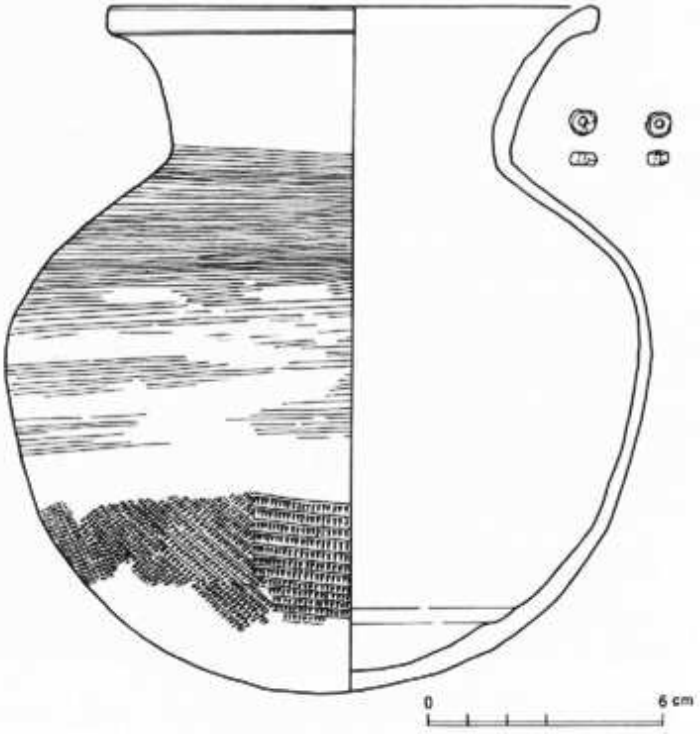


図30　溝跡3出土土器，玉実測図

軟質である。口縁端部は角頭形で，頸部はやや短く外側へ少し張り気味である。体部は最大径が上方にあることから肩部に張りがみられ，底部は丸い。底部内面は皿状の押型痕がみられる。外面の調整は，口縁部から体部上半は回転ナデ調整であるが，体部下半は細かい格子目タタキを残している。あて板の格子幅は横が約２㎜である。体部中央ではヘラケズリもみられ，格子目タタキを削っている。ハケは粗く板の小口面を利用している。

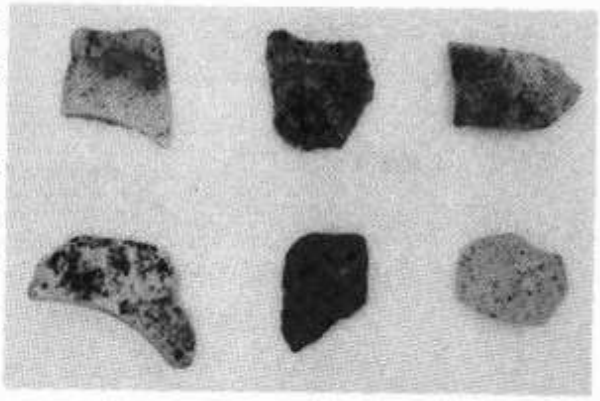


写真10　溝３出土製塩土器片

石製品

滑石製の臼玉で２個体あり直径6.5㎜，厚さ約３㎜である。中央に約２㎜の穴を穿つ。暗灰緑色を呈するが材質は悪い。

製塩土器　焼土面より11破片が出土した。遺存状況が悪いため図示できるものはなかった。この中には体部表面にタタキを留めているものもある。

小　結

溝跡３出土の土器類については，以上であるが，須恵器にみられるように，少し時期差が認められ，６世紀前半～中葉と考えられる。また，完形品は少なく，廃棄されたものと推定される。

４．包含層出土遺物　（図31・32，図版18・19）

第３，４層より出土した遺物は，土師器，須恵器があり，これらに弥生土器が少量混入していた。

土師器

土師器は杯，高杯，甕などの器種がある。

杯（１・２）　１は口縁部径13㎝，残高3.5㎝で口縁端部はつまみ上げである。体部で少し屈曲する。２は口縁部径15㎝，残高4.2㎝あり，口縁端部は外上方につまみあげ，内面に段をつくる。体部の稜は明瞭である。

甕（３～８）　３は口縁部径15.7㎝，残高５㎝である。口縁部はやや外方に張り気味である。体部外面にはタテ方向のハケ調整を施し，口縁部内面はヨコ方向のハケ調整を施す。４は口縁部径11㎝，残高3.5㎝あり，口縁部は外上方に立ち上がる。体部外面はタテ方向のハケ調整を加えている。５は口縁部径15.2㎝，残高６㎝ある。体部最大径32㎝あり堅緻なつくりである。口縁部は短く屈曲し，端部は角頭形を呈している。体部外面はタテ方向のハケ調整を施し，内面はやや細かいハケ調整を施す。７は口縁部径31㎝，残高８㎝である。全体に白色を呈しているが焼成は堅緻である。口縁部は外上方に長く延び，端部はやや傾斜をもって角頭形を呈している。調整は口縁部外面がタテ方向の粗いハケを施し，内面は粗いヨコ方向のハケ調整を施す。８は口縁部径11㎝，残高4.5㎝で

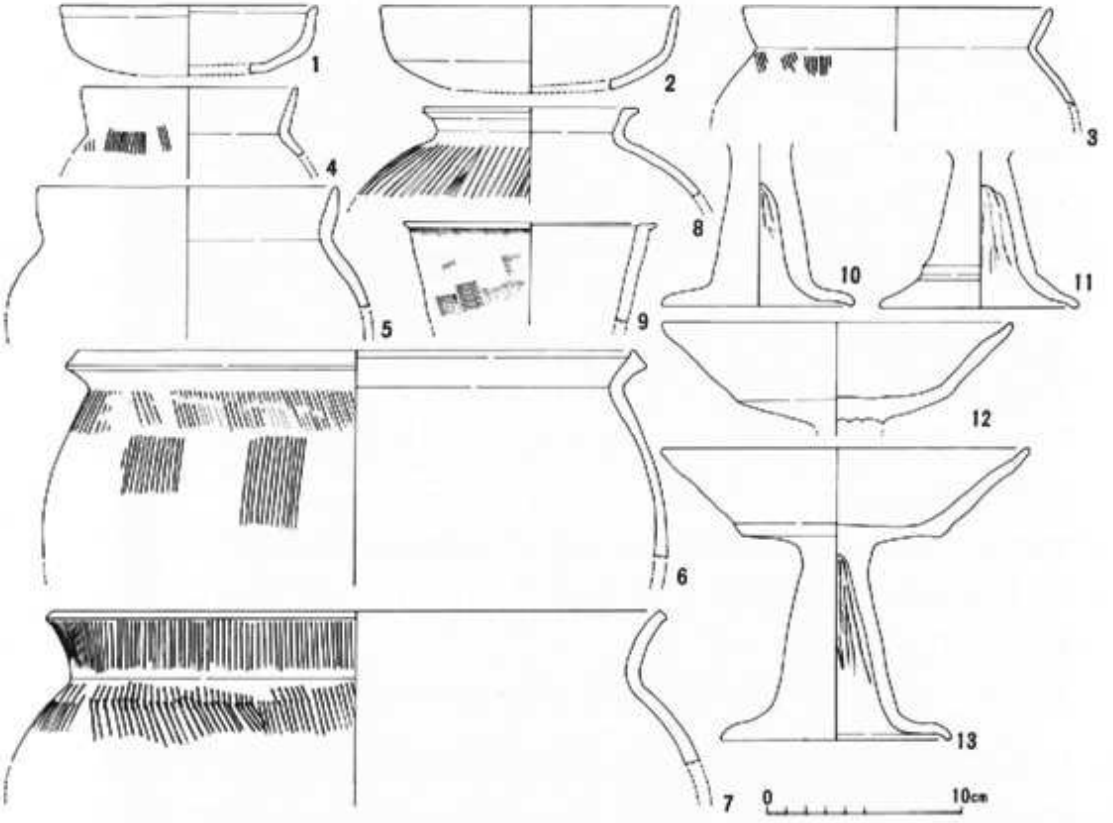


図31　前栽遺跡（第２次）　包含層出土土師器実測図

ある。頸部は短いが外上方に屈曲し，口唇部は凹状に平坦面をつくる。体部外面はタテ方向の粗いハケ調整を施す。胎土は白色でＳ字状口縁甕である。

高杯（10～13）　10・11は脚部である。脚高9.5cm，底径10～12cmあり下部で外に屈曲し，端部は踏ん張る形をとる。12は，杯部の破片で，口縁部径17.8cm，器高5.5cmあり，稜をつくる。端部は上方につまみあげる。内面見込みにはハケ調整がみられる。13は，杯部口縁部径19cm，器高15cmあり，脚部は高さ10cm，底径11.8cmである。杯下部に稜をつくるが，見込みは平たく浅い。脚裾部は極端に屈曲し，端部は踏ん張るような形態をつくる。

器種不明（９）　口縁部径13cm，残高５cmあり，やや内傾する。口唇端は外側へ小さくひねり出すようにつくり，上面はナデ調整により平坦につくる。表面はタテ方向の細かいハケ調整を施す。胎土には砂粒を含まず，焼成も良好である。

須恵器

包含層出土の須恵器は，奈良時代のものも少量みられる。資料的には混在するようである。

杯蓋（１～４）　１は口縁部径16.2cm，器高4.7cmである。口縁端部は外方へ延びる。稜はつくるものの明瞭ではない。外面のケズリは体部上半にゆるく施す。２は口縁部径15.2cm，器高４cmで

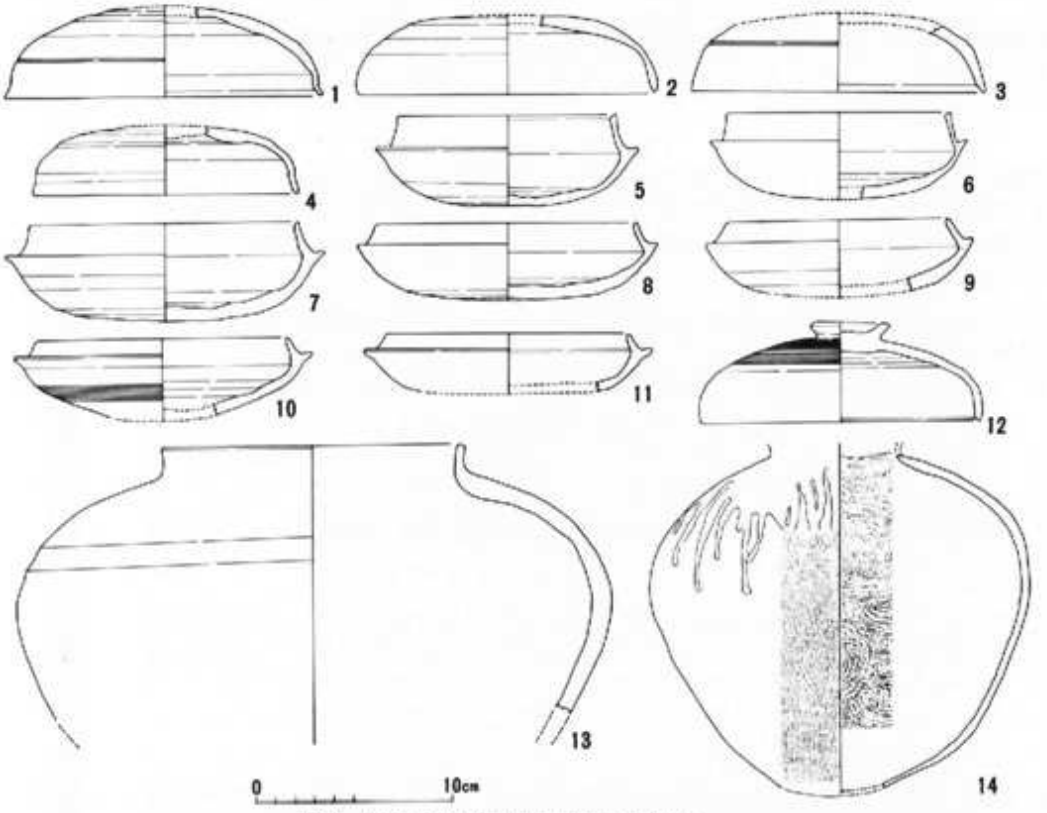


図32　包含層出土須恵器実測図（14は⅙）

ある。口縁端部は丸くおさめ，稜は見られない。3は，口縁部径15cm，器高5cmである。口縁端部内面に段をつくり，外面は稜をつくる。4は口縁部径13.5cm，器高3.5cmあり体部から口縁部にかけて少し張り気味になる。ヘラケズリ調整が体部全体にあり，平たい器形である。

杯身（5～11）　5は口縁部径11.0cm，器高4.6cmあり，口縁部は長く上方へ外反する。端部にひねりを施し，内面では明瞭な段をつける。受部もしっかりしたつくりである。体部下半はヘラケズリを施している。6は口縁部径11.5cm，器高4.5cmである。5と同一形態をとる。7は口縁部径15.2cm，器高5cmあり，口縁部の立ち上がりは長い。端部は丸く仕上げている。体部は下半部が簡略的にヘラケズリを施す。9は口縁部径11.3cm，器高4cmあり，立ち上がりはやや内傾する。受部は小さい。10は口縁部径12.7cm，器高4.2cmである。立ち上がりは短く，器高も低くなっている。体部表面は回転ナデ調整を施す。11は口縁部径14.3cm，器高3cmである。10と同一形態をとる。杯身は3型式以上混入しているようである。杯蓋（12）は，口縁部径14.3cm，器高5.1cmあり，端部内面には段をつけている。体部表面は全面に回転ナデ調整を施している。短頸壺（13）は，口縁部径15.5cm，残高14cm，体部最大径約30.5cmである。頸部は約1.5cmの立ち上がりである。口唇部は平坦に仕上げている。

甕（14）　4層遺構面より折り重なるように出土した。このため，遺構の検出に努めたが土坑などはなかった。また甕内の土砂を水洗いしたが遺物はなかった。口縁部はないものの，残高35cm，体部最大径39.5cmあり，肩部から胴部にかけて濃緑色の自然釉がかかっている。外面は平行タタキの痕跡を残すが，全面にわたって回転ナデ調整を施し，内面は青海波タタキ痕跡を残している。

（参考文献）

1　白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二，三の問題」（『古代学研究　第54号』）1969

2　荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」（『福井考古学会会誌　第3号』）福井考古学会　1985

3　『平城京左京五条二坊十四坪発掘調査概要報告』（『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和54年度』）奈良市教育委員会　1980

4　『平城宮発掘調査報告XII』（『奈良国立文化財研究所学報　第42冊』）奈良国立文化財研究所　1985

5　宇野隆夫「井戸考」（『史林』第65巻第5号）史学研究会　1982

6　『平城京東堀河　左京九条三坊の発掘調査』　奈良国立文化財研究所編　1983

7　『正倉院の金工』　正倉院事務所編　1976

8　『雁鴨池発掘調査報告書』　大韓民国文化公報部文化財管理局　1978

第4節　前栽遺跡（第2次）泥炭層
放射性炭素年代測定結果報告

木　越　邦　彦*

1984年11月24日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ統計数値の標準偏差σに基づいて算出した年数で，標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは，3σに相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示してあります。また試料の，β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下のときには，Modern と表示し，δ^{14}C‰を附記してあります。

記

Code No.	試料	B.P.年代（1950年よりの年数）
GaK-12127.	Peat from Senzai Site. －3m.	18,530±590
	841026.	16,580 B.C.

*　学習院大学

第4章　ま　と　め

第1節　奈良県内出土の黒色土器

図33は，井戸跡2，3から出土した黒色土器のうち，実測が可能であった12点の出土位置を略図で示したものである。

井戸跡2の掘方上層の埋土からは，A類の椀2点，B類の椀2点，土師器椀1点，土師器杯1点が出土した。さらに，下層の井戸枠外板の埋土からは，A類の椀1点と，B類の小形椀1点が出土した。次いで，下層の上段楕円形曲物井戸枠内では，A類の椀4点と，土師器小皿1点，土師器高台付皿1点が出土した。下段円形曲物井戸枠内からは，B類の椀1点と，土師器小皿1点が出土した。井戸跡2に先行して掘られた井戸跡3は，下層からA類の椀1点が出土した。以上のように上層から下層を通じてA類とB類の混在が認められた。このことは当時，A類とB類の併用を物語っている。また，井戸跡2，3から出土した黒色土器は，細部の特徴に多少の差異はあるものの，器形をみると底部が狭く，体部が底部脇で角張り，外開きに延びる形態で，一応の統一性をもっている。年代決定は共伴した土師器小皿と，高台付皿によっても10世紀末から11世紀初頭に求められるが，この時期の黒色土器は，A類およびB類ともに前述の器形形態をもつと考えられる。

こうしたA類とB類の共伴と，器形形態を主眼において，奈良県下の8遺跡10遺構の資料を集めてみた。幸いにして8世紀末から11世紀末までの資料が揃い，器形変化を知ることができる。以下，時代別に遺跡と遺物を記述する。

8世紀末から9世紀初頭　前栽遺跡　井戸跡4（図34　1・2）

詳細は本文中30頁から33頁を参照。

9世紀前半　丹切古墳群34号墳（文献1）

後世の追葬，あるいは供養によって埋納されたものである。A類の椀4個（3～6），とB類の椀2個（7・8）のほか，東海系産の須恵器平瓶とが3組に重ねて置かれていた。A類4個体は，細部では異なっているが，手法はすべて同じである。炭素吸着は内面と外面の口縁部で，内面には横にヘラミガキがあり，底はタテのミガキがある。B類の（7）は鉢形であるが，内外面とも炭素

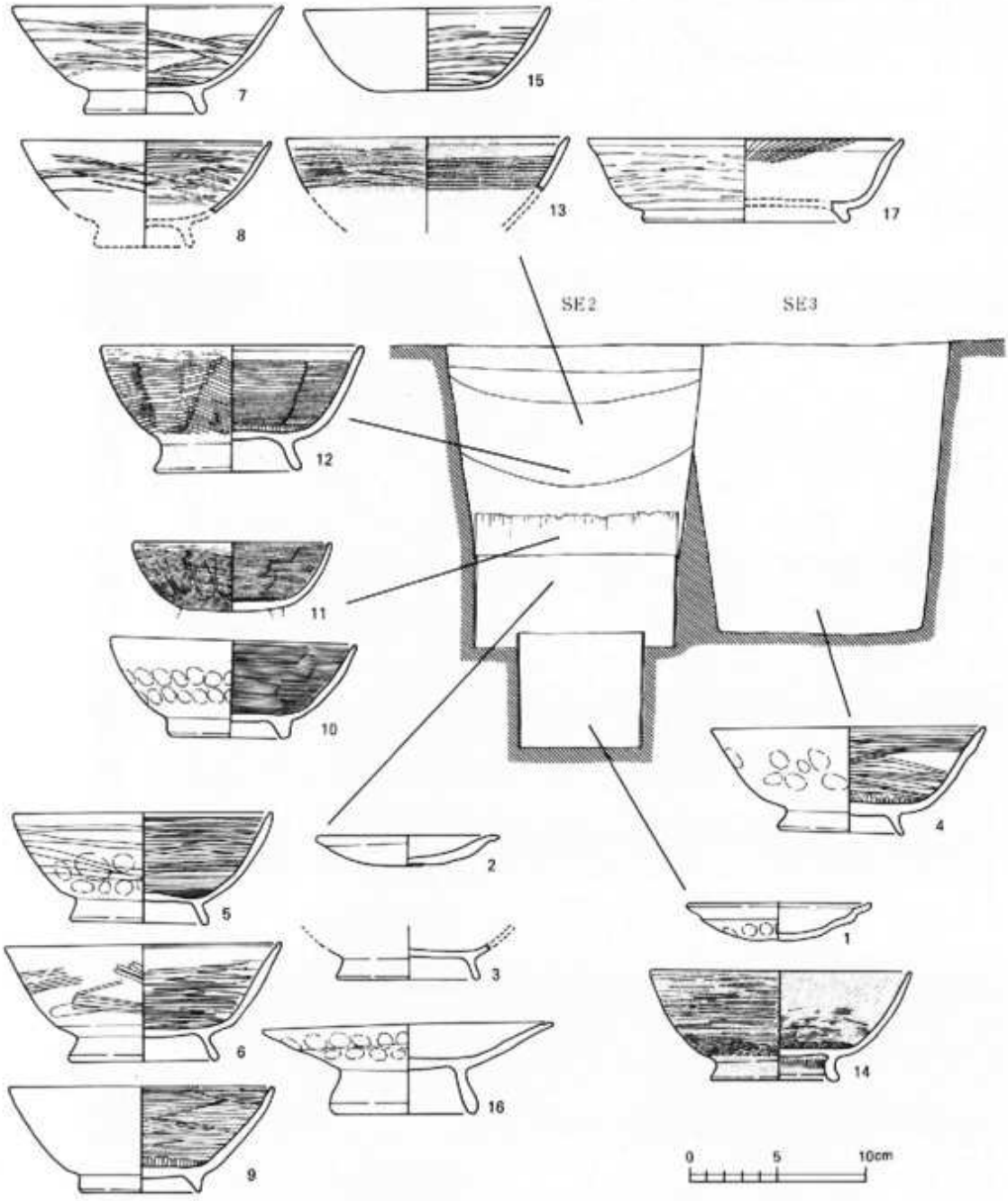


図33　前栽遺跡（第２次）井戸跡２，３黒色土器出土位置図

吸着をおこなっている。（８）も内外面とも炭素を吸着させ，ヘラミガキも丁寧である。内面はＡ類４個と同じ手法をもつ。口縁部には，ヘラで外側からおさえて，くぼみを作り，輪花状にしている。

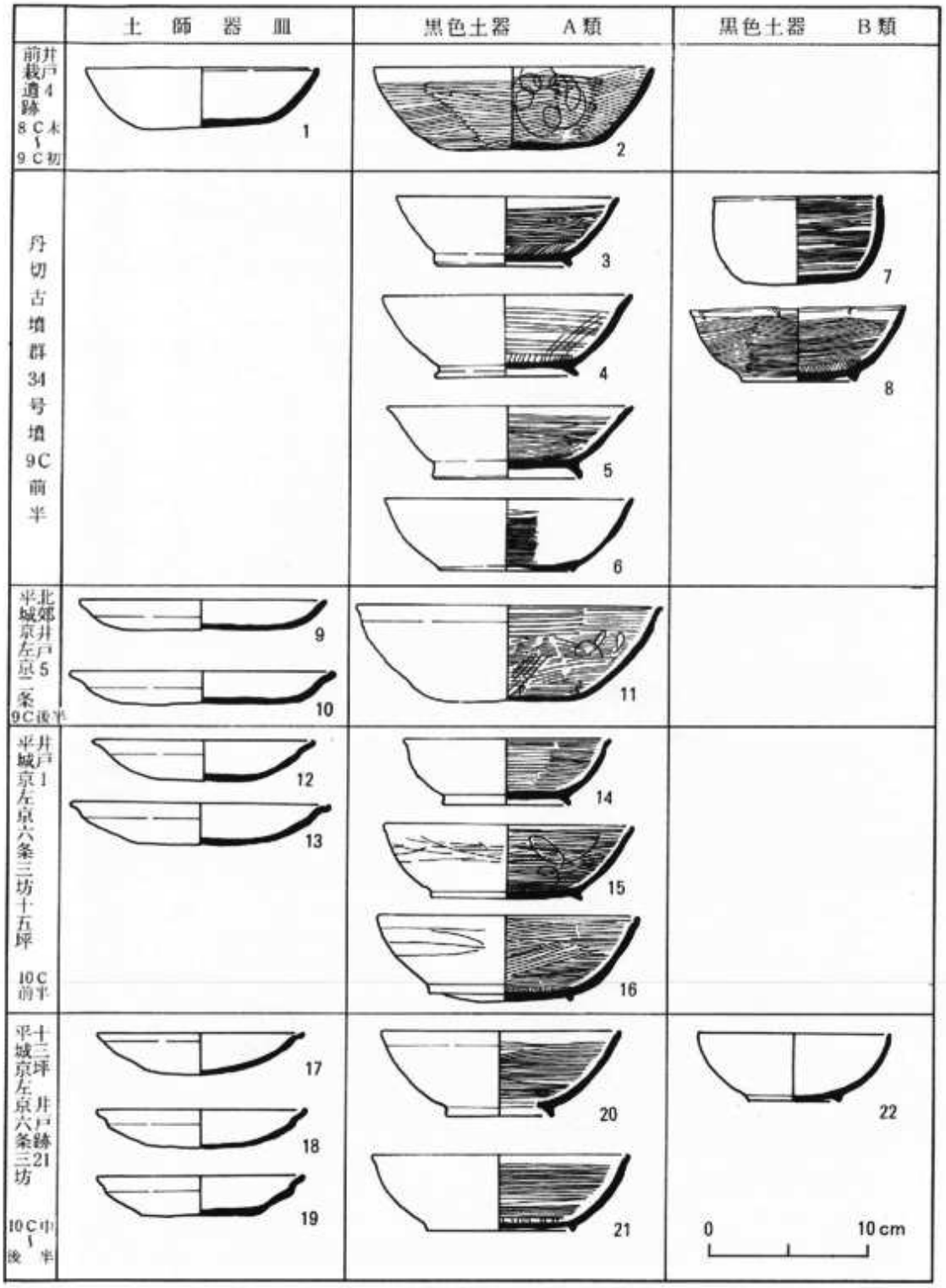
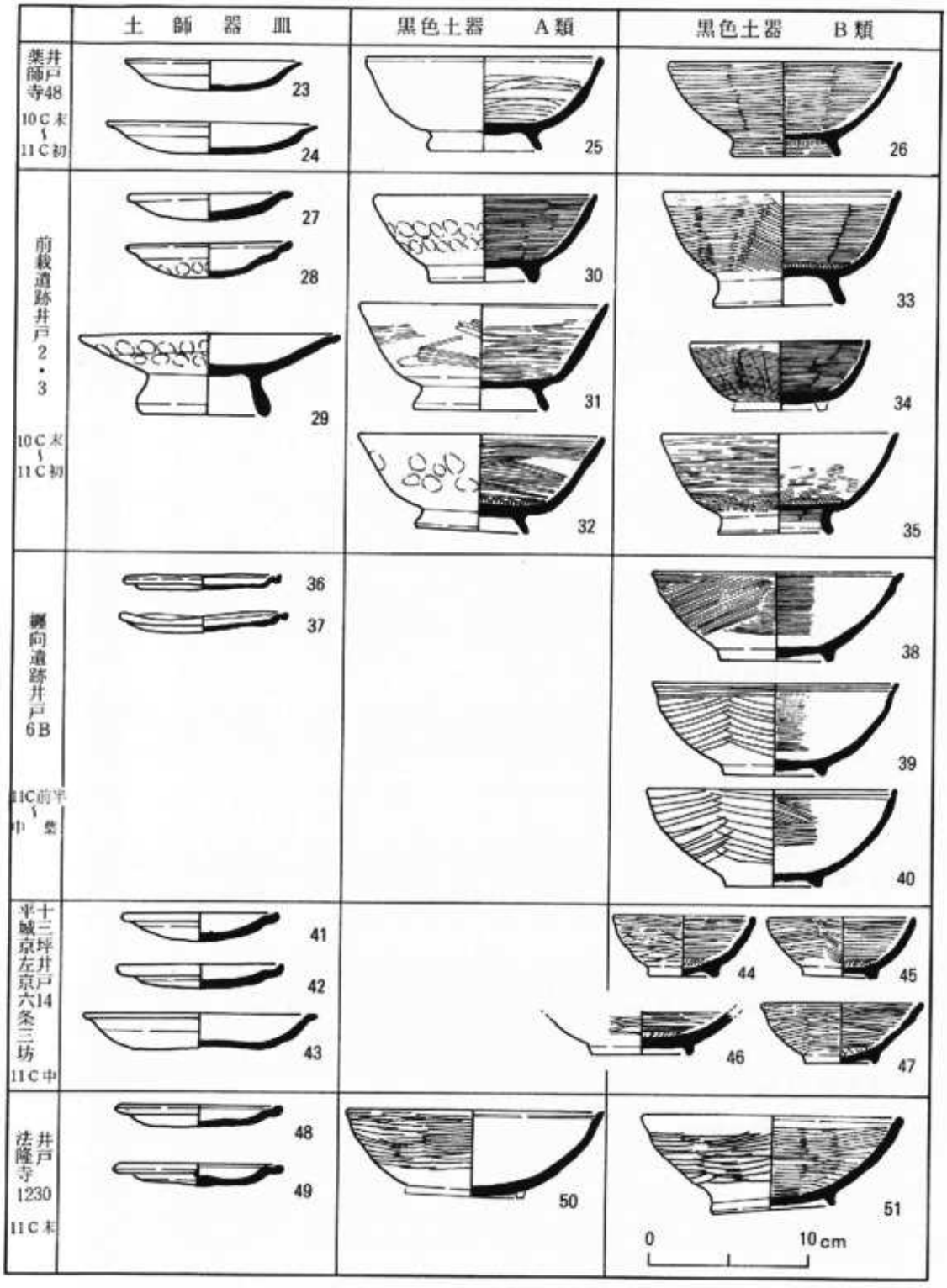


図34　奈良県内出土黒色土器の編年案


土師器皿
黒色土器 A類
黒色土器 B類
葉井戸
師寺48
10C末
11C初
23
24
25
26
前栽遺跡井戸2・3
10C末
11C初
27
28
29
30
31
32
33
34
35
櫛向遺跡井戸6B
11C前半
中葉
36
37
38
39
40
平城京左京六条三坊
十三坪井戸14
11C中
41
42
43
44
45
46
47
法隆寺
井戸
1230
11C末
48
49
50
51
0
10cm

9世紀後半　平城京左京二条北郊　井戸跡5
（文献2）

黒色土器A類の杯（11）である。内面に炭素を吸着させている。外面は口縁上部を除きヘラケズリを施し，内面は底部に平行のヘラミガキ，口縁部に横方向のヘラミガキを行い，その後，口縁内面の3か所に渦状暗文，底部内面に螺旋状暗文を配している。このほか，土師器皿（9・10），小形の須恵器壺が出土している。

10世紀前半　平城京左京六条三坊十五坪　井戸跡1
（文献3）

黒色土器A類の椀3個（14～16）が出土している。内面に炭素を吸着させるもので，いずれも高台をもち，口縁端部内面に沈線を一条めぐらす。内面は底部に並行のヘラミガキをおこなう。（15）の口縁部内面には3か所に渦状暗文を配している。外面はヘラケズリの後，簡単にヘラミガキをし，（14・16）には底部外面にもヘラミガキをおこなっている。このほかに土師器皿（12・13），灰釉陶器皿が出土している。

10世紀中頃から後半　平城京左京六条三坊十三坪　土坑21
（文献4）

黒色土器A類の椀（20・21）と，B類の椀（22）が出土している。（20）は，半球状の体部に外方へ張る高い高台をもち，（21）は平底を呈し，断面三角形の低い高台を貼り付けている。ともに内面を密にヘラミガキし，底部に平行ジグザグ状のミガキを施す。（22）は，薄手の器壁をもつ。このほか，土師器皿（17～19），黒色土器A類の壺，土師器甕，灰釉・緑釉陶器が出土している。

10世紀末から11世紀初頭　薬師寺　井戸跡48
（文献5）

金堂跡の調査の際，検出されたSE48から西僧房出土の土器群より一型式新しい黒色土器A類（25），B類（26），土師器皿（23・24）が出土している。

前栽遺跡井戸跡2，3

詳細は本文中19頁から24頁を参照。

11世紀前半から中葉　纒向遺跡　井戸跡6B
（文献6）

黒色土器が5個体あり，いずれも全面をいぶす。（39）と（40）は，ヘラミガキが太く，見込みには菊花状の暗文を施す。外面ヘラミガキもほぼ全面にあり，3分割されている。（38）は，見込みに平行線状の暗文を施す。外面ヘラミガキは3分割されている。このほか，土師器皿（36・37），瓦器が出土している。

11世紀中頃　平城京左京六条三坊十二坪　井戸跡14
（文献7）

黒色土器B類の椀（44～47）が出土している。（47）を除き小椀で，器径9.0～10.3cm，器高3.8cmを測る。口縁内面に一条の沈線を施すもの（44・47）がある。内・外面ともヘラミガキは密で，内面底部のミガキを施すもの（39）と，平行ジグザグ状に施すもの（45・47）がある。このほか，土師器皿（41～43）が出土している。

11世紀末　法隆寺　井戸跡1230
（文献8）

黒色土器A類とB類があり，各1点出土している。A類の椀（50）は，口径16.1cm，復元高5.5

cmで，口縁内面端部直下に浅い沈線をめぐらす。外面をヘラケズりしたのち，内外両面にヘラミガキを施す。B類の椀（51）は，口径16.4cm，器高6.2cmで口縁外面に4回に分けて横方向のヘラミガキを施す。底部外面・高台部には，ミガキを施さない。このほか，土師器皿（48・49），土師器椀，鍔釜，瓦器，灰釉陶器が出土している。

以上，奈良県内における黒色土器を，時代別に出土地及び土器観察を記述した。黒色土器は，調整方法や，細部の形態がバリエーションに富んでいるため，調整変化や細部形態では型式分類が困難である。しかし，各時代を通じて器形変化がみられ，これは黒色土器の窯業生産の変化に影響されていることがわかる。（文献9）以下，黒色土器出現から消滅までを大きくⅠからⅣ期に分け，それぞれ記述する。

Ⅰ期　黒色土器A類が出現する8世紀初頭から9世紀初頭までとする。8世紀代の黒色土器は，同時期の土師器と同じ器形に黒色処理しているもので，黒色土器特有の形態はなく，土師器工人による生産だと考えられている。（文献10）事実，器形は土師器と酷似し，底部面積が広く，外開きの体部をもつ。口径が広く，器高は低い。この器形に内面黒色処理を施している。B類は出現していない。

Ⅱ期　9世紀前半から10世紀前半までとする。9世紀になると黒色土器の器種も増し，供膳・煮沸・貯蔵器の什器セットを構成するようになる。B類が出現し黒色土器工人による生産となる。（文献11）器形は，高台付の椀が増加するが，奈良時代の杯の器形形態を残した底部面積の広い，体部が外開きの形態を呈している。体部内面には輪結状暗文を施している。前栽遺跡井戸跡4出土の黒色土器A類の杯は，この特徴を強くもっている。また，高台付の椀は，高台が簡略的で小形の逆三角形を呈している。あたかも杯に高台を貼り付けたかのようである。この特徴は10世紀前半まで残る。

Ⅲ期　10世紀中頃から11世紀初頭までとする。杯・皿・鉢・甕等の器種が完全に消滅し，椀・皿が主流となりB類も量的に増加を見せ，器種は椀・皿に限定される。器形は，体部が中央で丸味を帯び，器高も高くなる。（文献12）10世紀末から11世紀初頭は黒色土器椀の降盛期とも言える完成度の高いものとなる。前栽遺跡井戸跡2，3や，薬師寺井戸跡48の出土遺物が代表的な資料である。器形は底部面積が狭く，体部は底部脇で角く張り出し，外開きに延びる。高台も大振りでしっかりした形態をもつ。器高は高く，口縁径が狭い。

Ⅳ期　11世紀前半から11世紀末までとする。黒色土器の製作技術を踏襲した瓦器が出現し，黒色土器と共伴する。底部面積が狭く，体部はゆるやかに外開きになる。器高が低く口縁径が広い。高台は幅広いが，退化形態を呈する。

以上，大まかではあるが，黒色土器の形態分類を試みてみた。黒色土器A類は8世紀初頭に出現し，B類は9世紀前半に出現して11世紀後半まで共伴して存続する。この約四世紀間に，黒色土器の窯業変化とともに，器種，器形も変化をみせることが判明した。土師器の器形に黒色処理を施す第Ⅰ期を経て，供膳・煮沸・貯蔵器の什器セットを構成し，B類の出現を見せる第Ⅱ期を経る。器種は椀・皿に限定されるが，技術的に降盛期を迎える第Ⅲ期を経て，器形形態や調整法も徐徐に退

化し，瓦器の出現をみせる第Ⅳ期となる。こうした形態変化を今後の発掘資料の増加を待って，細部の特徴および調整法と兼ね合わして再度検討したい。

（参考文献）

1　『宇陀・月切古墳群』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第30冊　奈良県教育委員会　1975

2　『奈良市埋蔵文化財調査報告書』　奈良市教育委員会　1983

3　同　　上

4　同　　上

5　報告書未刊行のため，図は川越俊一氏の「大和地方の瓦器をめぐる二，三の問題」から転用した。

6　『纒向』　桜井市教育委員会　1976

7　注２と同文献

8　『法隆寺発掘調査概報Ⅰ』　法隆寺　1982

9・10・11・12　巽　淳一郎「古代窯業生産の展開―西日本を中心にして―」（『文化財論叢　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』）　奈良国立文化財研究所　1983

第２節　木製匙について（図35）

井戸跡４より出土した木製匙は，木理を巧みに生かして製作されたもので，これまでに出土している木製品とは大いに趣を異にしている。日本在来の食事具の中では，匙形は主流とならなかったようで，考古遺物としての類例に乏しい。

比較検討の資料としては，むしろ正倉院に所蔵されている金属製匙や韓国慶州市雁鴨池出土の青銅匙（文献１）などと比較して，系譜関係を推定することが必要であろう。（文献２）

まず，井戸跡４の匙の要点だけを示すと，匙面長8.5cm，幅3.9cm，柄長22cmである。匙面は楕円の木葉形を呈し，柄部は頭部で少し広がる。また，柄部中央部を山形に稜線をつくり，先端は八字形を呈している。側面観は，匙面と柄部が135°の角度をつけて，柄部が直線的にのび上がっている。

正倉院南倉に所蔵されている金銀匙（南倉43）と，佐波理匙（南倉44）についてみる。金銀匙は，銀造鍍金で，匙面が木葉形をしている。総長29.7cm，匙面長7.8cm，柄長22.2cmあり，匙面には金敷の上で細かく鎚打した跡があることを報告している。佐波理匙は，匙面長8.2cm，幅4.95cm，柄長16.5cm，幅1.9cmである。その特徴は「匙面は木葉形で，上面中央に葉脈を線刻している。柄は幅がやや広く，柄と匙面の角度は

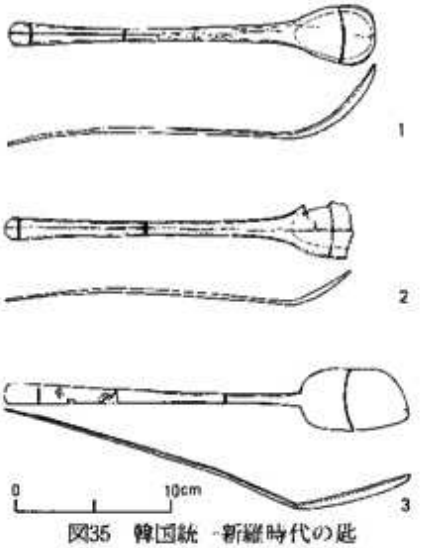


図35　韓国統一新羅時代の匙
1.平山山城里　2.扶余扶蘇山　3.陰城美谷里

120度もあり急である。柄先から匙面に向かって葉脈のように2本の線を刻し，柄の両側にも一線をくまどりのように刻す」とあり，明らかに木葉形を模倣したようなつくりである。正倉院所蔵の匙は，同所蔵の「買新羅物解」の中に，白銅匙という品目が上がっていて，新羅製品であることが指摘されている。（文献3）

次に朝鮮半島出土の匙製品は，どのようなものがあるかみてみたい。韓国出土の匙は李蘭暎氏の「韓国匙箸の型式分類」という優れた論文があり，三国時代から，統一新羅時代，高麗時代，朝鮮時代と4期に区分して，匙の型式分類を試みられた。（文献4）ただ，資料的な制約から三国時代の出土遺物は乏しく，統一新羅時代になって金属製の匙の隆盛をみるようである。

三国時代の匙は，4例報告されている。最も古いものは初期金属文化期の匙で，これ以降では6世紀初頭の慶州金冠塚出土の小形匙がある。いずれも匙面は，円形を呈している。また，感恩寺跡西塔より出土した匙は，竹の節がついたような柄で，中間部と上面に葉脈模様の装飾が施されている。

統一新羅時代の匙は，6例報告されている。この時期になると匙面が楕円形を呈するものが確実に現われる。黄海道平山郡平山面山城里出土の楕円形匙は，全長26cm，匙面長7.1cm，忠清南道扶余郡扶余扶蘇山出土の楕円形匙は3点あり，長さは24.5cm，柄長は18～19cm，匙面長は7.5cm，幅3.5cm程度である。

慶尚北道永州郡北安面龍渓里からは楕円形匙が2点出土している。長さは24.2cmである。これらの匙面は木葉形を呈して，柄部の縁辺に一条，中央部には二条の線刻が施されている。先端部は，八字形のいわゆる扇形をしている。側面観は，匙面と柄部とは130°程度の角度をもち，直線気味である。統一新羅末期に比定された忠清北道陰城郡大所面美谷里出土の匙は，これまでの資料と比較して柄部の取付け部が細くなり，先端部は四角形を呈している。また線刻も省略されるが，側面観は匙面との取り付け角度が急で柄部も直線に延びている。

高麗時代の匙は，匙の柄先端部が，いわゆる燕尾形と称される先端が2分割され，装飾が加わる。側面観は，柄部も屈曲するようになり，全体にS字形のような曲線を呈する。一方，柄先端が燕尾形をとらず，角頭形のままで推移する型式（長陵型式）のあるものが存在することも指摘された。

長陵型式のものは，仁宗長陵出土銀製匙，長さ32.5cm，匙面長8cm，幅3.7cm，京畿道坡州郡州内面出土銀製匙，長さ31cm，匙面長8cm，幅3.8cmなどがあり，これらの側面観はS字状の弧線を描くように，洗練されたつくりである。

高麗型式の匙は，京畿道華城郡東灘面釐里出土の青銅製匙，長さ22cm，匙面長7cm，幅3.2cmは，柄部の先端が魚尾形に2分割されており，燕尾形の初期的なものと考えられる。伴出遺物として墓誌が出土し，大定12年（1172年）の紀年銘をもっている。これ以降，高麗末期の12世紀中頃（1454年）の温寧君墓出土の燕尾形を最後に衰退する。朝鮮型式の匙については省略する。

以上のように韓国出土の匙は，柄先端部，柄の幅や側面観に著しい変化のあることが上記の論文

より明らかである。その上，李蘭暎氏の指摘によれば，正倉院所蔵の匙は，統一新羅時代のものに各部位が類似していることを示されたのである。また，井戸跡4出土の木製匙については，忠清南道扶余郡扶余扶蘇山出土匙，あるいは，忠清北道陰城郡大所面美谷里出土匙などに類似している。ただ，後者の場合は柄先端部が角頭形であること，中央より匙面にかけて柄が細くなることなどに違いがあり，やや新しい要素かと思われる。そして，当遺跡出土の木製匙は，8世紀の新羅より舶載された金属製匙を忠実に模倣した可能性が指摘できよう。

（参考文献）

1　『正倉院の金工』　正倉院事務所編　日本経済新聞社　1976

2　『雁鴨池発掘調査報告書』　大韓民国文化公報部文化財管理局　1978

3　東野治之　「鳥毛立女屏風下貼文書の研究　一買新羅物解の基礎的考察一」（『史林』第57巻6号）　1974
　　西谷　正　「正倉院の新羅文物」（『地域史と歴史教育』）本村博一先生退官記念会　1985

4　李蘭暎　「韓国匙箸の型式分類」（『歴史学報』第67輯）　1975

図版1　前栽遺跡（第2次）　花粉

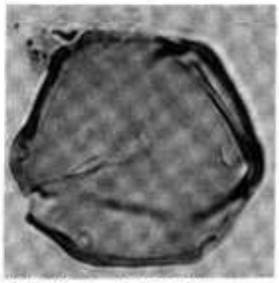
1. *Cryptomeria*

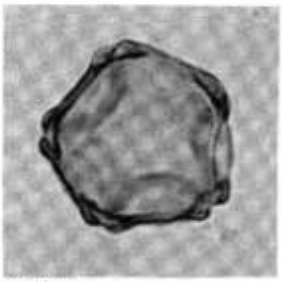
2. *Betula*

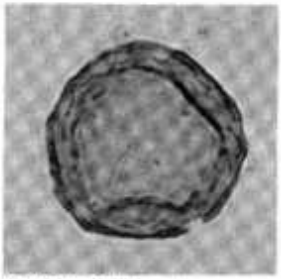
3. *Lepidobalanus*

4. *Cyclobalanopsis*

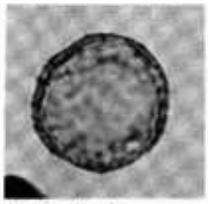
5. *Celtis*－*Aphananthe*


6. *Juglans*－*Pterocarya*

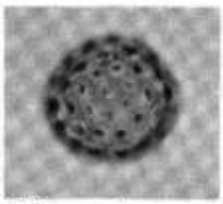

7. *Alnus*


8. *Ulmus*－*Zelkova*

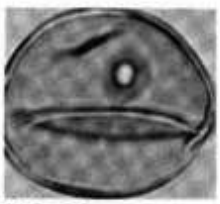
9. *Fagopyrum*


10. *Sagittaria*

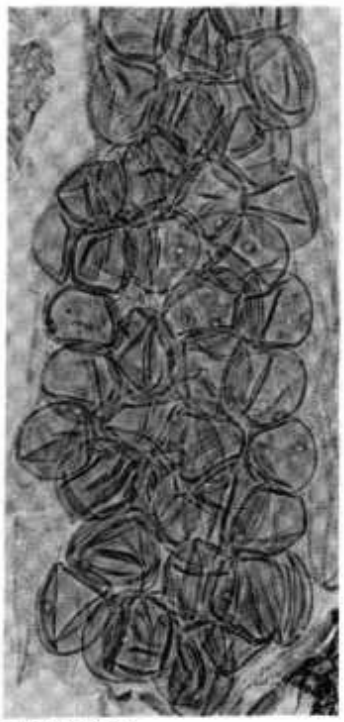
11. Caryophyllaceae

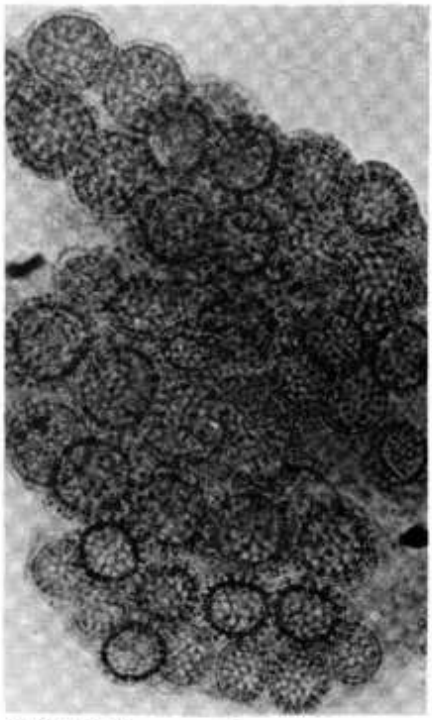

12. Chenopodiaceae

13. *Artemisia*


14. Gramineae

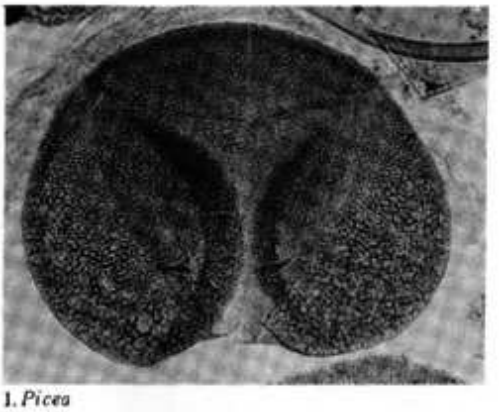
15. *Haploxylon*


16. Gramineae


17. *Persicaria*

花　粉

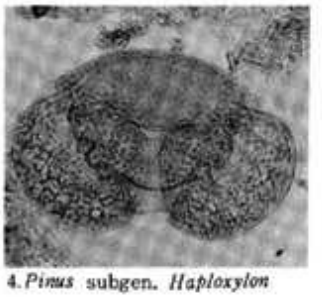
（1～14）×1000，（15～17）×500



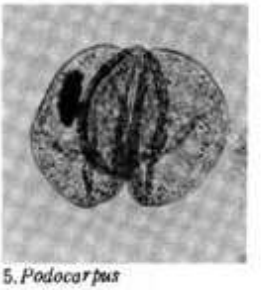
1. *Picea*

2. *Abies*

3. *Tsuga*



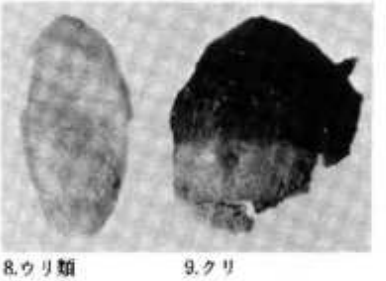
4. *Pinus* subgen. *Haploxylon*



5. *Podocarpus*

6. *Lagenaria*

7. *Lagenaria*



8. ウリ類　　9. クリ

10. ノブドウ属

11. イヌザンショウ属

12. ゴキヅル片

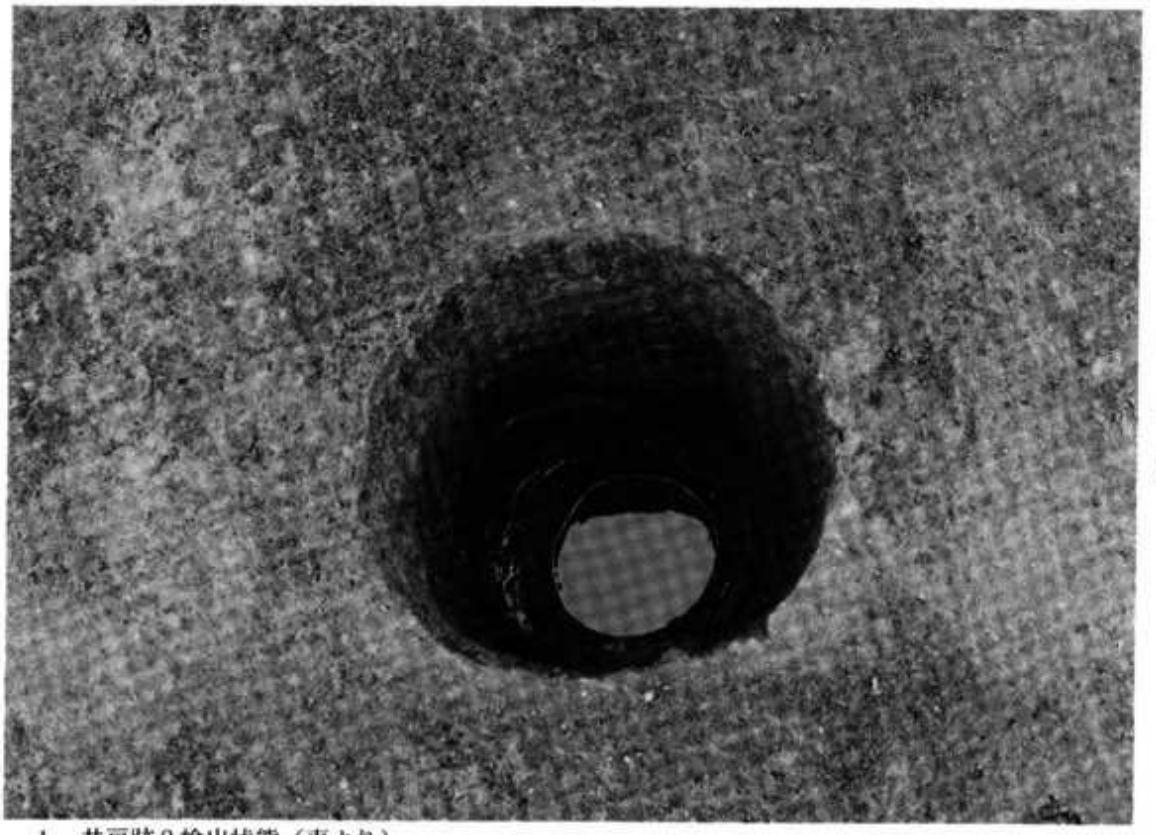
花粉・種子

（1～7）×600，（8～12）×14

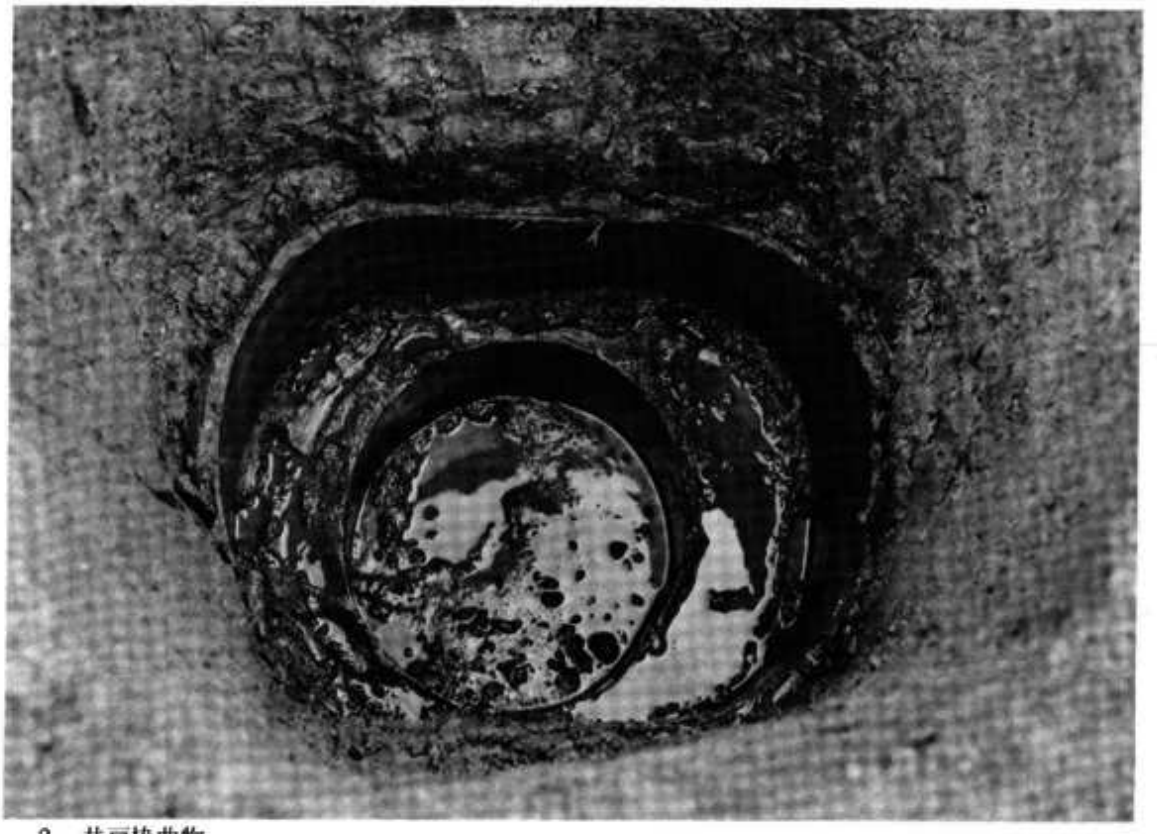
図版2　前栽遺跡（第2次）　上層遺構　井戸跡1

1.　上層遺構（北より）

2.　井戸跡1



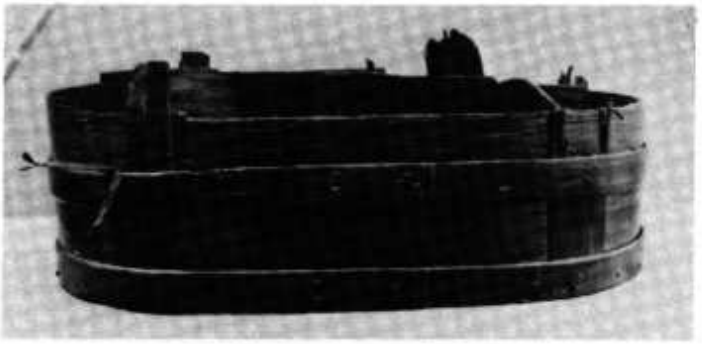
1.　井戸跡2検出状態（東より）

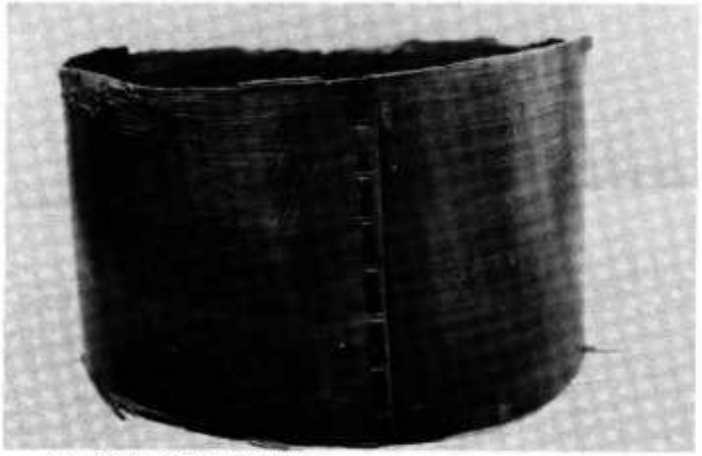


2.　井戸枠曲物

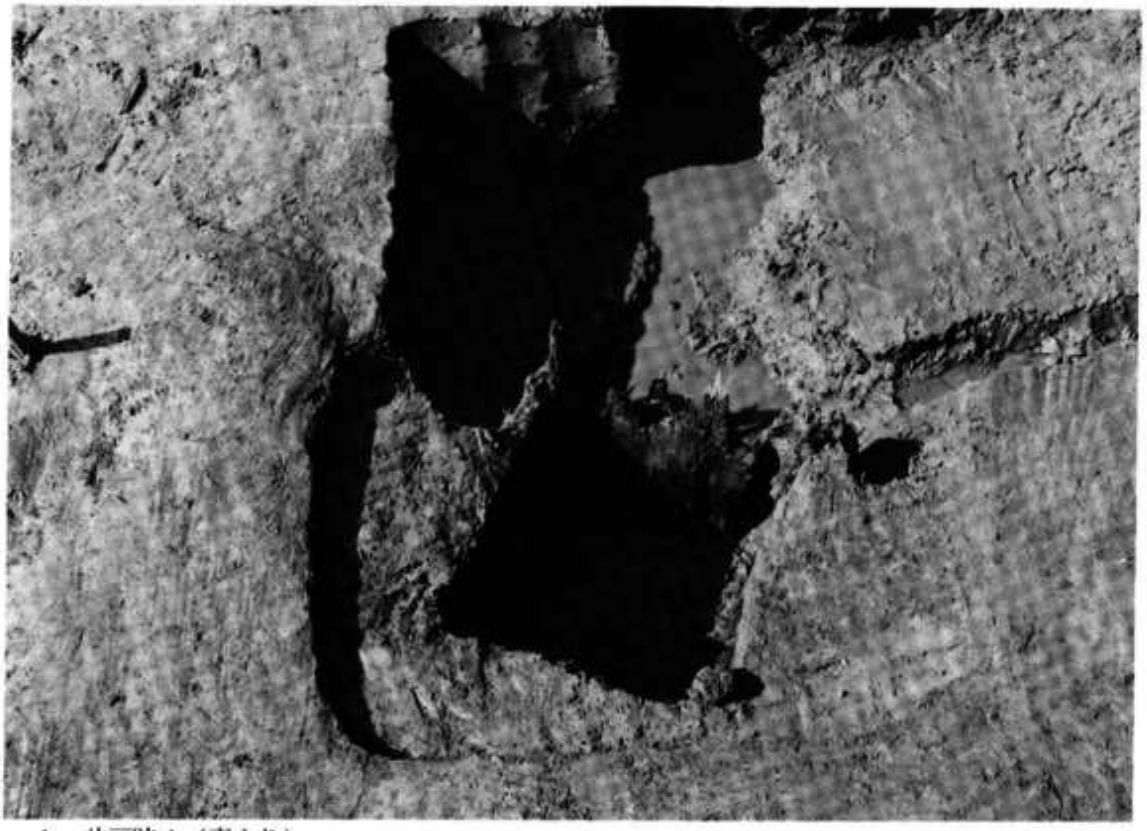
図版4　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2　曲物

1.　遺物出土状態

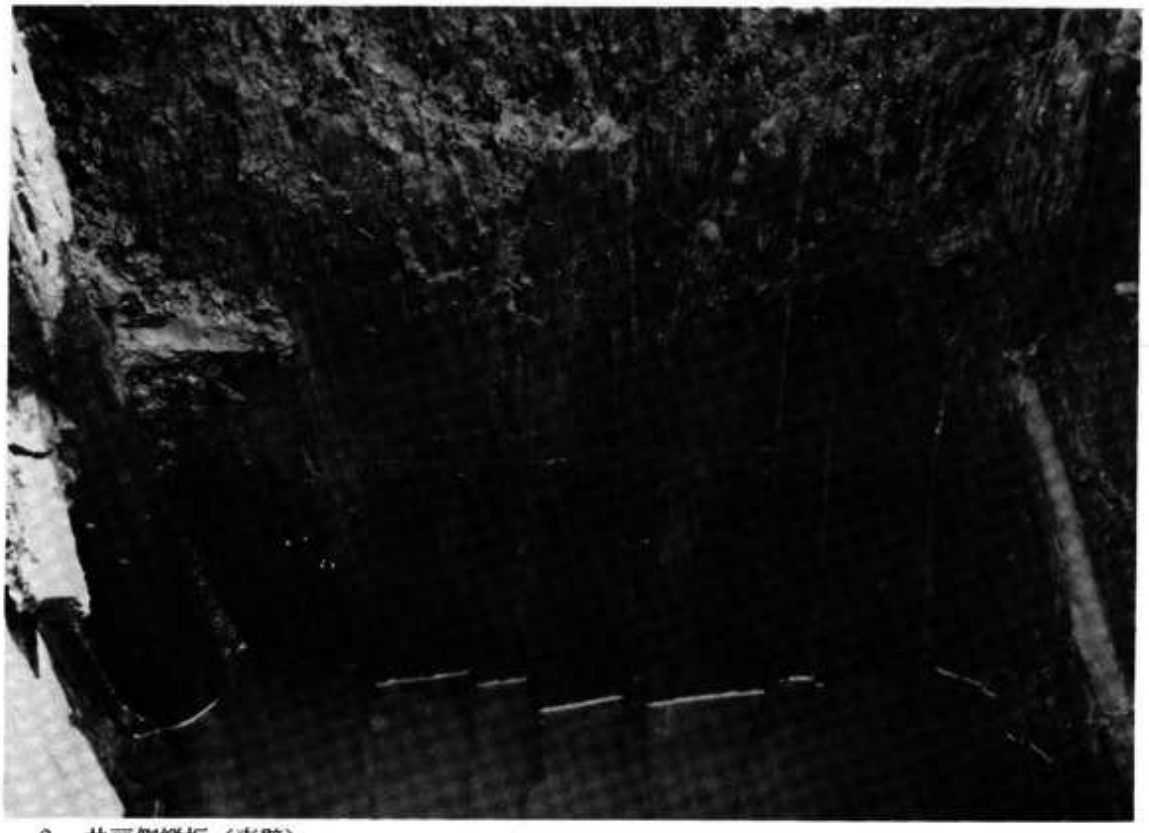




2.　曲物（縮少率不同）

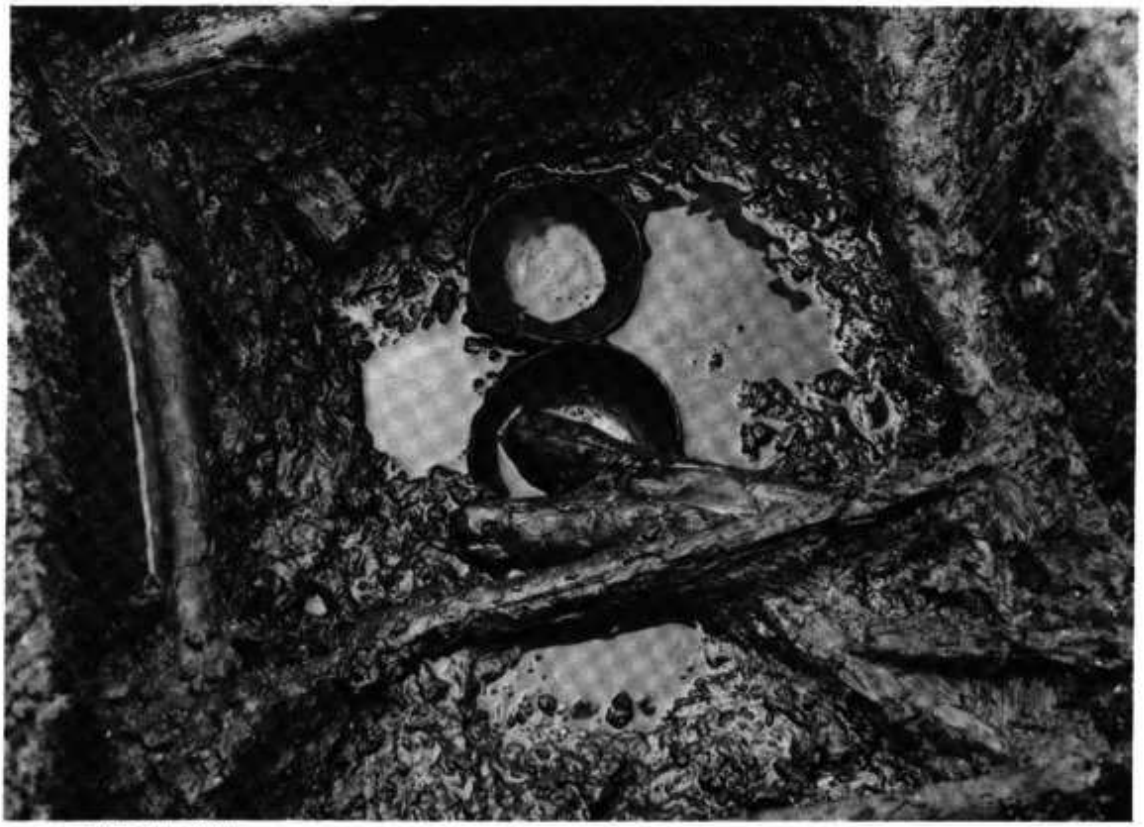


1.　井戸跡4（東より）

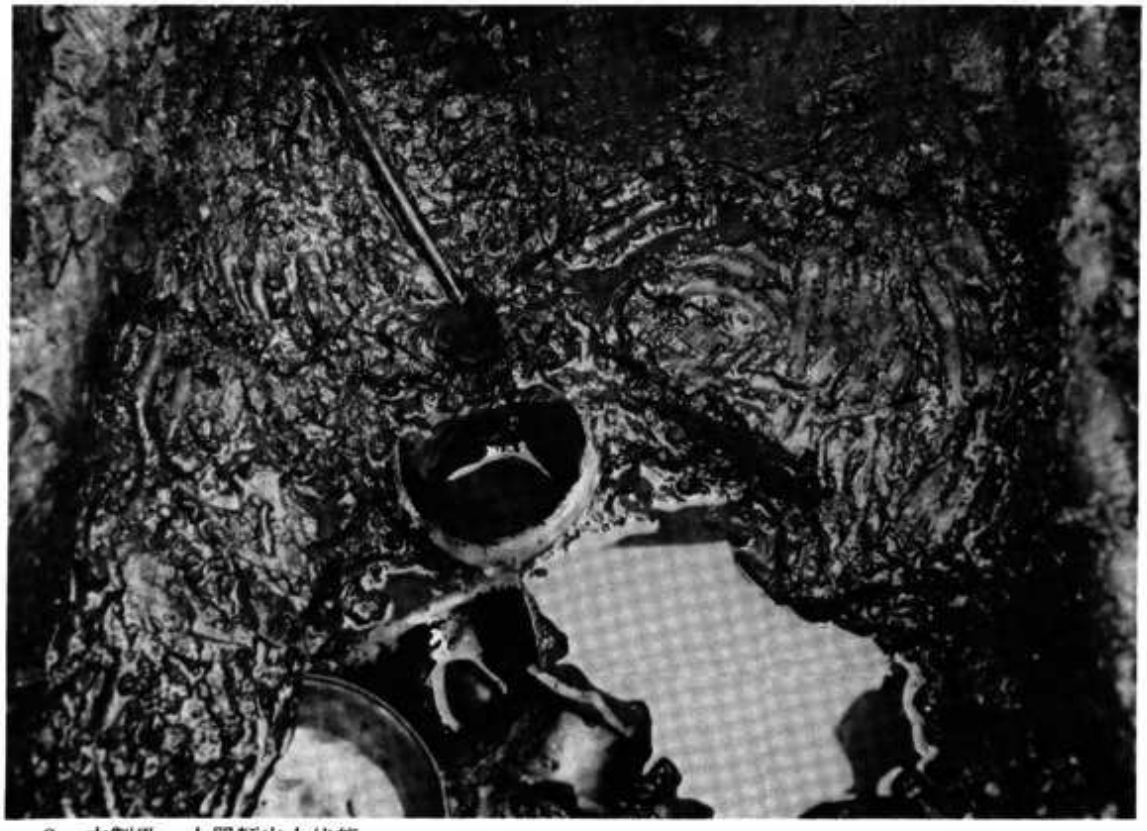


2.　井戸側縦板（東壁）

図版6　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4

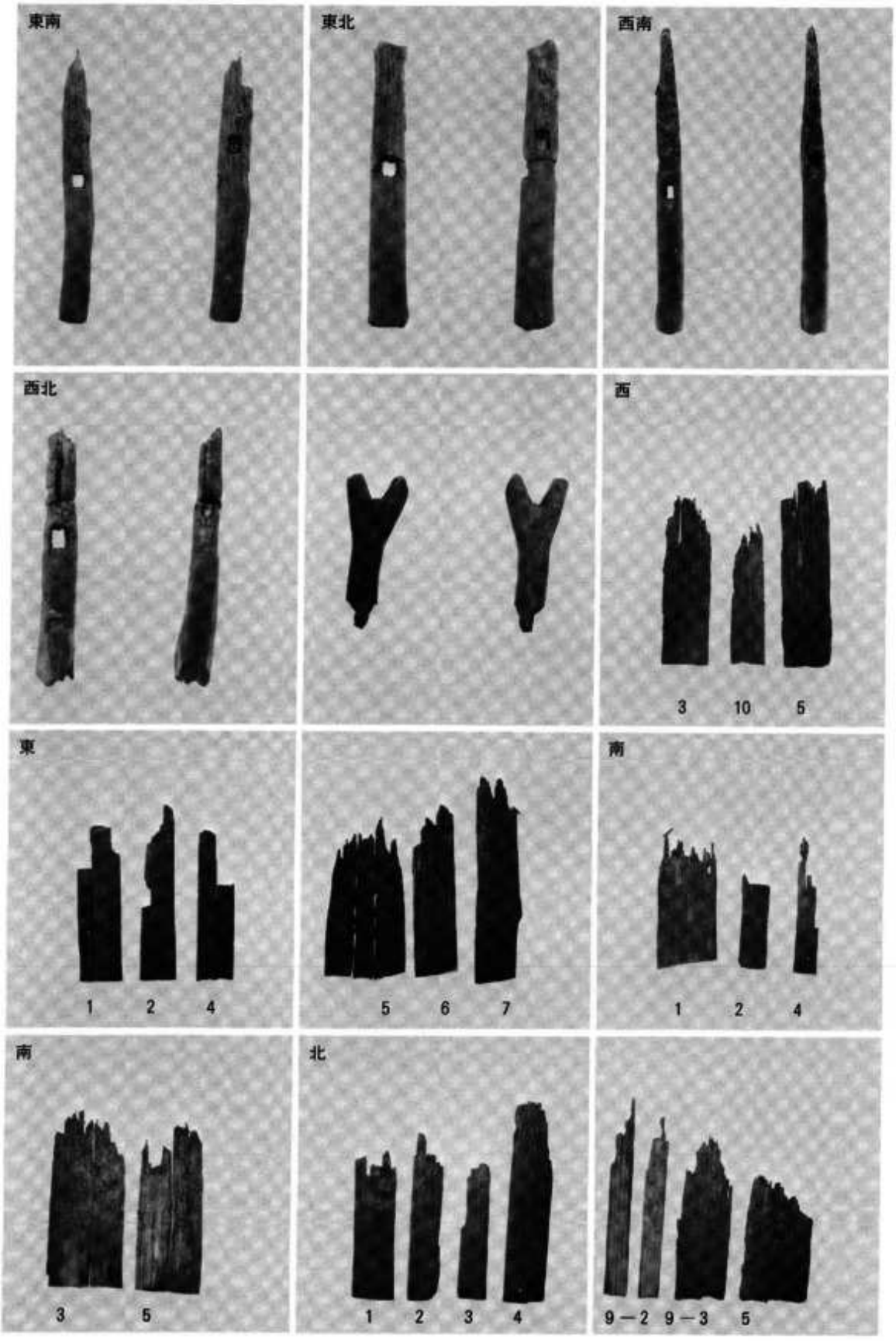


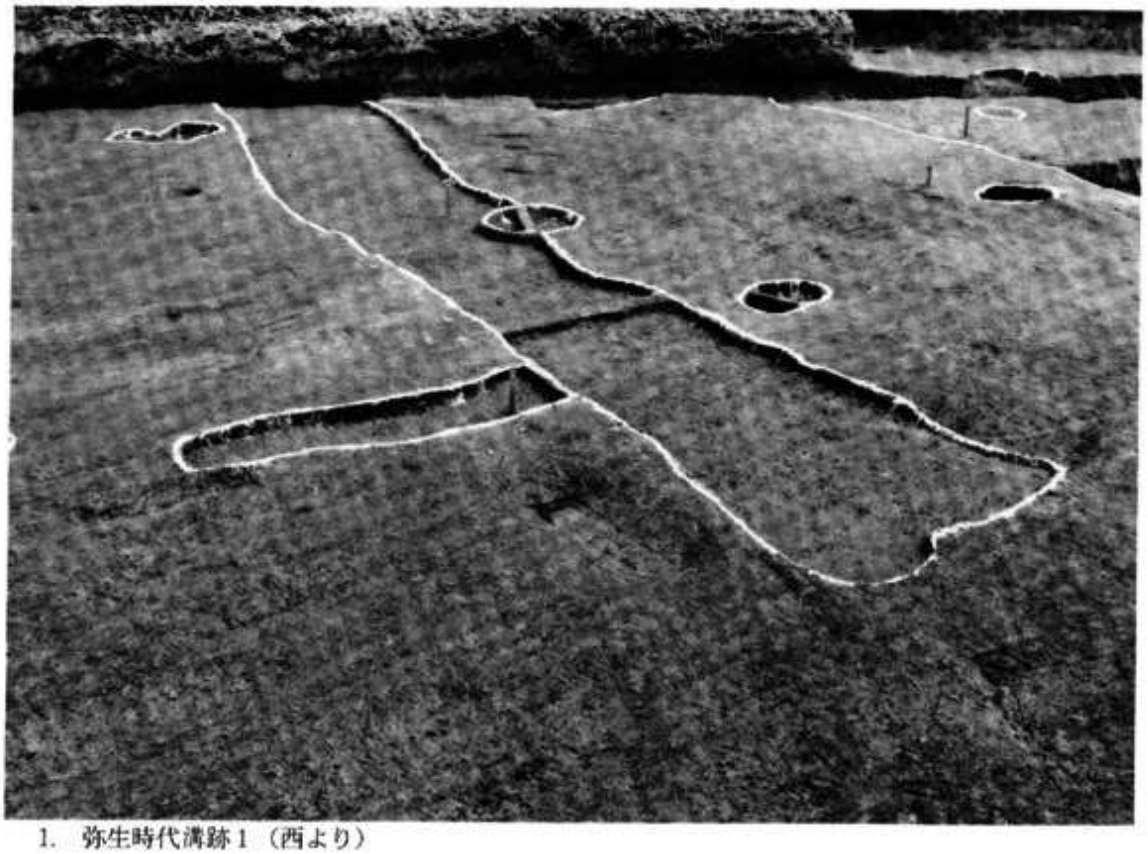
1.　遺物出土状態



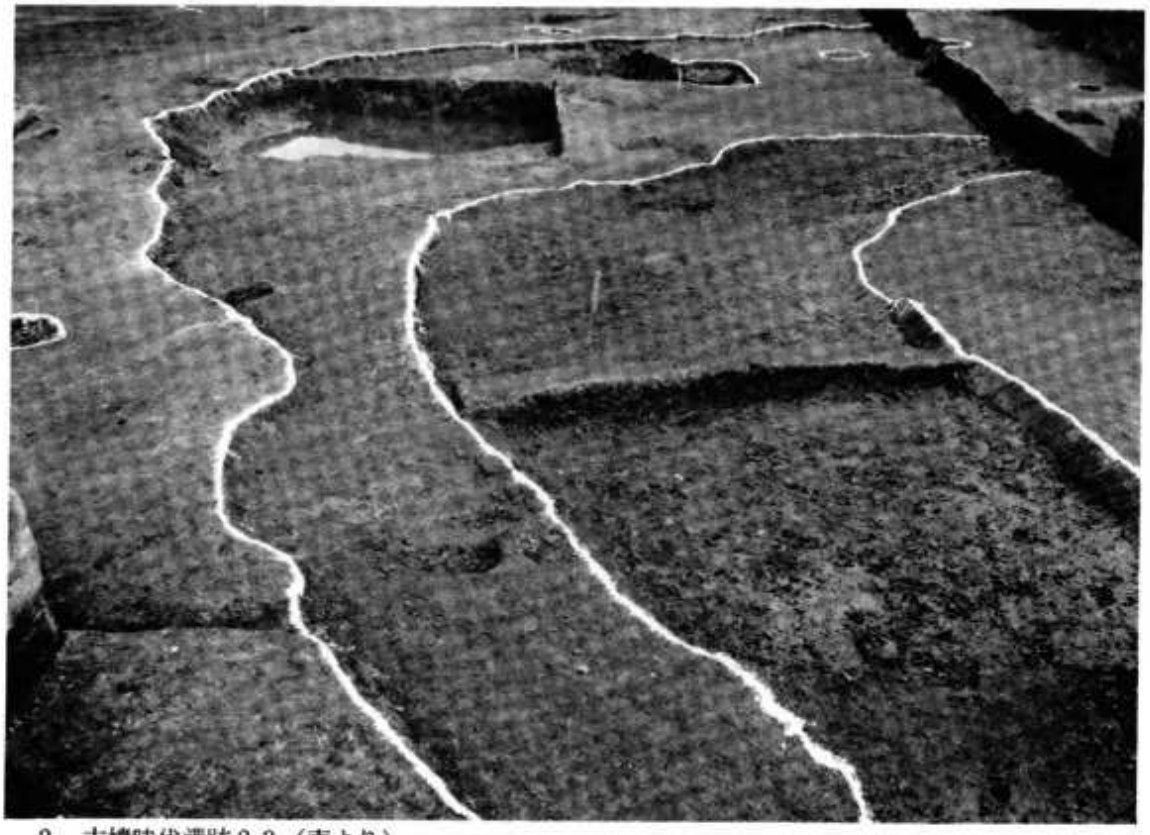
2.　木製匙，土器類出土状態

図版7　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4　隅柱・側板



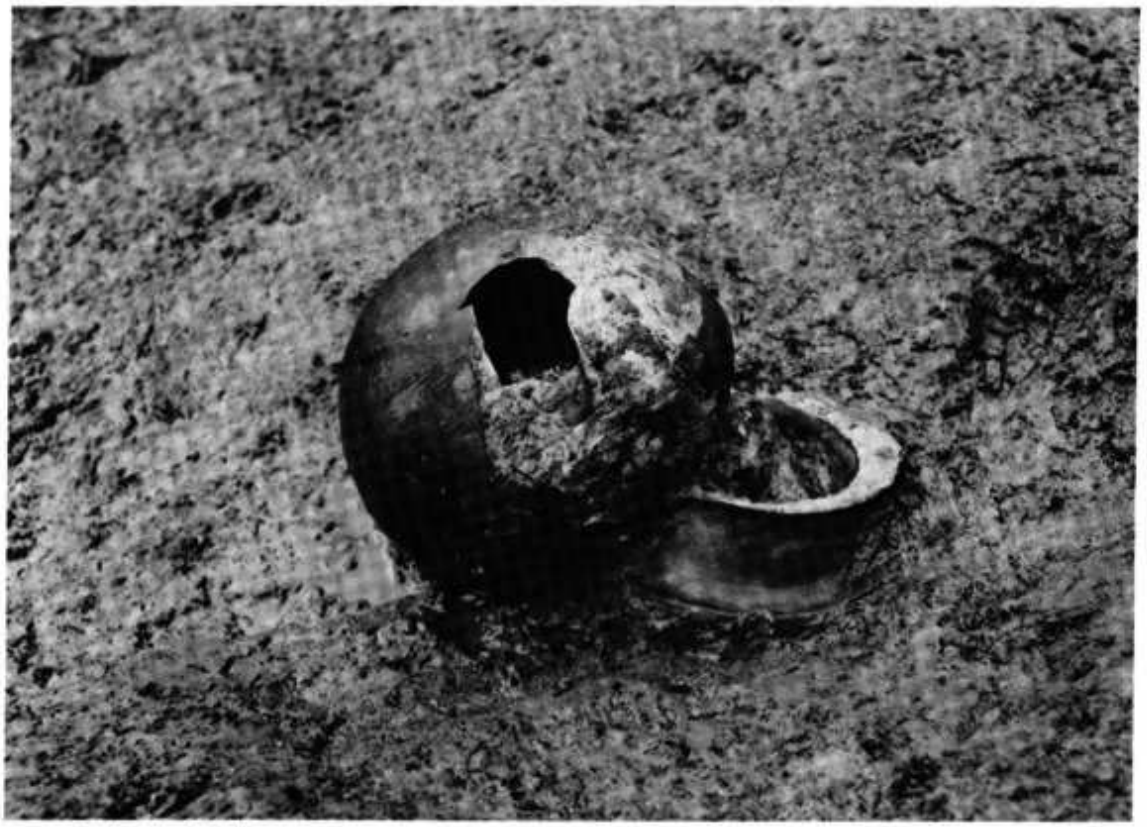


1.　弥生時代溝跡1（西より）

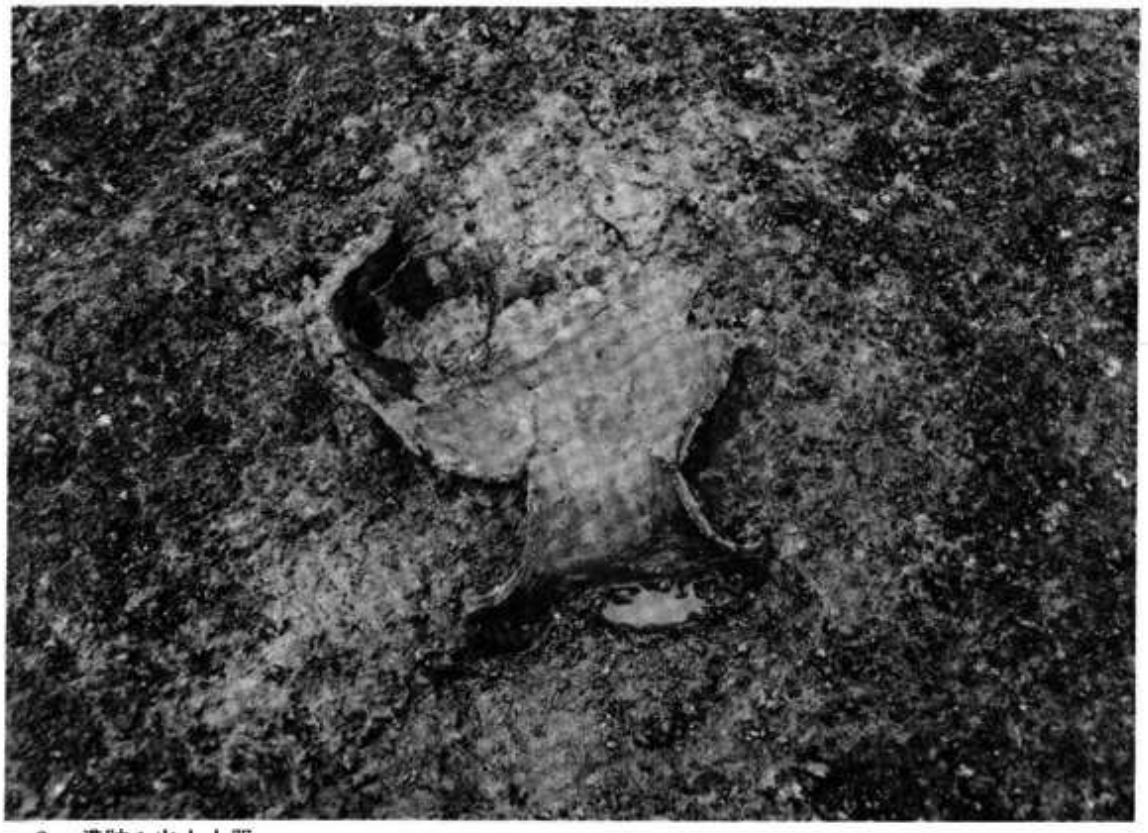


2.　古墳時代溝跡2.3（南より）

図版9　前栽遺跡（第2次）　溝跡出土土器

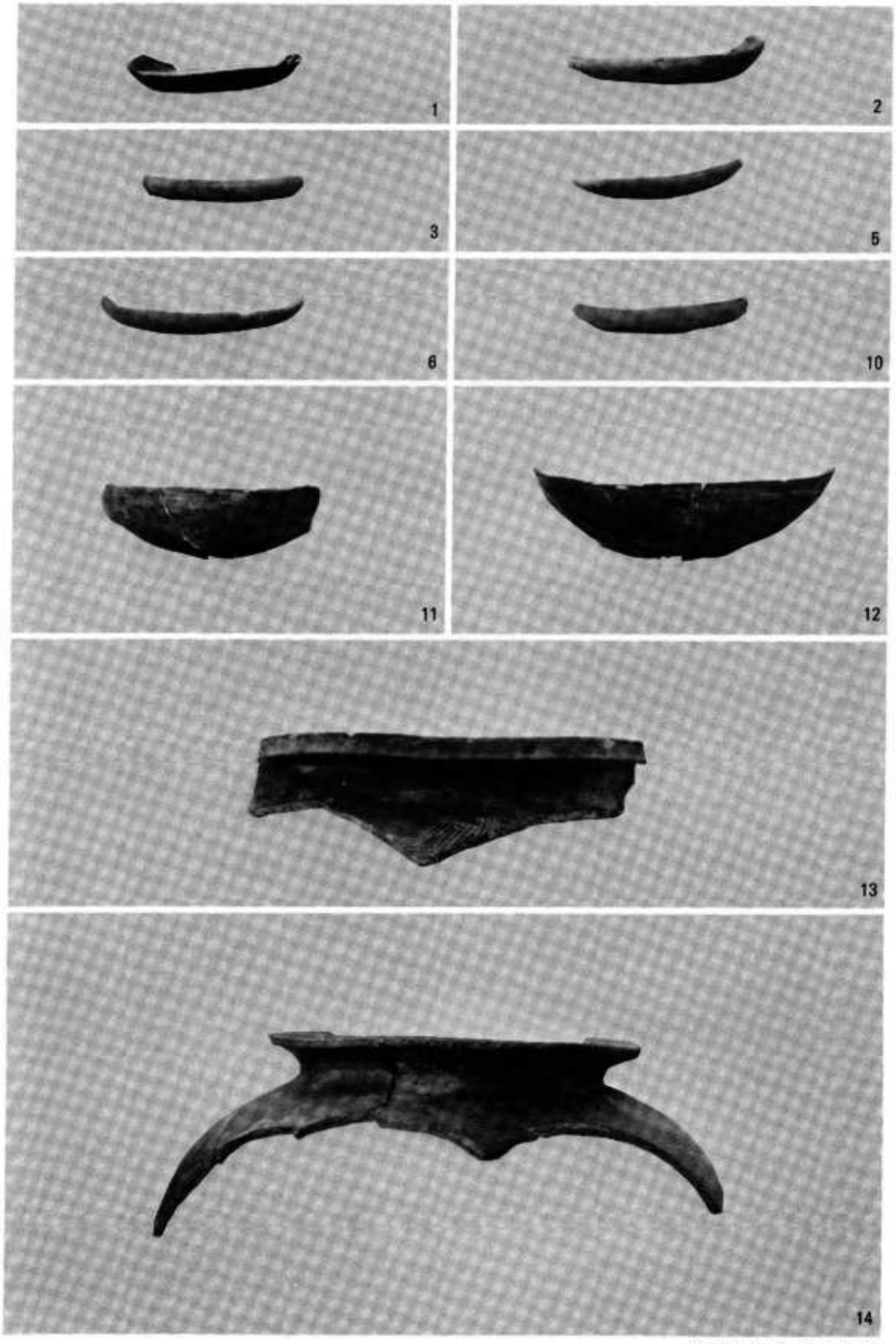


1.　溝跡3出土土器

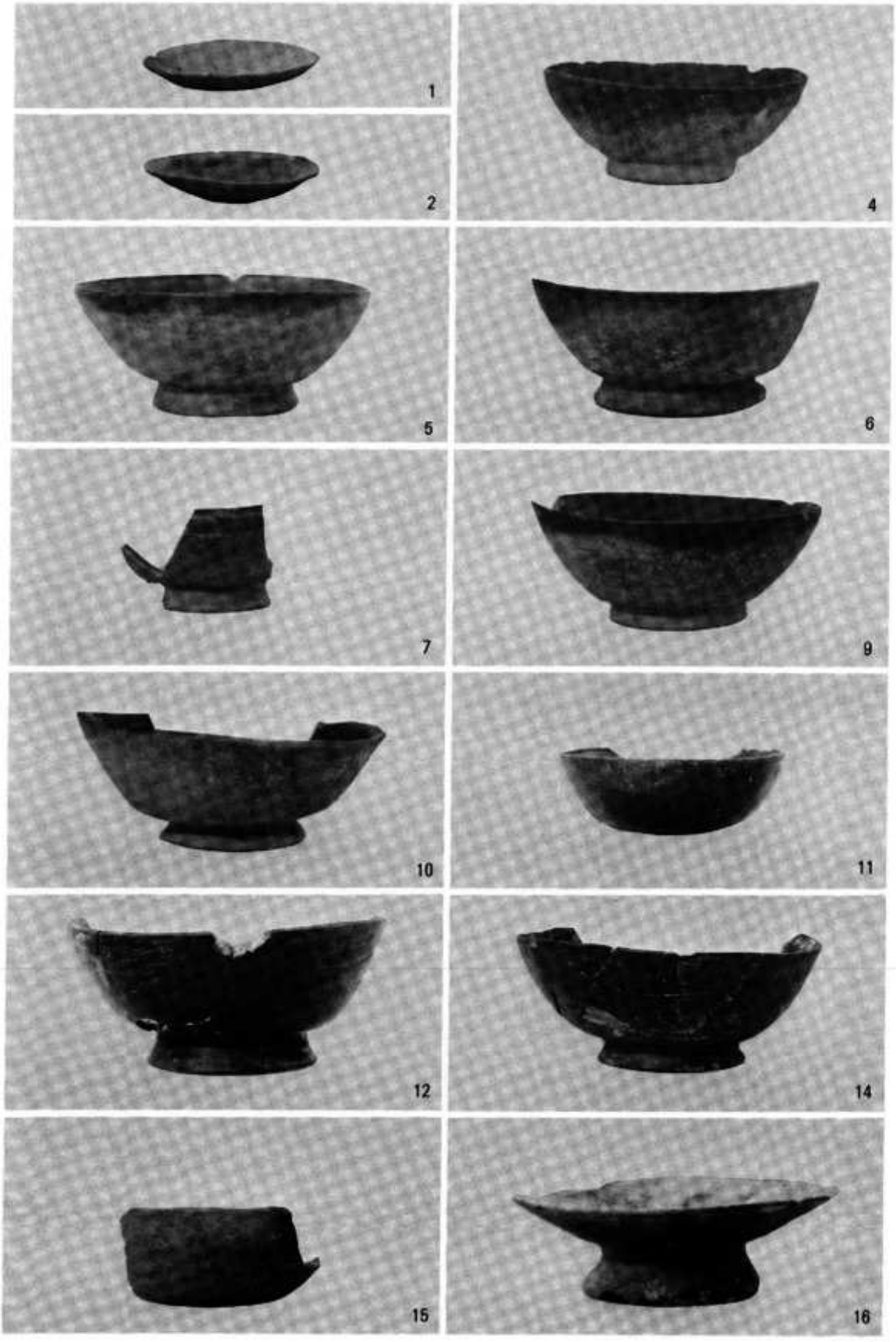


2.　溝跡1出土土器

図版10　前栽遺跡（第2次）　井戸跡1出土土器



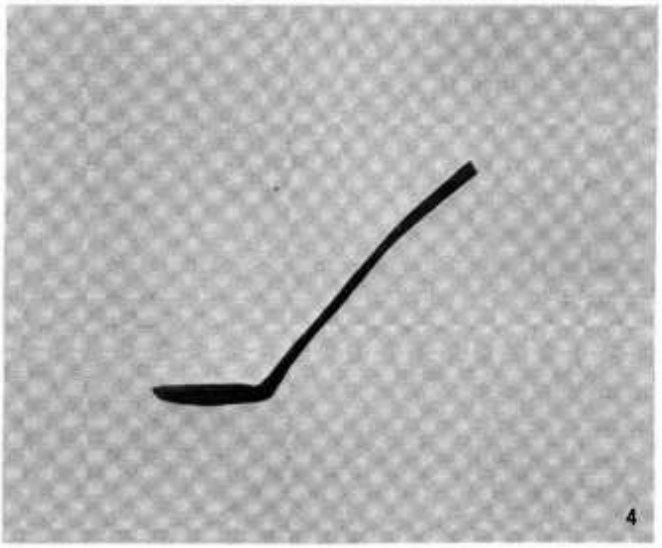
（1～13・1/3，14・1/5）


1
2
4
5
6
7
9
10
11
12
14
15
16

図版12　前栽遺跡（第2次）　井戸跡4出土土器

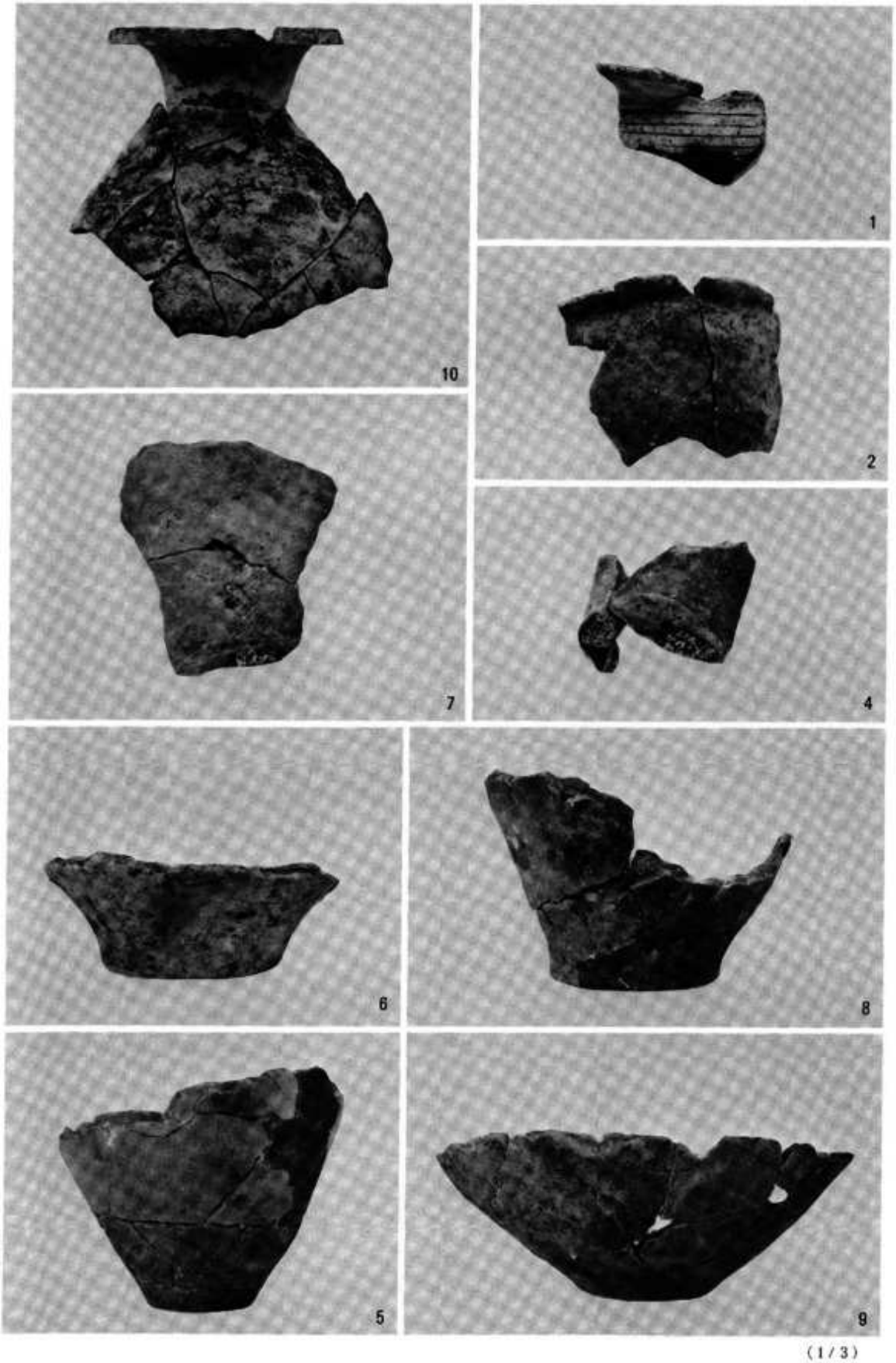
（1/3）

図版13　前栽遺跡（第2次）　井戸跡2・4出土木器



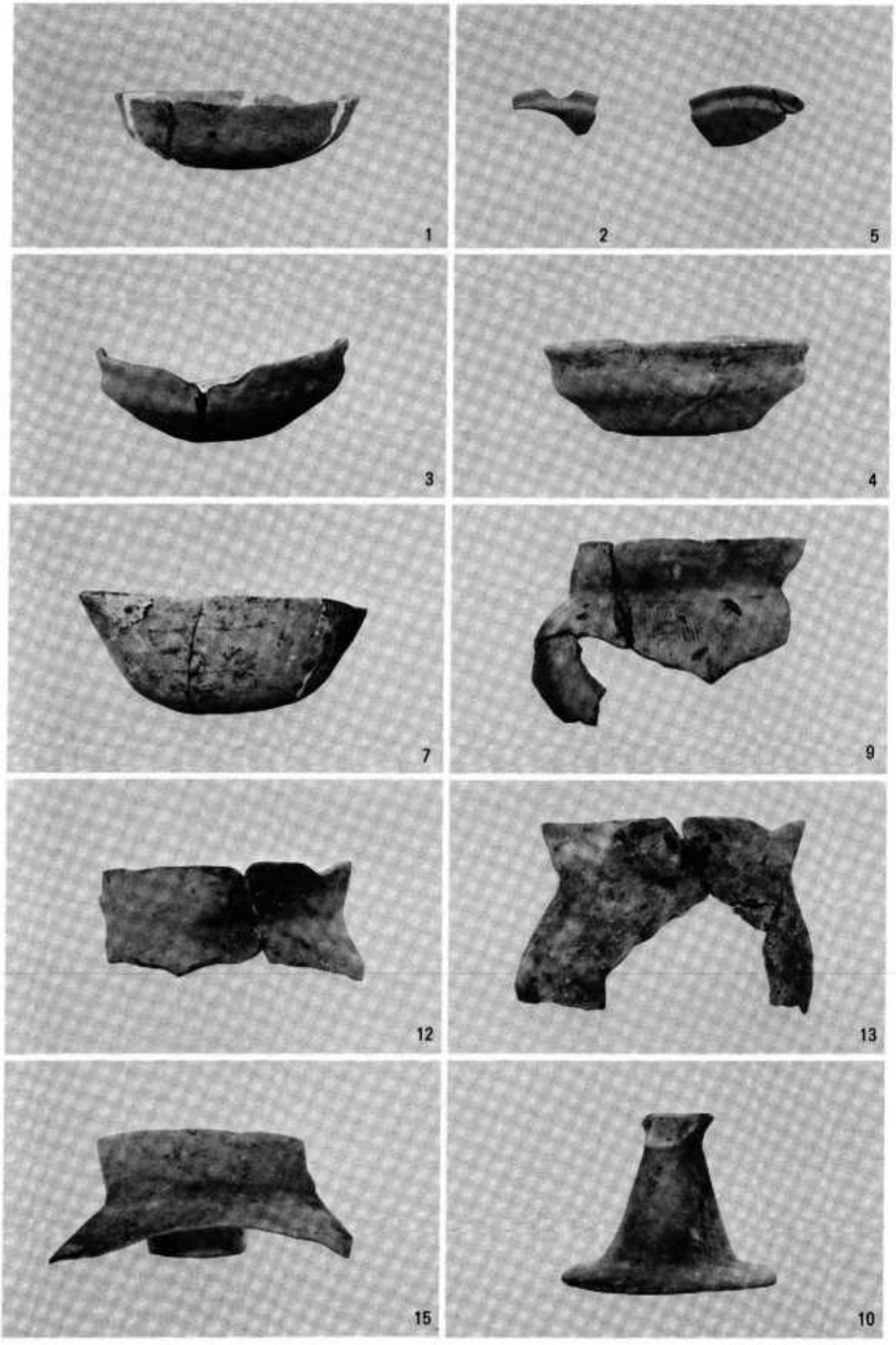
4は複製（1/5）

図版14　前栽遺跡（第2次）　弥生時代溝跡出土土器



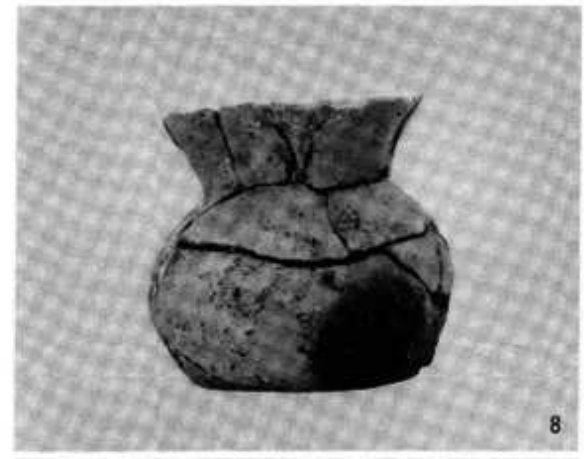
（1/3）

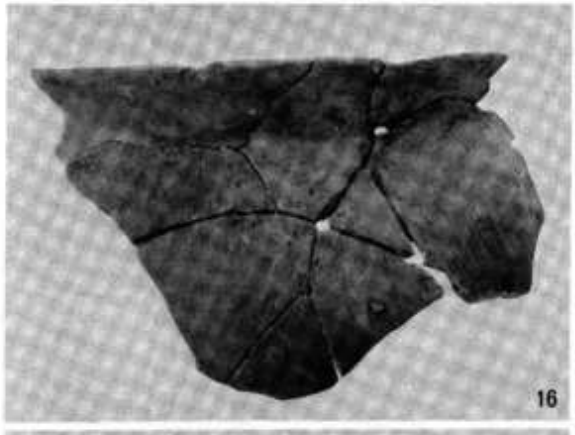
図版15　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土器（1）

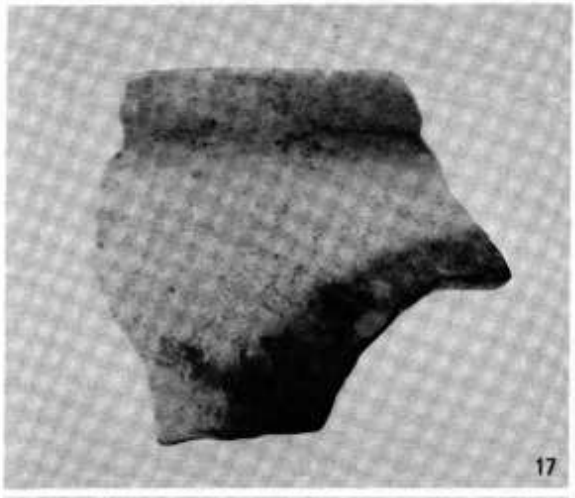


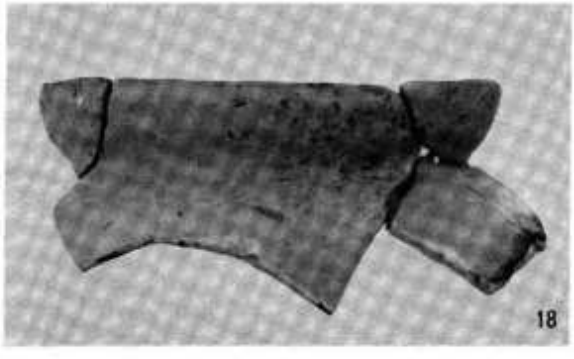
1/3（2.5を除く）

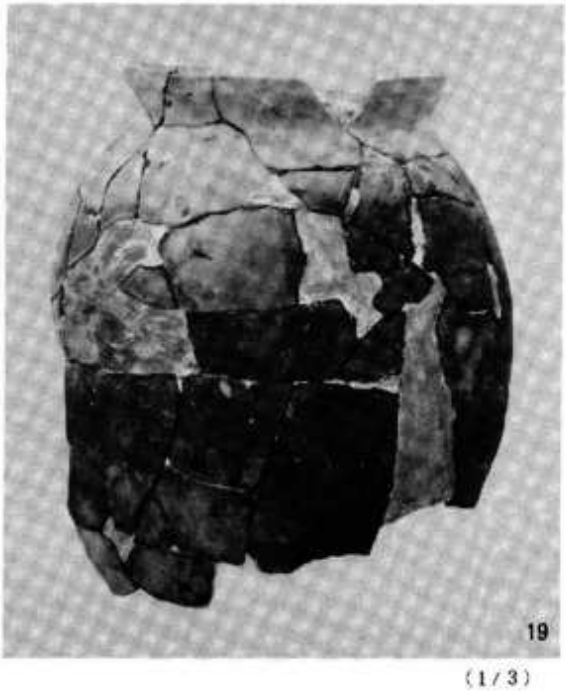
図版16　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土器（2）





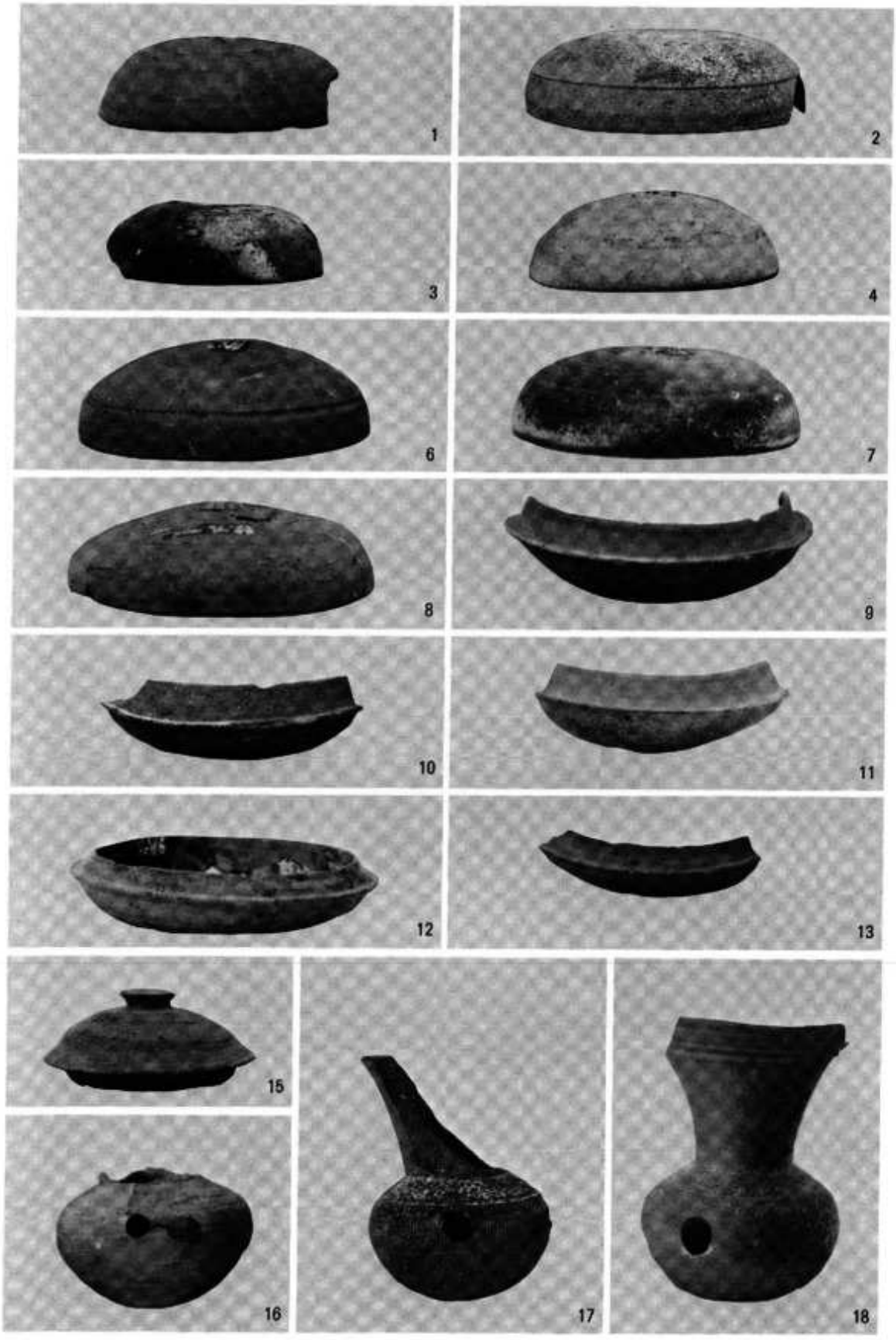






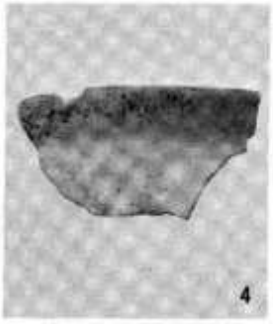
（1/3）

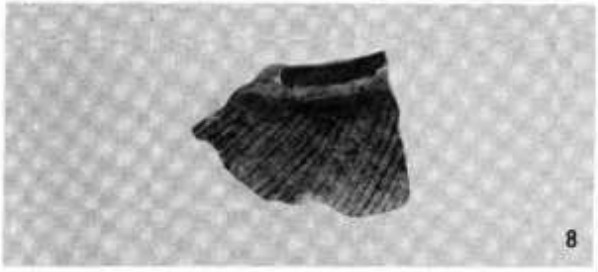
図版17　前栽遺跡（第2次）　溝跡3出土土器（3）

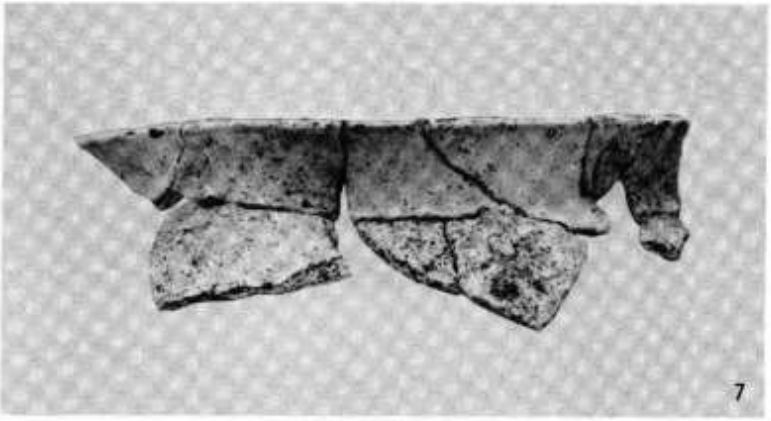


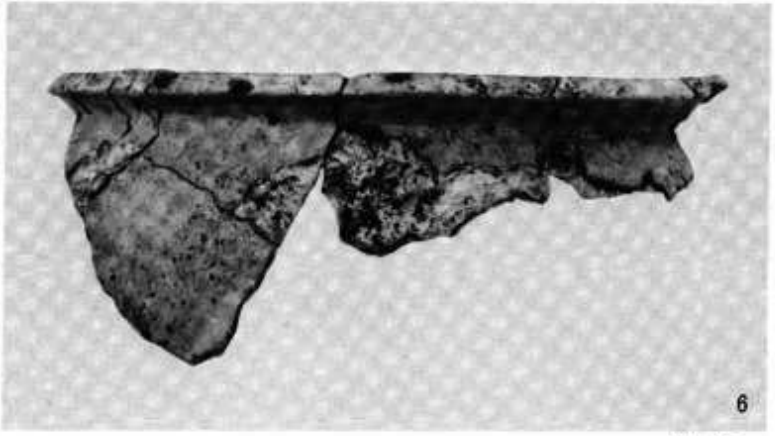
（1/3）

図版18　前栽遺跡（第2次）　包含層出土土器（1）



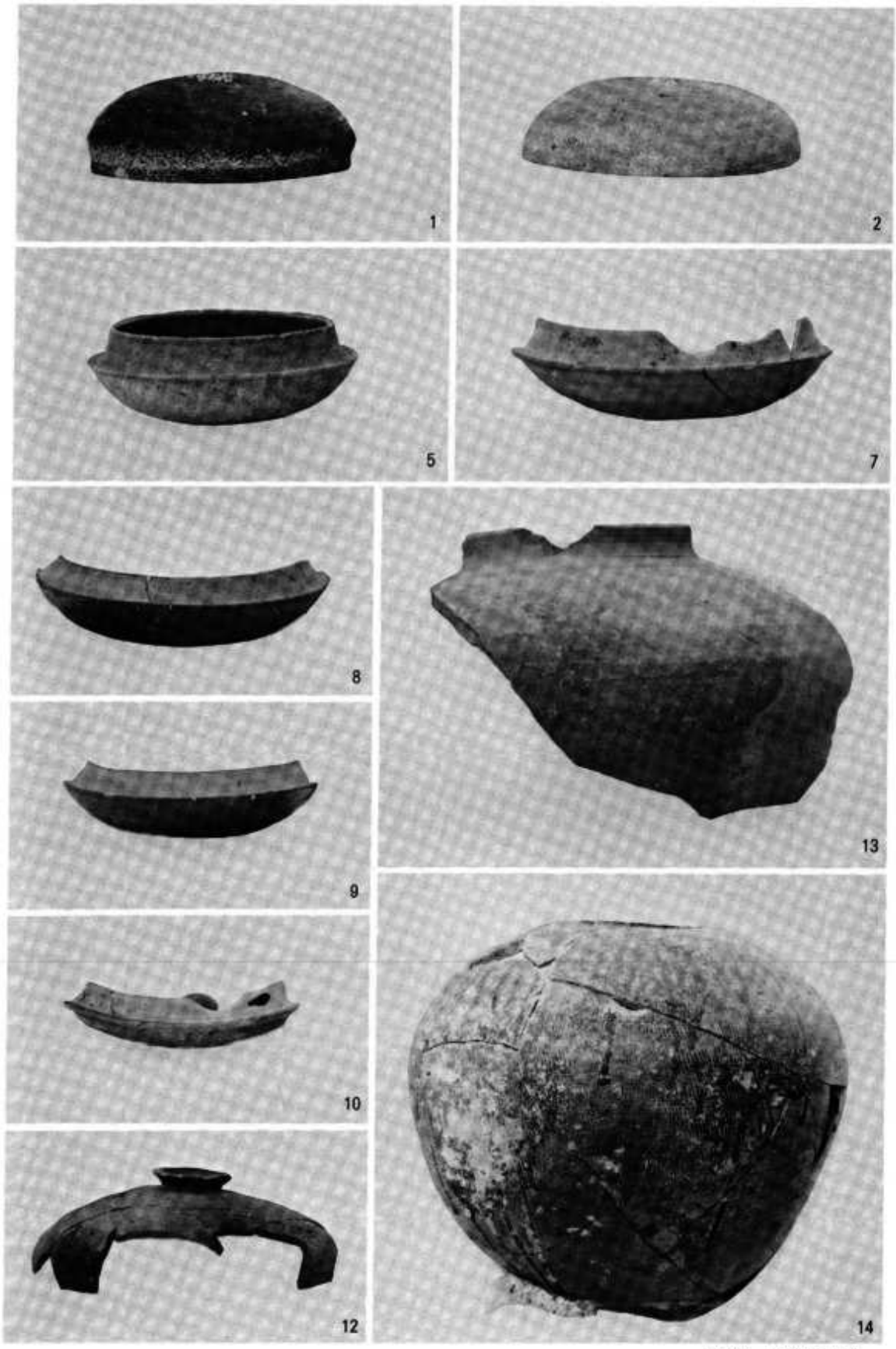






(1/3)

図版19　前栽遺跡（第2次）　包含層出土土器（2）



（1/3，14のみ1/5）

昭和62年3月31日©

天理市埋蔵文化財調査報告　第3集

前　栽　遺　跡（第2次）

－弥生時代から鎌倉時代遺跡の調査－

発行
編集　天理市教育委員会
天理市川原城町605番地

印刷　明新印刷株式会社
奈良市橋本町36番地